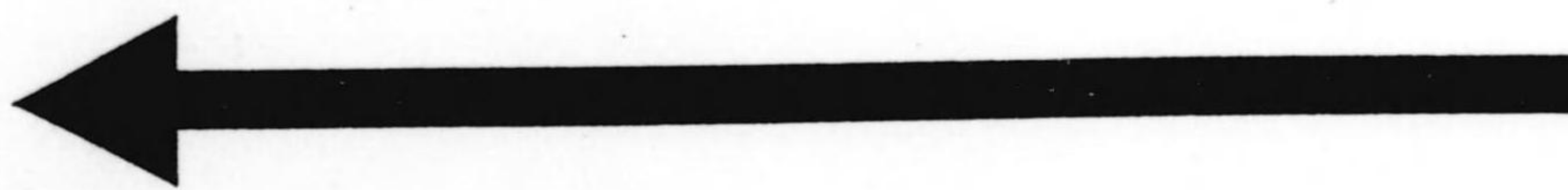


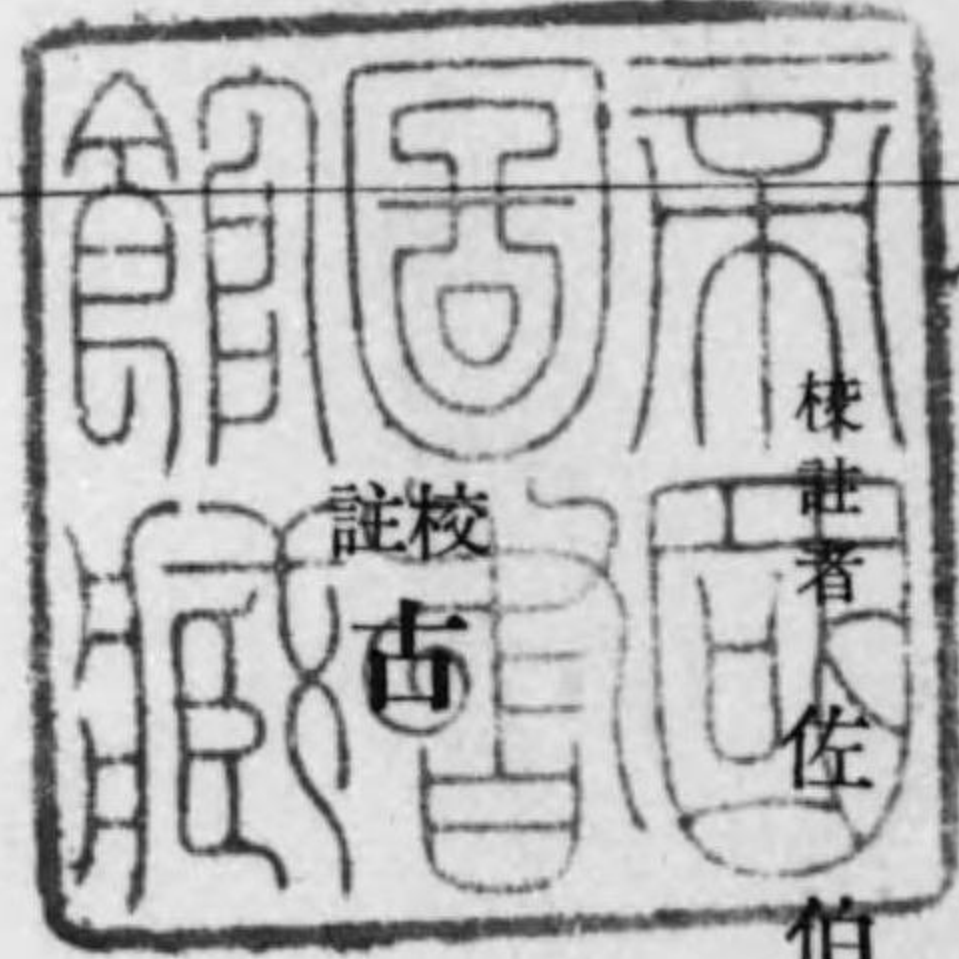
319
697



始



特 231
693



佐伯
常磨

事
記
全

東京
國民圖書株式會社



はしがき

- 一、本書は、高等諸學校の教科書にあて、兼ねて一般國文學の自習書として編纂しました。
- 一、抄本は教授の際種々の不便がありますから、完本を提供して、その取舍は教師の任意としました。自習書としても完本であるべきものと思ひます。
- 一、本文は、流布本によりましたが、大須本古事記(古典保存會本)、伊勢本古事記、古事記傳、難古事記傳、古事記裏書(古典保存會本)、古事記燈、古事記傳追繼考附録、古事記頭書、古史成文等を参考しました。
- 一、頭註は、授業の進行を速かならしめ、又自習者の便を考へて比較的多く載せました。
- 一、最後に系圖を添付しました。

序

臣安萬侶言。夫混元既凝。氣象未レ效。無レ名無レ爲。誰知_三其形。然乾坤初分。參神作_二造化之首。陰陽斯開。一靈爲_三羣品之祖。所以出_三入幽顯。日月彰_二於洗_レ目。浮_三沉海水。神祇呈_三於滌_レ身。故太素杳冥。因_三本教_二而識_三孕_レ土產_レ島之時。元始綿邈。賴_三先聖_二而察_三生_レ神立_レ人之世。寔知懸_レ鏡吐_レ珠。而百王相續。喫_レ劍切_レ蛇。以萬神蕃息歟。臣安萬侶言。夫混元既に凝りて、氣象未だ效はれず、名も無く爲も無し、誰か其の形を知らむ。然して乾坤初めて分れて、參神造化の首を作し、陰陽斯に開けて、一靈羣品の祖たり。所以に幽顯に出入して、日月目を洗ふに彰はれ、海水に浮沉して神祇身を滌くに呈はる。故太素の杳冥なる、本教に因りて土を孕み島を産み給ひし時を識り、元始の綿邈たる、先聖に頼りて神を生み人を立て給ひしの世を察らかにす。寔に知る、鏡を懸け珠を吐きて、百王相續ぎ、劍を喫ひ蛇を切りて、萬神蕃息することを。

議_三安河_二而平_三天下。論_三小濱_二而清_三國土。是以番仁岐命。初降_三于高千嶺。神倭天皇。經_二

歷于秋津島。化熊出爪。天劍獲于高倉。生尾遮徑。大鳥導于吉野。列儻獲賊。聞歌伏仇。即覺夢而敬神祇。所以稱賢后。望煙而撫黎元。於今傳聖帝。定境開邦。制于近淡海。正姓撰氏。勒于遠飛鳥。雖步驟各異。文質不同。莫不稽古以繩風猷於既類。照今以補典教於欲絕。賢飛鳥清原大宮。御大八洲。天皇御世。潛龍體元。洊雷應期。聞夢歌而想纂業。投夜水而知承基。然天時未臻。蟬蛻於南山。人事共洽。虎步於東國。皇輿忽駕。凌渡山川。六師雷震。三軍電逝。杖矛舉威。猛士煙起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。未移浹辰。氣沚自清。乃放牛息馬。愷悌歸於華夏。卷旌戢戈。舞詠停於都邑。歲次大梁。月踵夾鐘。清原大宮。昇即天位。安の河に議りて天下を平け、小濱に論ひて國士を清めき。是を以て番仁岐命、初めて高千の嶺に降り給ひ、神倭の天秋津島を経歴し給ふ。化熊爪を出でて、天劍高倉に獲、生尾徑を遮り、大鳥吉野に導く。儻を列ねて賊を攘ひ、歌を聞いて仇を伏す。即ち夢に覺りて神祇を敬ひ給ふ、所以に賢后と稱す。煙を望んで黎元を撫で給ふ、今に於て聖帝と傳ふ。境を定め邦を開きて、近淡海に制し給ひ、姓を正し氏を撰ひて、遠飛鳥に勒し給ふ。步驟各異に、文質同じからずと雖も、古を稽へて以て風猷を既に類れたるに繩し、今を

照らして以て典教を絶えむと欲するに補はずといふ事莫し。飛鳥清原の大宮に大八洲御しし天皇の御世に暨び、潛龍元を體し、洊雷期に應ず。夢の歌を聞きて業を纂がむ事を想ひ、夜の水に投りて基を承けむ事を知ろしめす。然れども天の時未だ臻らず、南山に蟬の如く蛻け給ひ、人事共に洽くして、東國に虎の如く歩み給ひき。皇輿忽ち駕して、山川を凌渡り、六師雷の如く震ひ、三軍電の如く逝く。杖矛威を擧げて、猛士煙の如く起り、絳旗兵を耀かして、凶徒瓦の如く解けつ。未だ浹辰を移さずして、氣沚自ら清まりぬ。乃ち牛を放ち馬を息へ、愷悌して華夏に歸り、旌を卷き戈を戢め、舞詠して都邑に停まり給ふ。歲大梁に次り、月夾鐘に踵りて、清原の大宮にして、昇りて天位に即き給ふ。

道軼軒后。德跨周王。握乾符而總六合。得天統而包八荒。乘三氣之正。齊五行之序。設三神理以獎俗。敷英風以弘國。重加智海浩瀚。潭探上古。心鏡煒煌。明視先代。於是天皇詔之。朕聞諸家之所責帝紀及本辭。既達正實。多加虛僞。當今之時。不改正其失。未經幾年。其旨欲滅。斯乃邦家之經緯。王化之鴻基焉。故惟撰錄帝紀。討蕞舊辭。削僞定實。欲流後葉。時有舍人。姓稗田名阿禮。年是二十八。

爲人聰明。度目誦口。拂耳勒心。即敕語阿禮。令誦習帝皇日繼及先代舊辭。然運移世異。未行其事。伏惟皇帝陛下。得一光宅。通三亭育。御紫宸而德被三馬蹄之所。極坐三女屬而化照三船頭之所。逮日浮重暉。雲散非煙。連柯并穗之瑞。史不絶書。列烽重譯之貢。府無空月。可謂名高文命。德冠天乙矣。於焉惜舊辭之誤忤。正先紀之謬錯。以和銅四年九月十八日。詔臣安萬侶。撰錄稗田阿禮所誦之敕語舊辭。以獻上者。

道軒后に軼ぎ、徳周王に跨え給ふ。乾符を握りて六合を摠べ、天統を得て八荒を包ね給ふ。二氣の正しきに乗じ、五行の序を齊へ給ふ。神理を設けて以て俗を獎め、英風を敷きて以て國を弘め給ふ。重加智海浩瀚にして、潭く上古を探り、心鏡焯焯として、明らかに先代を親給ふ。是に於て天皇詔し給はく、朕聞く諸家の實たる所の帝紀及び本辭、既に正實に違ひ多く虚偽を加ふと。今の時に當りて其の失を改めずば、未だ幾の年を経ずして、其の旨滅びむとす。斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故惟帝紀を撰録し、舊辭を討覈して、偽を削り實を定め、後葉に流へむとす詔給ふ。時に舍人あり、姓は稗田名は阿禮。年はれ二十八。人と爲り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば

心に勒す。即ち阿禮に敕語して、帝皇の日繼及び先代の舊辭を誦み習はしむ。然れども運移り世異にして、未だ其の事行はれず。伏して惟ふに皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育し給ふ。紫宸に御して徳馬蹄の極むる所に被り、女屬に坐して化船頭の逮ふ所を照らし給ふ。日浮びて暉を重ね、雲散りて煙に非ず。柯を連ね穗を并すの瑞、史書す事を絶たず。烽を列ね譯を重ねるの貢、府空しき月無し。名は文命より高く、徳は天乙にも冠れりと謂ひつべし。於焉舊辭の誤り忤るを惜しみ、先紀の謬り錯れるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶に詔して、稗田の阿禮が誦む所の敕語の舊辭を撰録して、以て獻上せしむてへり。

謹隨三詔旨。子細探據。然上古之時。言意竝朴。敷文構句。於字即難。已因訓述者詞不逮心。全以音連者。事趣更長。是以今或一句之中。交用音訓。或一事之内。全以訓錄。即辭理互見。以注明意。況易解更非注。亦於姓日下。謂玖沙訶。於名帶字。謂多羅斯。如此之類。隨本不改。大抵所記者。自天地開闢。始以訖于小治田御世。故天御中主神以下。日子波限建鷦草葺不合尊以前。爲三上卷。神倭伊波禮毘

古天皇以下。品陀御世以前。爲二中卷。大雀皇帝以下。小治田大宮以前。爲三下卷。并錄三卷。謹以獻上。臣安萬侶。誠惶誠恐。頓首頓首。

和銅五年正月二十八日。正五位上勳五等太朝臣安萬侶謹上。

謹みて詔旨に隨ひ、子細に採り據ふ。然るに上古の時、言意竝に朴にして、文を敷き句を構ふる事、字に於て即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に逮ばず。全く音を以て連ねたるは、事の趣更に長し。是れを以て今或は一句の中、音訓を交へ用ゐる、或は一事の内、全く訓を以て録す。即ち辭の理見え匡きは、注を以て意を明らかにす、況んや解り易きは更に注せず。亦、姓の目下に、玖沙訶と謂ひ、名の帶の字に多羅斯と謂ふ。此くの如きの類は本に隨つて改めず。大抵記す所は、天地の開闢より始めて、以て小治田の御世に訖ふ。故天御中主神より以下、日子波限建鵜草葺不合尊より以前を上卷と爲し、神倭伊波禮毘古の天皇より以下、品陀の御世より以前を中卷と爲し、大雀の皇帝より以下、小治田の大宮より以前を下卷と爲す。并せて三卷を録し、謹みて以て獻上す。臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首頓首。

和銅五年正月二十八日 正五位上勳五等太朝臣安萬侶 謹上。

古事記目次

上卷

天地初發……………二五

神代七代……………二六

國土の修理固成……………二七

伊邪那岐伊邪那美二神の神婚……………二七

太占……………二九

國土成生(その一)……………二九

同(その二)……………三一

神々の出生(その一)……………三一

同(その二)……………三二

伊邪那美神の神遊……………三三

神々の化生(その一).....三五
 同 (その二).....三六
 黄泉國.....三六
 黄泉軍.....三八
 黄泉比良坂.....三九
 阿波岐原の禊祓(その一).....四一
 同 (その二).....四二
 三貴子の出生.....四四
 三貴子の分治委任.....四四
 速須佐之男命の神逐.....四五
 速須佐之男命の昇天.....四六
 天の安河の宇氣比.....四八
 御子詔別.....五〇
 宇氣比の八神.....五〇

速須佐之男命の勝佐備.....五一
 天の石屋戸(その一).....五二
 同 (その二).....五四
 千位置戸.....五六
 大氣津比賣神.....五六
 肥の河.....五七
 八俣遠呂智.....五七
 草那藝之大刀.....五九
 須賀の宮.....六〇
 八雲立つ.....六〇
 速須佐之男命の御子.....六一
 大國主神の出生.....六二
 稻羽之素菟.....六二
 手開山の赤猪.....六五

次

10

冰目矢	六六
須勢理毘賣命	六七
沼河北賣	七一
八千矛神の御詠	七一
須勢理毘賣命の御詠	七五
宇伎由比	七六
大國主神の御子	七七
大國主神の御裔	七七
少名毘古那神	七九
大國主神	八〇
大年神の御子	八一
羽山戸神の御子	八二
天照大御神の大詔	八二
天若日子	八四

次

一一

雉之頓使	八六
喪屋	八七
喪山	八八
建御雷之男神	八九
天の逆手	九〇
建御名方神	九一
大國主神の國土奉獻	九二
天の御舍	九三
邇々藝命	九五
天孫降臨の大命	九五
猿田毘古神の先驅奉仕	九六
五伴緒	九七
三種の神器	九七
天孫隨從諸神の鎮座	九八

五部神……………九八

天孫降臨……………九九

猿女君……………一〇〇

木花之佐久夜毘賣……………一〇二

海幸山幸……………一〇四

海神の宮……………一〇七

大きなる歎き……………一〇九

鹽盈珠鹽乾珠……………一一一

鵜葺草葺不合命の出生……………一一二

赤玉の御詠……………一一四

鵜葺葺不合命の御子……………一一五

中卷

神武天皇の東遷……………一一六

宇豆毘古……………一一七

那賀須泥毘古……………一一八

熊野の村……………一一九

八咫鳥の嚮導……………一二一

兄宇迦斯弟宇迦斯……………一二二

宇陀の高城……………一二四

土雲平定……………一二五

登美毘古討伐……………一二六

兄師木弟師木……………一二七

邇藝速日命……………一二七

白檮原の宮……………一二八

神武天皇の皇子……………一二八

比賣多々良伊須氣余理比賣……………一二九

高佐士野……………一三〇

次	一四
當藝志美々命の變	一三二
建沼河耳命の皇位繼承	一三四
日子八井命神八井耳命の御裔	一三四
綏靖天皇	一三五
安寧天皇	一三六
懿德天皇	一三七
孝昭天皇	一三八
孝安天皇	一三九
孝靈天皇	一四〇
孝靈天皇の皇子	一四一
孝元天皇	一四二
建内宿禰の子孫	一四三
開化天皇	一四五
開化天皇の御裔(その一)	一四六

同	(その二)	一四七
崇神天皇		一四九
伊勢神宮奉齋		一五一
意富多多泥古		一五一
皇威擴張		一五四
建波邇安王の叛		一五五
初國知らしし御眞木天皇		一五七
垂仁天皇		一五八
印色入日子命		一六〇
垂仁天皇の御裔		一六〇
沙本毘古王の叛		一六一
本牟智和氣皇子(その一)		一六六
同	(その二)	一六七
宇氣比		一六八
次		一五

檳榔之長穗宮……………一七〇

圓野比賣……………一七一

非時の香の菓……………一七二

景行天皇……………一七三

景行天皇の皇子……………一七五

兄比賣弟比賣……………一七六

この御代の施設……………一七七

小碓命の勇猛……………一七七

熊曾討伐……………一七八

出雲建……………一八一

東夷征伐……………一八二

燒遣……………一八三

弟橘比賣……………一八四

吾孀はや……………一八五

酒折宮……………一八六

美夜受比賣……………一八七

伊服岐能山……………一八八

尾津の一つ松……………一八九

能煩野……………一九〇

白鳥御陵……………一九二

倭建命の御子……………一九三

成務天皇……………一九五

仲哀天皇……………一九六

訶志比の宮……………一九七

國大祓……………一九九

新羅親征……………二〇〇

末羅縣……………二〇二

香坂忍熊二王の叛……………二〇二

氣比大神……………二〇五

酒樂……………二〇六

應神天皇……………二〇七

宇遲和紀郎子の立太子……………二〇九

矢河枝比賣……………二一一

髮長比賣……………二一三

百濟朝貢……………二一六

須々許理……………二一七

大山守命の非望……………二一七

大雀命、和紀郎子の相讓……………二二一

天之日矛……………三三一

玉津寶……………三二二

秋山之下、冰壯夫、春山之霞壯夫……………三二三

若野毛二俣王の御裔……………三二六

下卷

仁德天皇……………三二九

御名代……………三三〇

御仁政……………三三一

黒日賣……………三三三

吉備行幸……………三三四

御津の前……………三三五

山代川……………三三五

奴理能美……………三三六

鳥山……………三三七

丸邇臣口子……………三三七

三色之奇蟲……………三三九

八田若郎女……………三三九

速總別王……………二四一

倉椅山……………二四二

玉 釧……………二四三

日女島……………二四四

枯 野……………二四五

履仲天皇……………二四六

墨江中王の叛……………二四七

曾婆訶理……………二四九

藏の官……………二五二

反正天皇……………二五二

允恭天皇……………二五三

盟神探湯……………二五四

輕太子と輕大郎女……………二五五

輕太子と穴穗王子……………二五七

伊余の湯……………二五九

夜麻多豆……………二六〇

安康天皇……………二六一

目弱王の變……………二六三

大長谷王子……………二六四

都夫良意美……………二六五

蚊屋野……………二六六

意富祁王と袁祁王……………二六八

雄畧天皇……………二六九

若日下部王……………二六九

赤猪子……………二七二

吉野の童女……………二七四

阿岐豆野……………二七五

葛城山の怒猪……………二七七

一言主の大神……………二七七

金鉏の岡……………二七九

三重の采女(その一)……………二七九

同 (その二)……………二八一

清寧天皇……………二八三

志自牟の新室うたけ……………二八四

歌垣……………二八六

意富祁袁祁二王の相讓……………二八八

顯宗天皇と置目老嫗……………二八八

御陵の土……………二九一

仁賢天皇……………二九三

武烈天皇……………二九四

繼體天皇……………二九五

安閑天皇……………二九七

宣化天皇……………二九八

欽明天皇……………二九八

敏達天皇……………三〇〇

用明天皇……………三〇二

崇峻天皇……………三〇三

推古天皇……………三〇四

系圖……………三〇五

○古事記上卷「ふる
ることぶみかみつま
き」

古事記

上卷

○神獨 御獨身の神
○國稚く 地質學的
にも地殼が未だ十分
に凝結して居ない事
を指してゐる。

○水母なす 「たゞ
よへる」の枕詞と見
てよい「なす」は「の
如き」の意。
○葦芽 葦の芽、葦
の芽のすく／＼と伸
びる様に盛んな勢ひ
を指してゐる。

天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神。阿麻下天云次高御產巢日神。次神產巢日神。此三柱神者。竝獨神成坐而隱身也。次國稚如浮脂而。久羅下那洲多陀用幣疏之時。疏字以上如葦牙因萌騰之物而。成神名。宇麻志阿斯訶備比古遲神。此神名次天之常立神。訓常云登許。訓立云多知。此二柱神亦獨神成坐而隱身也。以上五柱神者別天神。

天地のはじめの時、高天の原になりませる神の御名は、天の御中主の神。次に高御產巢日の神。次に神產巢日の神。この三柱の神は竝獨神なりまして御身を隠したまひき。次に國稚く浮き脂の如くにして、水母なすたよへる時に、葦芽のごと萌え騰るものに入りて、なりませる神の御名は、宇麻志阿斯訶備比古遲の神。次に天の常立の神。この二柱の神も亦ひとり神なりまして、御身を隠したまひき。

上のくだり五柱の神は、こと天つ神、

次成神名。國之常立神。訓常立次豐雲上野神。此二柱神亦獨神成坐而。隱身也。次成神名。宇比地邇上神。次妹須比智邇去神。此二神名次角枝神。次妹活枝神。柱次意富斗能地神。次妹大斗乃辨神。此二神名次淤母陀琉神。次妹阿夜上訶志古泥神。此二神名次伊邪那岐神。次妹伊邪那美神。此二神名亦以音如上

上件自三國之常立神以下。伊邪那美神以前。并稱三神世七代。上二柱。獨神各云二代。次雙十神。各合三神云二代一也。次になりませる神の御名は、國の常立の神。次に豐雲野の神。この二柱の神も亦ひとり神なりまして、御身を隠し給ひき。

次になりませる神の御名は、宇比地邇の神。次に妹須比智邇の神。次に角枝の神。次に妹活枝の神。次に意富斗能地の神。次に妹大斗乃辨の神。次に游母陀琉の神。次に妹阿夜訶志古泥の神。次に伊邪那岐の神。次に妹伊邪那美の神。

上の件、國の常立神より以下、伊邪那美の神まで、并せて神世七代とまをす。

○命もちて 御命令
○詔ちて 仰有つて
○天の沼矛 玉で給めた矛。「沼」は玉の意。
○言よさす 委任する。「よさす」は「寄す」の伸びた語。
○故 かかれは、故にの意。
○こをろ 要るの伸びた音。
○淤能基呂島 自ら覆り固つた島の意。

於是天神諸命以。詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神。修理固成是多陀用幣流之國。賜天沼矛而。言依賜也。故二柱神立。多志。天浮橋而。指三下其沼矛以畫者。鹽許袁呂許袁呂邇。此七字。畫鳴。志。而。引上時。自其矛末。垂落之鹽。累積成島。是淤能基呂島。自淤以下四字以音
こ、に天つ神諸の命もちて、伊邪那岐の命、伊邪那美の命二柱の神に、この漂蕩へる國を造り固めなせと詔ちて、天の沼矛を賜ひて、言よさし賜ひき。故二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下して畫き給へば、鹽こをろくに畫きなして、引き上げ給ふ時に、その矛の先より滴る鹽、積りて島となる。これ淤能基呂島なり。

於其島天降坐而。見立天之御柱。見立八尋殿。於是問其妹伊邪那美命曰。汝身者如何成。答曰吾身者成不。成合一處在上。爾伊邪那岐命詔。我身者成而成餘處一處在。故以此吾身成餘處。刺塞汝身不。成合一處上而。爲生。成國土。奈何。調生云字。卒下效此。伊邪那美命答曰然善。爾伊邪那岐命。詔然者吾與汝行。邇逢是天之御柱而。爲中美斗能麻具波比。此七字。以音如此云期。乃詔汝者自右邇逢。我者自左邇逢。約竟以邇時。伊

○見立て 「見」は自らの意。
○八尋殿 八は數多いの云ふ美稱。

○あなによし愛少男 あ、美しい立派な男よ。
○女を言先立ちて云 云 女が先に言葉を掛けては縁起が悪い
○隱所に興して 夫婦の契りを結びなすつて。

邪那美命先言三阿那邇夜志愛上袁登古袁。此十字以後伊邪那岐命言三阿那邇夜志愛上袁登賣袁。各言竟之後。告其妹曰女人先言不レ良。雖然久美度邇。此四字興而。生子水蛭子。此子者入葦船而流去。次生淡島。是亦不レ入三子之例。

その島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき。こゝにその妹伊邪那美の命に、「汝が身はいかになれる。」と問ひ給へば、「吾が身はなりく／＼てなりあはざる處一處あり。」と申し給ひき。こゝに伊邪那岐の命のり給はく、「我が身はなりく／＼てなり餘れる處一處あり。かれ此の吾が身のなりあまれる處を、汝が身のなりあはざる處にさし塞ぎて、國生みなさんと思ふはいかに。」と宣り給へば、伊邪那美の命、「しか善けん。」と申し給ひき。こゝに伊邪那岐の命、「然らば吾と汝と是の天の御柱を歩き廻り逢ひて御所の邊合せん。」と宣り給ひき。かく云ひちぎりて、「乃ち汝は右より廻り逢へ。我は左より廻り逢はん。」と宣り給ひ、ちぎり竟へて廻ります時に、伊邪那美の命先づ、「あなによし愛少男を。」と宣り給ひ、後に伊邪那岐の命、「あなによし愛少女を。」と宣り給ひき。各宣り給ひ竟へて後に、其の妹に、「女を言先立ちてふさはす。」と宣り給ひき。然れども、隱所に興して、御子ひる子を生み給ひき。此の御子は葦船に入れて流しすてつ。次に淡島を生み給ひき。

是も御子の數には入らず。

於是二柱神議云。今吾所レ生之子不レ良。猶宜白天神之御所。即共參上。請天神之命。爾天神之命以。布斗麻邇爾。此五字ト相而詔之。因三女先言而不レ良。亦還降改言。

こゝに二柱の神議り給ひつらく、「今吾が生めりし御子ふさはす、なほ天つ神のみもとに申すべし。」と宣り給ひて、即ち共にまる上りて、天つ神のみことを請ひ給ひき。こゝに天つ神のみこともちて、太占にうらへて宣り給ひつらく、「女をこと先立ちしによりてふさはす、また還り降りて改め云へ。」と宣り給ひき。

故爾反降。更往邇其天之御柱如先。於是伊邪那岐命。先言三阿那邇夜志愛上袁登賣袁。後妹伊邪那美命。言三阿那邇夜志愛上袁登古袁。如此言竟而。御合。生子淡道之穗之狹別島。訓別云和氣下效此。次生伊豫之二名島。此島者身一而有四面四。每面有レ名。故伊豫國謂三愛上比賣。此三字以音讀岐國謂飯依比古。粟國謂大宜都比賣。此四字土左國謂建依別。次生隱伎之三子島。亦名天之忍許呂別。許呂二次生筑紫島。此島亦身一而有

○太占 「ふと」は美稱「まに」は神のまにまにといふ意味から今日の所謂うらなひとなつた。鹿の肩の骨を焼いて吉凶を占ふ方法をいふ。

面四。每面有レ名。故筑紫國謂_二白日別_一。豐國謂_二豐日別_一。肥國謂_二建日向日豐久士比泥別_一。自_レ泥_レ以_レ音_レ熊會國謂_二建日別_一。會_レ字_レ次生_二伊伎島_一。亦名謂_二天比登都柱_一。自_レ比_レ至_レ都_レ以_レ音_レ調_レ天_レ如_レ天_レ次生_二津島_一。亦名謂_二天之狹手依比賣_一。次生_二佐度島_一。次生_二大倭豐秋津島_一。亦名謂_二天御虛空豐秋津根別_一。故因_二此八島先所生_一。謂_二大八島國_一。

○御合ひまして 御夫婦の契りを結ばれて。

かれ即ち反り降りまして、更にかの天の御柱をさきのごと行きめぐり給ひき。こゝに伊邪那岐の命、先づ、「あなにやし愛少女を。」と宣り給ひ、後に妹伊邪那美の命、「あなにやし愛少女を。」と宣り給ひき。かく宣り給ひ竟へて、御合ひまして、御子淡道之穗之狹別の島を生み給ひき。次に伊豫之二名の島を生み給ふ。此の島は身一つにして面四つあり。面毎に名あり。かれ伊豫の國を愛比賣と云ひ、讃岐の國を飯依比古と云ひ、粟の國を大宜都比賣と云ひ、土佐の國を建依別と云ふ。次に隱岐の三子の島を生み給ふ。亦の名は天之忍許呂別。次に筑紫の島を生み給ふ。この島も身一つにして面四つあり。面毎に名あり。かれ筑紫の國を白日別と云ひ、豊國を豐日別と云ひ、肥の國を建日向日豐久士比泥別と云ひ、熊曾の國を建日別といふ。次に壹岐の島を生み給ふ。亦の名は天比登都柱と云ふ。次に津島を生み給ふ。亦の名は天之狹手依比賣といふ。次に佐渡の島を生み給ふ。次に大倭豐秋

津島、亦の名は天御虛空豐秋津根別と云ふ。かれ此の八島ぞ先づ生みませる國なるによりて、大八島國といふ。

然後還坐之時。生_二吉備兒島_一。亦名謂_二建日方別_一。次生_二小豆島_一。亦名謂_二大野手上比賣_一。次生_二大島_一。亦名謂_二大多麻上流別_一。自_レ多_レ至_レ次生_二女島_一。亦名謂_二天一根_一。調_レ天_レ次生_二知訶島_一。亦名謂_二天之忍男_一。次生_二兩兒島_一。亦名謂_二天兩屋_一。自_二吉備兒島_一至_二天_一。さて後還りましし時に、吉備の兒島を生み給ふ。亦の名は建日方別といふ。次に小豆島を生み給ふ。亦の名は大野手比賣といふ。次に大島を生み給ふ。亦の名は大多麻流別といふ。次に女島を生み給ふ。亦の名は天一根といふ。次に知訶の島を生み給ふ。亦の名は天之忍男といふ。次に兩兒の島を生み給ふ。亦の名は天兩屋といふ。

既生_レ國竟。更生_レ神。故生_レ神名大事忍男神。次生_二石土屋古神_一。調_レ石_レ云_二伊波_一亦_レ毘古_レ次生_二石巢比賣神_一。次生_二大戸日別神_一。次生_二天之吹上男神_一。次生_二大屋毘古神_一。次生_二風木津別之忍男神_一。調_レ風_レ云_二加那_一。次生_二海神名大綿津見神_一。次生_二水戸神名速秋津日子神_一。

次妹速秋津比賣神。自大事忍男神一至秋津比賣神一并十神
 既に國を生み竟へて、更に神を生みます。かれ生みませる神の御名は、大事忍男の神、次に石土昆古の神を生みまし、次に石巢比賣の神を生みまし、次に大戸日別の神を生みまし、次に天之吹男の神を生みまし、次に大屋昆古の神を生みまし、次に風木津別之忍男の神を生みまし、次に海の神、御名は大綿津見の神を生みまし、次に水戸の神、御名は速秋津日子の神、次に妹速秋津比賣の神を生みましき。

此速秋津日子速秋津比賣二神。因河海持別而生神名沫那藝神。那藝二字以レ次沫那美神。那美二字以レ次煩那藝神。次煩那美神。次天之水分神。調分云久麻。次國之水分神。音下效此。次天之久比奢母智神。自レ久以下五字。次國之久比奢母智神。自沫那藝神一至國之久神。比奢母智神一并八神。次生風神名志那都比古神。此神名。次生木神名久久能智神。亦以音。次生三山神名大山上津見神。次生野神名鹿屋野比賣神。亦名謂野椎神。自志那都比古神一至野椎一并四神。此大山津見神。野椎神二神。因山野持別而。生神名天之狹土神。調土云豆。次國之狹土神。次天之狹霧神。次國之狹霧神。次天之間戸神。次國之間戸神。次大戸惑子神。調惑云麻。刀次大戸比下效此。

惑女神。自天之狹土神至大次戸惑女神一并八神。生神名鳥之石楠船神。亦名謂天鳥船。次生大宜都比賣神。此神名。以音。次生火之夜藝速男神。以音。亦名謂火之炫昆古神。亦名謂火之迦具土神。加具二字。因生此子。美蕃登。此三字。見炙而病臥在。多具理邇。此四字。生神名金山昆古神。調金云迦。次金山昆賣神。次於尿成神名波邇夜須昆古神。此神名。次波邇夜須昆賣神。此神名亦。次於尿成神名彌都波能賣神。次和久産巢日神。此神之子謂豊字氣昆賣神。四字以音。故伊邪那那美神者。因生火神。遂神避坐也。自天鳥船至豊字氣昆賣神一并八神。凡伊邪那岐伊邪那美二神。共所生鳥壹拾肆島。神參拾伍神。是伊邪那美神未神靈。以前所生。唯意能基呂島者。非所生。亦姪子與。淡島不入入子之例。
 此の速秋津日子速秋津比賣二柱の神、河海に因りて持ち別けて、生みませる神の御名は沫那藝の神、次に沫那美神、次に煩那藝の神、次に煩那美神、次に天之水分の神、次に國之水分の神、次に天之久比奢母智の神、次に國之久比奢母智の神、次に風の神御名は志那都比古の神を生みまし、次に木の神御名は久久能智の神を生みまし、次に山の神御名は大山津見の神を生みまし、次に野の神御名は鹿屋野比賣の神を生みまし、亦の御名は野椎の神と申す。

此の大山津見の神野椎の神二柱の神、山野に因りて持ち別けて、生みませる神の御名は天之狹土の神、次に國之狹土の神、次に天之狹霧の神、次に國之狹霧の神、次に天之閻戸の神、次に國の閻戸の神、次に大戸惑子の神、次に大戸惑女の神。

次に生みませる神の御名は、鳥の石楠船の神、亦の御名は天の鳥船と申す。次に大宜都比賣の神を生みまし、次に火之夜藝速男の神を生みませ、亦の御名は火之炫昆古の神、亦の御名は火之迦具土の神と申す。此の御子を生みませに因り、美蕃登燃かえて病臥せり。

多具理になりませる神の御名は、金山昆古の神、金山昆賣の神、次に尿になりませる神の御名は、波邇夜須昆古の神、次に波邇夜須昆賣の神。次に尿になりませる神の御名は、彌都波能賣の神、次に和久産巢日の神、此の神の御子を豐宇氣昆賣の神と申す。かれ、伊邪那美之神は火の神を生みませるに因りて、遂に神避りましぬ。

凡て、伊邪那岐伊邪那美二柱の神、共に生みませる鳥、十四鳥。神、三十五柱。

故爾伊邪那岐命詔之。愛我那邇妹命乎。那邇二字以音下效此謂下易三子之一木乎乃匍匐御枕方。匍匐御足方而哭時。於三御淚二所成神。坐三香山之畝尾木本。名泣澤女神。故其所三神

○美蕃登 陰部。陰は和名抄に玉門玉蹠の通稱也とある。
○多具理 幅吐の意

○愛しき いくしと同語。
○那邇妹 なに(汝)わがいも、親しき我が妻の意。
○子の云々 最愛の我が妻は身を殺して一子を遺し神避りてしまつた。

○畝尾 山の尾。
○木の本 地名。

○十拳劍 長さ十握りの御劍。
○湯津石村 湯津は五百箇(いはつ)の約石村の村は葦の意。

避之伊邪那美神者、葬下出雲國與三伯伎國一堺比婆之山上也。

かれこ、伊邪那岐の命詔り給はく、「愛しき我が那邇妹の命や、子の一つ木に易へつるかも」と宣り給ひて、御枕べに匍匐ひ、御足べにはらばひて泣き給ふ時に、御涙に成りませる神は、香山之畝尾の木の本にます、御名は泣澤女の神、故その神避りましし伊邪那美之神は、出雲の國と伯伎の國との堺 比婆の山に葬しまつりき。

於是伊邪那岐命。拔下所御佩之十拳劍。斬其子迦具土神之頸。爾著其御刀前之血。走就湯津石村。所成神名。石拆神。次根拆神。次石筒之男神。三次著御刀本血亦。走就湯津石村。所成神名。蹇速日神。次樋速日神。次建御雷之男神。亦名建布都神。布都二字以音下效此亦名豐布都神。三次集御刀之手上血。自手候漏出。所成神名。訓漏云三閻於加效此以音下效此。次閻御津羽神。

上件自三石拆神以下。閻御津羽神以前。并八神者因御刀所生之神者也。是に伊邪那岐の命、み佩かせる十拳劍を抜きて、其の御子迦具土の神のみ首を斬り給ふ。爾にその御刀のさきにつける血、湯津石村にたばしりつきて成りませる神の御名は、石拆

○手上 御の柄

の神、次に根折の神、次に石筒之男の神、次に御刀の本につける血も、湯津石村にたばしりつきて成りませる神の御名は、甕速日の神、次は櫛速日の神、次に建御雷之男の神、亦の御名は建布都の神、亦の御名は豊布都の神、次に御刀の手上にあつまる血、手俣より漏き出て成りませる神の御名は、闇淤加美の神、次に闇御津羽の神。
上の件、石拆の神より下、闇御津羽の神まで、并せて八柱は、御刀に依りて生りませる神なり。

所殺迦具土神之於レ頭所成神名。正鹿山上津見神。次於レ胸所成神名。淤藤山津見神。
次於レ腹所成神名。奥山上津見神。次於レ陰所成神名。闇山津見神。次於レ左手所成神名。志藝山津見神。次於レ右手所成神名。羽山津見神。次於レ左足所成神名。原山津見神。次於レ右足所成神名。戸山津見神。自正鹿山津見神。至戸山津見神。并八神。故所斬之刀名。謂三天之尾羽張。亦名謂伊都之尾羽張。伊都二字以音。

於レ是欲相見其妹伊邪那美命。追往黄泉國。爾自殿騰戸一出向之時。伊邪那岐命語詔之。愛我那邇妹命。吾與汝所作之國。未作竟故可還。爾伊邪那美命答曰。悔哉不

速來。吾者爲黄泉戸喫。然愛我那勢命。入來坐之事恐故欲還。且具與黄泉

神相論。莫視我。如此白而。還入其殿内之間。甚久難待。故刺左之御美豆良。以音下。湯津津間櫛之男柱一箇取闕而。燭二火。入見之時。宇士多加禮斗呂呂岐耳。十

字以。於頭者大雷居。於胸者火雷居。於腹者黑雷居。於陰者拆雷居。於左手者若雷居。於右手者土雷居。於左足者鳴雷居。於右足者伏雷居。并八雷神成居。

殺さえましし迦具土の神の御頭になりませる神の御名は正鹿山津見の神、次に御胸になりませる神の御名は淤藤山津見の神、次に御腹になりませる神の御名は奥山津見の神、次に御陰になりませる神の御名は闇山津見の神、次に左の御手になりませる神の御名は志藝山津見の神、次に右の御手になりませる神の御名は羽山津見の神、次に左の御足になりませる神の御名は原山津見の神、次に右の御足になりませる神の御名は戸山津見の神。かれ斬り給へる御刀の名は天之尾羽張といふ、亦の名は伊都之尾羽張といふ。

こ、に其の妹伊邪那美の命を相見まく思ほして、黄泉國に追ひ出でましき。即ち殿騰戸より出でむかへます時に、伊邪那岐の命かたらひ給はく、「愛しきあが那邇妹の命、吾汝と作れりし國、未だ作り竟へずあれば還りまさね。」と宣り給ひき。こ、に伊邪那美の命の申

○天之尾羽張 尾は鋒、羽は刃、張は鋒の張つた形を表はす詞で御の櫛櫛。
○伊都 殿成。
○黄泉國 夜見國に同じ。

○黄泉戸喫ひしつ
黄泉の國のものを喰
べてしまつたの意。
○那勢の命 那は汝
勢は兄。
○御美豆良 髪を左
右に分けて結ぶ風俗
○湯津津間櫛の男柱
櫛の兩端の大きな
柱。
○蛆たかれとろゝぎ
て 蛆が一杯にたか
つて腐敗し切つて。
○雷の事は後世に憤
死した人などの雷と
化して荒れ廻る傳説
の多いのと思ひ合は
す事が出る。

し給はく、「悔しきかも、速く來まさずて、吾は黄泉戸喫ひしつ。然れども愛しき我が那勢の命入り來ませる事かしこければ還りなむを、先づつばらかに黄泉神とあけつらはむ、我をな見給ひそ。」かく申して、その殿内に入りませる程、いと久しく待ちかね給ひき。故左の御美豆良に刺させる湯津津間櫛の男柱一つ取り闕きて、一つ火ともして入り見ます時に、蛆たかれとろゝぎて、御頭には大雷居り、御胸には火雷居り、御腹には黒雷居り、御陰には拆雷居り、左の御手には若雷居り、右の御手には土雷居り、左の御足には鳴雷居り、右の御足には伏雷居り、并せて八くさの雷神なり居りき。

於是伊邪那岐命。見畏而逃還之時。其妹伊邪那美命言令見辱吾。即遣豫母都志許賣。此六字。令追。爾伊邪那岐命取黑御鬘。投棄。乃生蒲子。是摺食之間逃行。猶追。亦刺其右御美豆良之湯津津間櫛引闕而投棄。乃生笋。是拔食之間。逃行。且後者。於其八雷神。副二千五百之黄泉軍令追。爾拔下所御佩之十拳劍而。於後手。布伎部都。此四字。逃來。猶追。到黄泉比良坂。此二字。坂之坂本一時。取在。其坂本。桃子二箇。此待擊者。悉逃返也。爾伊邪那岐命告桃子。汝如助吾。於葦原中國。所宇都志伎。此

○見かしこみて一
目見て怖れをなして

○御鬘 上古には髪
草を以て頭髮の飾り
とした。

○笋 竹の子。

○比良坂 黄泉國と
現世との境。

○苦瀨 苦境。

字以 青人草之。落苦瀨而患惚時。可助告。賜名號意富加牟豆美命。自意至。美以音。こゝに伊邪那岐の命見かしこみて逃げ還ります時に、其の妹伊邪那美命、「あれに恥見せ給ひつ。」と申したまひて、やがて豫母都志許賣を遣はして追はしめき。かれ、伊邪那岐の命、黒御鬘を取りて投げうて給ひしかば、乃ち蒲子生りき。こをひりひ食む間に逃げいでますを、猶追ひしかば、亦その右の御美豆良に刺させる湯津津間櫛を引き闕きて投げうて給へば、乃ち笋生りき。こを抜き食む間に逃げいでましき。また後にはかの八くさの雷神に、千五百の黄軍を副へて追はしめき。かれ、みはかせる十拳劍を抜きて、後手にふきつゝ、逃げ來ませるを、猶追ひて黄泉比良坂の坂本に到る時に、其の坂本なる桃の實を三つとりて待ち撃ち給ひしかば、ことごとくに逃げ返りき。こゝに伊邪那岐の命桃に宣り給はく、「いまし吾を助けしがごと、葦原の中つ國にあらゆる現しき青人草の、苦瀨に落ちて苦しむ時に助けよ。」と宣り給ひて、意富加牟豆美の命といふ名をたまひき。

最後其妹伊邪那美命。身自追來焉。爾千引石。引塞其黄泉比良坂。其石置中。各對立而。度事戸之時。伊邪那美命言。愛我那勢命。爲如此者。汝國之人草。一日較殺

千頭。爾伊邪那岐命詔。愛我那邇妹命。汝爲然者。吾一日立千五百產屋。是以一日必千人死。一日必千五百人生也。故號其伊邪那美命。謂黃泉津大神。亦云下以其追斯伎斯。此三字。而。號道敷大神。亦所塞其黃泉坂之石者。號道反大神。亦謂塞坐黃泉戶大神。故其所謂黃泉比良坂者。今謂出雲國之伊賦夜坂也。

○千引の石 千人がかりで漸く動かす大石。
○事戸を渡す 難縁状をわたすこと。

○なも なむと同意

○追ひ及き 及きは及ぶの意。

○伊賦夜坂 神名帳に出雲國意宇郡伊賦夜の神の社(風土記には伊布夜社)とある

最後に、その妹伊邪那美命、み自ら追ひ來ましき。即ち千引の石を、その黃泉比良坂に引き塞へて、其の石の中に置きて、相むき立たして事戸を度す時に、伊邪那美命申し給はく、「愛しき我が那勢の命、かくし給はば、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さな」と申し給ひき。こゝに伊邪那岐の命のり給はく、「愛しき我が那邇妹の命、汝然し給はば、吾は一日に千五百産屋立ててな」と宣り給ひき。是を以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人なも生まるゝ。

かれ、その伊邪那美の命を、黃泉津大神と申す。又かの追ひ及しに依りて、道敷の大神と申すとも云へり。また其の黃泉の坂に塞れりし石は、道反の大神とも申し、また塞ります黃泉戸の大神とも申す。かれその所謂、黃泉比良坂は、今出雲の國の伊賦夜坂となもいふ。

是以伊邪那岐大神詔。吾者到於伊邪志許米上志許米岐。此九字。織國而在祁理。此二字。故吾者爲御身之禊。而。到坐坐紫日向之橘小門之阿波岐。此三字。原二而禊也。故於二投棄御杖。所成神名。衡立船戸神。次於二投棄御帶。所成神名。道之長乳齒神。次於二投棄御裳。所成神名。時置師神。次於二投棄御衣。所成神名。和豆良比能宇斯能神。此神名。次於二投棄御禪。所成神名。道俣神。次於二投棄御冠。所成神名。飽咋之宇斯能神。三字。以下次於二投棄左御手之手纏。所成神名。奧疎神。訓奥云澁伎。下效此。次奧津那藝佐昆古神。自那以下五字。次奧津甲斐辨羅神。自甲以下四字。以音下效此。次於二投棄右御手之手纏。所成神名。邊疎神。次邊津那藝佐昆古神。次邊津甲斐辨羅神。

○いな 否の意。
○志許米 米は女でなく憂目の目。あゝ、穢かつたの意。
○小門 川の河口。
○阿波岐原 今の筑前あたりかさいふ説があるが確實でない

右件自船戸神以下。邊津甲斐辨羅神以前。十二神者。因脫著身之物。所生神也。是を以て伊邪那岐の大神詔り給はく、「吾はいな志許米志許米岐、きたなき國に到りてありけり。かれ吾は御身の禊せな」と宣り給ひて、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に出でまして、袂ぎ被ひ給ひき。かれ投げ棄つる御杖になりませる神の御名は、衡立船戸の神、次に投げ棄つる御帶になりませる神の御名は道之長乳齒の神、次に投げ棄つる御裳になり

○手廻 小手。

ませる神の御名は、時置師の神、次に投げ棄つる御衣になりませる神の御名は、和豆良比能宇斯能神、次に投げ棄つる御禊になりませる神の御名は、道保の神、次に投げ棄つる御冠になりませる神の御名は、能咋之宇斯能神、次に投げ棄つる左の御手の手廻になりませる神の御名は、奥疎の神、次に奥津那藝佐昆古の神、次に奥津甲斐辨羅の神、次に投げ棄つる右の御手の手廻に成りませる神の御名は、邊疎の神、次に邊津那藝佐昆古の神、次に邊津甲斐辨羅の神。

右の件、船戸の神より以下、邊津甲斐辨羅の神まで、十一柱は御身につける物を脱ぎ棄て給ひしに因りて生りませる神なり。

於是詔之上瀬者瀬速。下瀬者瀬弱。而初於中瀬。隨迦豆伎而。瀬時。所成坐神名。八十禍津日神。賀下效此。次大禍津日神。此一神者。所到其穢繁國之時。因汙垢而所成之神者也。次爲直其禍而所成神名。神直昆神。昆字以音。次大直昆神。次伊豆能賣神。并三神也。伊以下。次於水底。瀬時所成神名。底津綿上津見神。次底筒之男命。於中瀬時所成神名。中津綿上津見神。次中筒之男命。於水上。瀬時所成神名。上津綿上津見神。

○瀧きて 水の中に入り浸つて。

○繁國 國の借字

○直昆 鷲(まが)を直し給ふ御靈の事。

○阿曇 姓氏(うげ)

○廻 かはね。

○以ち齋く もてかしく、祀る。

○墨の江の三前の大神 攝津住言の事

こゝにこの三神が鎮座します事は書紀

にも神名帳にも著しい事實である。

古事記(上卷)

訓上云。次上筒之男命。此三柱綿津見神者。阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字。故阿曇連等者。其綿津見神之子。宇都志日金拆命之子孫也。宇都志日金。其底筒之男命。中筒之男命。上筒之男命。三柱大神也。

こゝに、上つ瀨は瀬速し、下つ瀨は瀬弱し。と詔りごち給ひて、初めて中つ瀨に降り瀧きて瀧ぎ給ふ時に、なりませる神の御名は八十禍津日神、次に大禍津日神、この二神は、かの穢き繁國に到りましたし時の汙垢に因りてなりませる神なり。次に其の禍を直さんとして、なりませる神の御名は神直昆神、次に大直昆神、次に伊豆能賣の神。次に水底に瀧ぎ給ふ時に、なりませる神の御名は底津綿津見神、次に底筒之男の命。中に瀧ぎ給ふ時に、なりませる神の御名は中津綿津見神、次に中筒之男の命。水の上に瀧ぎ給ふ時に、なりませる神の御名は上津綿津見神、次に上筒之男の命。此の三柱の綿津見神は、阿曇の連等が祖神と以ち齋く神なり。故阿曇の連等は、此の綿津見神の御子、宇津志日金拆の命の子孫なり。其の底筒之男の命、中筒之男の命と上筒之男の命三柱の神は、墨の江の三前の大神なり。

○天照大御神 照らすは照るの延びた形で天に坐して照り給ふの意である。

於レ是洗_二左御目_一時。所_レ成神名。天照大御神。次洗_二右御目_一時。所_レ成神名。月讀命。次洗_二御鼻_一時。所_レ成神名。建速須佐之男命。須佐二字以音
右件八十禍津日神以下。速須佐之男命以前。十四柱神者。因_レ滌_二御身_一所_レ生者也。
こ、に左の御目を洗ひ給ひし時に、なりませる神の御名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひ給ひし時に、なりませる神の御名は、月讀の命。次に御鼻を洗ひ給ひし時に、成りませる神の御名は、建速須佐之男の命。
右の件、八十禍津日の神より速須佐之男の命まで、十四柱の神は、御身を滌ぎ給ふに因りて生れませる神なり。

此時伊邪那岐命大歡喜詔。吾者生_二生子_一而。於_二生終_一得_二三貴子_一。即其御頸珠之玉緒母由良遷。此四字以音下效此取由良迦志而。賜_二天照大御神_一而詔之。汝命者。所_二知高天原_一矣。事依而賜也。故其御頸珠名謂_二御倉板舉之神_一。訓板舉云多那次詔_二月讀命_一。汝命者。所_二知夜之食國_一矣。事依也。訓食云次詔_二建速須佐之男命_一。汝命者所_二知海原_一矣。事依也。
此の時伊邪那岐の命大歡喜ばして詔り給はく、「吾は御子生み生みて生みの果てに、三

○貴子 「うづ」は高きつくしいにいふ
○母由良に 貴いた玉のゆら／＼と揺れて鳴る鏡を指す。
○取りゆらかして 手に取つて揺がして
○事依す 委任する

柱の貴子得たり。」と詔り給ひて、やがて其の御頸珠の玉の緒母由良に取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔り給はく、「なが命は高天の原を知らせ。」と事依さして賜ひき。かれ其の御頸珠の名を御倉板舉之神と申す。次に月讀の命に詔り給はく、「汝が命は夜の食國を知らせ。」と事依さし給ひき。次に建速須佐之男の命に詔り給はく、「汝が命は海原を知らせ。」と事依さし給ひき。

○八拳鬚云々 成人するまで。
○泣きいさちき 足すりして泣き喚いた

故各隨_二依賜之命_一。所知看之中。速須佐之男命。不_レ知_二所_レ命之國_一而。八拳須至_二于心前_一。啼伊佐知伎也。自伊下四字以音下效此其泣狀者。青山如_二枯山_一泣枯。河海者悉泣乾。是以惡神之音。如_二狹蠅_一皆滿。萬物之妖悉發。故伊邪那岐大御神。詔_二速須佐之男命_一。何由以汝。不_レ治_二所_レ事依_一之國。而。哭伊佐知流。爾答曰。僕者欲_レ罷_二妣國根之堅洲國_一故哭。爾伊邪那岐大御神大忿怒。詔_二然者汝不_レ可_レ住_二此國_一。乃神夜良比爾夜良比賜也。自夜以下七字以音故其伊邪那岐大神者。坐_二淡海之多賀_一也。
かれ各依さし給へる御言の隨に知召す中に、速須佐之男の命、所命し給へる國を知らさずて、八拳鬚胸前に至るまで泣きいさちき。其の泣き給ふ狀は、青山を枯山なす泣き枯

○狹蠅なす 狹は添
 辭、夥しく湧き出る
 意。
 ○此 亡き母。
 ○根の堅州國 黄泉
 の國を指す。
 ○神逐ひ やらひは
 追放の意。

し、河海は悉に泣き乾しき。是を以て、惡神の音なひ、狹蠅なす皆沸き、萬の物の妖
 悉に起りき。かれ伊邪那岐の大御神、速須佐之男の命に詔り給はく、「何とかも、汝は事
 依させる國を知らさずて哭きいさちる。」と詔り給へば、申し給はく、「吾は此の國、根の堅
 洲國に罷らんと思ふが故に哭く。」と申したまひき。爾に伊邪那岐の大御神いたく忿怒し
 て、「然らば汝此の國にはな住みそ。」と詔り給ひて、乃ち神逐ひに逐ひ給ひき。かれ、其の
 伊邪那岐の大御神は、淡海の多賀になまします。

故於是速須佐之男命言。然者請天照大御神將罷。乃參上天二時。山川悉動。國土皆
 震。爾天照大御神聞驚而。詔我那勢命之上來由者。必不三善心。欲奪我國二耳。即解
 御髮。纏御美豆羅二而。乃於左右御美豆羅。亦於御髮。亦於左右御手。各纏持八尺勾瓏
 之五百津之美須麻流之珠二而。自美至流四字 以音下效此 曾昆良邇者負千入之鞞。調入云三能理下效 此自曾至邇以音
 附五百入之鞞。亦所取佩伊都此二字 之竹柄二而。弓腹振立而。堅庭者。於三向股二踏那
 豆美。三字 如沫雪二斷散而。伊都二字 之男建 調建云三踏建而。待問。何故上來。爾速須佐
 之男命答曰。僕者無邪心。唯大御神之命以。問賜僕之哭伊佐知流之事。故。白都良久。

○請して 告別して
 ○五百津 數の多い
 事を意味する。
 ○美須麻流 結ぶる
 と音が相通する。
 ○千人の鞞 千箇人
 (ちのいりの約で多
 くの矢を入れる鞞。
 ○竹柄 弓弦が觸れ
 て鳴る音を高くする
 爲に左臂につける物
 ○弓腹 弓の端。
 ○向股に云々 兩の
 股に踏みつけ、雪の
 様に散らして。
 ○男建「建」は
 意味を強める詞。
 ○異心 怪しき心。

三字 僕欲往此國以哭。爾大御神詔汝者不可在此國而。神夜良比夜良比賜故。以
 爲請將罷往之狀。參上耳。無異心。爾天照大御神詔然者汝心之清明。何以知。於是
 速須佐之男命。答曰各字氣比而生子。自字以下三字 以音下效此
 かれ是に速須佐之男の命の申し給はく、「然らば天照大御神に請して罷りなむ。」と申し給
 ひて、乃ち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土皆震りき。爾に天照大御神聞驚
 かして、「あが那勢の命の上り來ます由は、必ず善はしき心ならじ、我が國を奪はむと欲ほ
 すにこそ。」と詔り給ひて、即ち御髮を解き御角髮に纏かして、左右の御角髮にも御髮に
 も左右の御手にも、各八尺の勾瓏の五百津の美須麻流之珠を纏き持たして、背には千入
 の鞞を負ひ五百入の鞞を附け、亦稜威の竹柄を取り佩して、弓腹振り立てて、堅庭は向股
 に踏み込み、沫雪なす懸はらかして、稜威の男建び踏み建びて、待ち問ひ給はく、「何故
 上り來ませる。」と問ひ給ひき。爾に速須佐之男の命の答し給はく、「僕は邪心なし、唯大
 御神の御言以ちて、僕が哭きいさちる事を問ひ給ひし故に、白しつらく「僕は此の國に往
 らんと思ひて哭く。」と申ししかば、大御神「汝は此の國にはな住みそ。」と詔り給ひて、神
 逐ひやらひ給ふ故に、罷り往なむとする狀を申さんと思ひてこそ參上りつれ、けしき心無

し。」と申し給へば、天照大御神、「然らば、汝の心の清明きことは何にして知らまし。」と詔りたまひき。こゝに速須佐之男の命、「各誓ひて御子生まな。」と答し給ふ。

故爾各中置天安河二而宇氣布時。天照大御神。先乞度建速須佐之男命所佩十拳劍。打三折三段二而。奴那登母由良爾。此八字以振三濂天之真名井二而。佐賀美爾迦美而。佐下六字以於吹棄氣吹之狹霧二所成神御名。多紀理毘賣命。此神名亦御名謂三與津島比賣命。次市寸島上比賣命。亦御名謂三狹依毘賣命。次多岐都比賣命。三柱。此神速須佐之男命。乞下度天照大御神所纏左御美豆良二八尺勾瓊之五百津之美須麻流珠上而。奴那登母由良爾。振三濂天之真名井二而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣吹之狹霧二所成神御名。正勝吾勝速日天之忍穗耳命。亦乞下度所纏右御美豆良二之珠上而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣吹之狹霧二所成神御名。天之菩卑能命。自善下三亦乞下度所纏御鬘二之珠上而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣吹之狹霧二所成神御名。天津日子根命。又乞下度所纏左御手二之珠上而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣吹之狹霧二所成神御名。活津日子根命。亦乞下度所纏右御手二之珠上而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣吹之狹霧二所成神御名。熊野久須毘命。下三字以音

○天の安の河 古語拾遺に天の八端(やせ)の河原とあるから瀧(いやせ)の河の意。
○誓ふ ちかよの意
○度して 取つて。

○天の真名井 井の美稱で天の真沼(まぬ)の井の義。
○さがみにかみ 書紀に豁然咀嚼、此れを佐我彌加武といふと譯してある。
○氣吹 息吹。
○正勝 正哉の意。

かれ爾に各天の安の河を中に置きて誓ふ時に、天照大御神先づ建速須佐之男の命の佩せる十拳劍を乞ひ度して、三段にうち折りて、瓊音も瓊々に天の真名井に振りすゝぎて、鬘鬘に誓ひて吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、多紀理毘賣の命、亦の御名は奥津島比賣の命と謂す。次に市寸島比賣の命、亦の御名は狹依比賣の命と謂す。次に多岐都比賣の命、速須佐之男の命、天照大御神の左の御角鬘に纏かせる八尺の勾瓊の五百津の御統の珠を乞ひ度して、瓊音も瓊々に天の真名井に振り濂ぎて、さがみにかみて吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、正勝吾勝速日天之忍穗耳の命、亦右の御角鬘に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、天津日子根の命、又左の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、活津日子根の命、亦右の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、熊野久須毘の命。

於是天照大御神。告速須佐之男命。是後所生五柱男子者。物實因我物一所成。故自吾子也。先所生之三柱女子者。物實因汝物一所成。故乃汝子也。如レ此詔別也。是に天照大御神、速須佐之男の命に告りたまはく、「この後に生まれさせる五柱の男子は、物實我が物に因りて成りませり。故、自ら吾が御子なり。さきに生まれさせる三柱の女子は、物實汝の物によりて成りませり。故、乃ち汝の御子なり。」斯く詔り別け給ひき。

○物實 實は種と同
意、生るべき根本。
○我が物 美須麻流
の珠を指す。
○汝の物 十拳劍。

○胸形 和名抄にあ
る筑前國宗像郡の事
○胸形の君 もと君
の「かほね」であつ
たのを天武天皇の十
三年十一月戊申朔、
胸形君、姓を賜うて
朝臣といふとあるか
ら、古は君といつた
に相違ない。

故其先所生之神。多紀理毘賣命者。坐三胸形之奥津宮。次市寸島比賣命者。坐三胸形之中津宮。次田寸津比賣命者。坐三胸形之邊津宮。此三柱神者。胸形君等之以伊都久三前大神者也。故此後所生五柱子之中。天菩比命之子建比良鳥命。此出雲國造。无邪志國造。上菟上津島縣直。遠江次天津日子根命者。凡川內國造。額田部湯坐連。茨木國造。倭田中直。山代國造。國造等之祖也。次天津日子根命者。馬來田國造。道尻岐帶國造。周芳國造。倭淹知造。高市縣主。蒲生稻寸。三枝部造等之祖也。かれ、其の先に生まれさせる神、多紀理毘賣の命は、胸形の奥津宮に坐す。次に市寸島比賣の命は、胸形の中津宮に坐す。次に田寸津比賣の命は、胸形の邊津宮に坐す。此の三柱の神は胸形の君等が以ちいつく三前の大神なり。

故、此の後に生まれさせる五柱の御子の中に、天の菩比の命の御子、建比良鳥の命(此は出雲の國の造、无邪志の國の造、上つ菟上の國の造、下つ菟上の國の造、伊自牟の國の造、津島の縣の直、遠江の國の造等の祖なり。)次に天津日子根の命は(凡河内の國の造、額田部の湯坐の連、茨木の國の造、倭の田中の直、山代の國の造、馬來田の國の造、道の尻の岐閉の國の造、周芳の國の造、倭の淹知の造、高市の縣主、蒲生の稻寸、三枝部の造等の祖なり。)

爾速須佐之男命。白于天照大御神。我心清明故。我所生之子得三手鬚女。因レ此言者。自我勝云而。於勝佐備。此二字。離天照大御神之營田之阿。此阿字。埋其溝。亦其於下聞。看大管之殿。屎麻理。此二字。散。故雖然爲。天照大御神者。登賀米受而告。如屎。醉而吐散登許會。此三字。我那勢之命爲如此。又離田之阿埋溝者。地矣阿多良斯登許會。阿以下七。我那勢之命爲如此。登。此一字。詔雖直。猶其惡態不止而轉。天照大御神。坐忌服屋而。令織神御衣之時。穿其服屋之頂。逆剝天斑馬。剝而。所墮入。時。天衣織女見驚而。於梭衝陰上而死。訓陰上。故於是天照大御神見畏。閉天石屋戸。而刺許

母理此三字坐也。

こゝに速須佐之男の命、天照大御神に白し給く、「我が心清明き故に、我が生めりし御子手弱女を得つ、これに因りて言さば、自ら我勝ちぬ。」と言ひて、勝ちさびに、天照大御神の營田の畔離ち溝埋め、亦其の大嘗食召す殿に糞まり散らしき。

故然すれども、天照大御神は咎めずて告り給はく、「尿なすは酔ひて吐き散らすところ、我が那勢の命斯く爲つらめ。又田の畔離ち、溝埋むるは、地を可惜しところ、我が那勢の命斯く爲つらめ。」と詔り直し給へども、猶、その惡しき態止まずて轉あり。

天照大御神、忌服屋にましまして、神御衣織らしめ給ふ時に、其の服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墮し入る、時に、天の御衣織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて死せき。

かれ、こゝに天照大御神、見畏みて、天の石屋戸を閉て、さしこもり坐しき。

爾高天原皆暗。葦原中國悉闇。因此而常夜往。於是萬神之聲者。狹蠅那須此二字皆滿。萬妖悉發。是以八百萬神。於天安之河原。神集集而。訓集云。高御產巢日神之子思金。

○勝ちさび 勝ち詩つて進み荒ぶるの義
○營田 「つくりた」の約、營む田の義。
○大嘗 亦紀の新嘗積日本紀の大新嘗同意(皆おほにへと讀む)。「にへ」は新嘗(にひあへ)の約で新米を以て嘗をする事。
○轉あり 愈進んで甚しくなる有様。
○神御衣 天神に奉る御衣を指して云ふ
○天の斑馬 毛色が一色でない馬。

神令思調金云三而。集常世長鳴鳥。令鳴而。取天安河之河上之天堅石。取三金山之鐵二而。求鍛入天津麻羅二而。麻羅科伊斯許理度賣命。自伊下六。令作鏡。科三玉祖命。令作八尺勾瓊之五百津之御須麻流之珠二而。召三天兒屋命布刀玉命。布刀二字以而。内二拔天香山之眞男鹿之肩。拔而。取天香山之天波波迦。此三字以而。令三占合麻迦那波而。自麻下四。天香山之五百津眞賢木矣。根許士爾許士而。自許下五。於上枝。取著八尺勾瓊之五百津之御須麻流之玉。於中枝。取繫八尺鏡。八阿多。於下枝。取垂白丹寸手青丹寸手二而。調垂云。此種種物者。布刀玉命布刀御幣登取持而。天兒屋命布刀詔戶言禱白而。天手力男神隱立戶掖二而。天宇受賣命手三次繫天香山之天之日影二而。爲靈三天之眞拆二而。手三草結天香山之小竹葉二而。調小竹。於天之石屋戸。伏汗氣。此二字而。踏登杼呂許志。此五字。爲神懸二而。掛出胸乳。裳緒忍垂於番登二也。爾高天原動而。八百萬神共咲。

○常夜往く 晝のなくなつて夜ばかりになつたこと。
○思金の神 思金で數人分の智慮を一人で兼ね持つてゐる神

○内披き 内は全の
 帯字 丸披にする事
 ○朱櫻 和名抄に一
 云渡波佐久良とある
 ○占へ度ふ 神意に
 合はせ占つて吉凶を
 振り考へる。
 ○五百津眞賢木 枝
 の繁つた樹。
 ○白和幣 にごたへ
 の約、軟かな相布の
 類。
 ○青和幣 麻布。
 ○太御幣帛 ふこは
 美稱、御幣帛は満座
 の意で奉物が滿つる
 事。
 ○手草 凡て手に持
 つ物の名稱。
 ○空筒 中空の筒。
 ○神懸り 物が悪い
 て正心を失つた状態

神におもはしめて、常夜の長鳴鳥を集へて鳴かしめて、天の安の河の河上の天の堅石を取
 り、天の金山の鐵を取りて、鍛人天津麻羅を求めて、伊斯許理度賣の命に科せて鏡を作ら
 しめ、玉の祖の命におほせて、八尺の勾璣の五百津の御統の珠を作らしめて、天の兒屋の
 命布刀玉の命を召びて、天の香山の眞男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天の朱櫻を
 取りて、占へ度はしめて、天の香山の五百津眞賢木を根抜に掘じて、上つ枝に八尺の勾璣
 の五百津の御統の珠をとり著け、中つ枝に八咫鏡を取り繫け、下つ枝に白和幣青和幣を取
 り垂でて、此の種々の物は、布刀玉の命、太御幣帛と取り持たして、天の兒屋の命、太祝
 詞事禱き白して、天の手力男の神、御戸の側に隠り立たして、天の宇受賣の命、天の香山
 の天の蘿を禰に繫けて、天の眞折葛を臺として、天の香山の小竹葉を手草に結びて、天の
 石屋に空筒伏せて、蹈み動響し、神懸りして、胸乳を掻き出で、裳緒を陰上に押垂れき。
 かれ高天の原動りて、八百萬の神共に咲ひき。

於是天照大御神以爲怪。細開天石屋戸二而。内告者。因吾隱坐二而。以下爲天原自闇。
 亦二葦原中國皆闇上矣。何由以天字受賣者爲樂。亦八百萬神諸咲。爾天字受賣。白言

○歡喜咲 笑ひ樂し
 み。

益汝命二而貴神坐故歡喜咲樂。如レ此言之間。天兒屋命布刀玉命。指二出其鏡。示二奉天
 照大御神二之時。天照大御神逾思奇而。稍自戸出而臨坐之時。其所二隱立二之天手力男
 神。取二其御手二引出。即布刀玉命以二尻久米。此二字 繩二控二度其御後方。白言從レ此以內
 不を得二還入。故天照大御神出坐之時。高天原及葦原中國。自得二照明二。
 ころに天照大御神、怪しと思ほして、天の石屋戸を細目に開きて、内より告りたまへる
 は、「吾が隠りますに因りて、天の原自ら闇く、葦原の中つ國も皆闇けむと思ふを、何故
 天の宇受賣は樂びし、亦八百萬の神、諸笑ふぞ。」と詔りたまひき。すなはち、天の宇受
 賣、「汝が命に益りて、貴き神坐すが故に、歡喜咲樂ぶ。」と言しき。斯く言す間に、天の
 兒屋の命、布刀玉の命、かの鏡を指出でて、天照大御神に示せ奉る時に、天照大御神愈
 奇しと思ほして、稍戸より出でて臨みます時に、其の隠り立てる天の手力男の神、其の御
 手を取りて引き出し奉りき。即ち布刀玉の命、注連繩を其の御後方に引き度して、「此より
 内にな還り入りましそ。」と申しき。かれ、天照大御神出でませる時に、高天原も葦原の中
 つ國も、自ら照り明りき。

於是八百萬神共議而。於速須佐之男命。負千位置戸。亦切鬚。及手足爪。令拔而。神夜良比夜良比岐。

こゝに八百萬の神共に議りて、速須佐之男の命に、千位置戸を負せ、亦鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神逐ひ逐ひき。

○千位置戸 千は多數、位は位置即ち座、戸は物の意。判罰の一種で千座の臺に載せる程の被物。

又食物乞大氣津比賣神。爾大氣都比賣。自鼻口及尻。種種味物取出而。種種作具而進時。速須佐之男命。立伺其態。爲穢汗而奉進。乃殺其大宜津比賣神。故所殺神於身生物者。於頭生蠶。於三目生稻種。於三耳生粟。於鼻生小豆。於陰生麥。

於尻生大豆。故是神產巢日御祖命。令取茲成種。

○美味物 多明の米多明の酒等の如く美味な飲食物。

又、食物を大氣津比賣の神に乞ひ給ひき。爾に大氣津比賣、鼻口又尻より、種々の美味物を取り出でて、種々作り具へて進る時に、速須佐之男の命、其の態を立伺ひて。穢汗物たてまつると思ほして、乃ち其の大氣津比賣の神を殺し給ひき。故、殺さへ給へる神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生りき。故、是に、神產巢日御祖の命、茲を取らしめて、種となし

給ひき。

故所避追而。降出雲國之肥上河上在鳥髮地。此時箸從其河一流下。於是須佐之男命。以爲人。有其河上而。尋覓上往者。老夫與老女二人在而。童女置中而泣。爾問賜之汝等者誰。故其老夫答言僕者國神。大山上津見神之子焉。僕名謂足上名椎。妻名謂手上名椎。女名謂楠名田比賣。亦問汝哭由者何。答言我之女者自本在八稚女。是高志之八俣遠呂智。此三字。每年來喫。今其可來時故泣。爾問其形如何。答言白彼目如赤加賀智而。身一有八頭八尾。亦其身生蘿及檜櫓。其長度三餘八谷峽八尾而。見其腹者。悉常血爛也。此謂赤加賀知。爾速須佐之男命詔其老夫。是汝之女者。奉於吾哉。答言白恐亦不覺御名。爾答詔吾者天照大御神之伊呂勢者也。自伊下三。故今自天降坐也。爾足名椎手名椎神。白然坐者恐立奉。故、逐はれて、出雲の國の肥の河上なる、鳥髮の地に降りましき。此の時しも、箸其の河より流れ下りき。

○肥の河 現今斐伊川、藤の川とも書き船通山に源を發し穴道湖に入る出雲の大河流である。
○鳥髮 現今の船通山をいふ。

こゝに速須佐之男の命、其の河上に人ありけりと思ほして、尋覓上り往でまししかば、

○國つ神 速須佐之男の命の天神であるに對して云つたもの
 ○柳名田比賣 柳は奇(くし)で美稱、名田は地名稻田から出たらしい。
 ○八稚女 數多の少女。
 ○高志 地名、今の庭川郡古志村。
 ○赤加賀知 書紀に赤酸醬とある。赤いは、づきの事である。
 ○血帯れたり 血がたらくと垂れてゐる。

老夫と老女と二人ありて、童女を中に置きて泣くなり。「汝等は誰ぞ。」と問ひ給へば、其の老夫、「僕は國つ神、大山津見の神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は柳名田比賣と謂す。」亦、「汝の哭く由は何ぞ。」と問ひたまへば、「我が女は本より八稚女ありき。是に、高志の八俣大蛇なも、年毎に來て喫ふなる。今其れ來るべきときなるが故に泣く。」と申す。「其の形は如何さまにか。」と問ひ給へば、「彼が目は赤加賀知なして、身一つに頭八つ尾八つあり。亦、其の身に蘿また檜生ひ、其の長さ、谿八谿、尾八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常も血爛れたり。」と申す。爾、速須佐之男の命、其の老夫に、「これ、汝の女ならば、吾に奉らむや。」と詔り給ふに、「恐れれど御名を知らず。」と申せば、「吾は天照大御神の同母兄なり。かれ今天より降りましつ。」と答へ給ひき。こゝに足名椎の神、「然まさば恐し、奉らむ。」と白しき。

爾速須佐之男命。乃於湯津爪櫛取成其童女二而。刺御美豆良。告其足名椎手名椎神。汝等釀八鹽折酒。且作迴垣。於其垣作八門。每門結八佐受岐。每其佐受岐置酒船二而。每船盛其八鹽折酒二而待。故隨告而。如レ此設備待之時。其八俣遠呂

○湯津爪櫛 堅津閉櫛の意で櫛の細かく美しい櫛。
 ○八鹽折の酒 書紀には八鹽の酒とある。鹽は釀意で八度も醸造し直した酒。
 ○釀 棧敷と同じ

智。信如言來。乃每船垂入己頭飲其酒。於是飲醉死由伏寢。爾、速須佐之男の命、すなはち其の童女を湯津爪櫛に取りなして、御角髪に刺さして、其の足名椎、手名椎の神に告り給はく、「汝等、八鹽折の酒を釀み、且、垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つの假殿を結び、其のさすき毎に酒船を置きて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて待ちてよ。」と詔り給ひき。故、告り給へる隨にして、かく設備へて待つ時に、かの八俣大蛇まことに言ひしがごと來つ。乃ち船毎に、おのもく頭を垂入て其の酒を飲みき。こゝに飲み酔ひて皆伏し寝たり。

○都牟刈の太刀 大神宮神寶の須我流の太刀、須我利の太刀と同意語、刀身の銳利なものに「つむがし」といふ

爾速須佐之男命。拔其所御佩之十拳劍。切散其蛇二者。肥河變血而流。故切其中尾二時。御刀之刃毀。爾思怪。以御刀之前。刺割而見者。在都牟刈之太刀。故取此大。刀。思異物二而。白上於天照大御神二也。是者草那藝之大刀也。すなはち、速須佐之男の命、其の御佩かせる十拳劍を抜きて、其の蛇を切り散りたまひしかば、肥の河血になりて流れき。かれ、其の中の尾を切り給ふ時、御刀の刃缺けき。怪しと思ほして、御刀の前以て、刺し割きて見そなはししかば、都牟刈の太刀あり。故、此

の大刀を取らして、異しき物ぞと思ほして、天照大御神に申し上げ給ひき。是は草薙の大
刀なり。

○須賀 書紀「遂に
出雲の清の地に到り
ます」今は諏訪と呼
んでをる。

故是以其速須佐之男命。宮可造作之地。求_レ出雲國。爾到_二坐須賀_一。此二字以_レ地_一而詔
之。吾來_二此地_一。我御心須賀須賀斯而。其地作_レ宮坐。故其地者。於_レ今云_二須賀_一也。
故、是を以て、其の速須佐之男の命、宮造るべき地を出雲の國に求_レ給ひき。爾に須賀
の地に到りまして詔り給はく、「吾、此に來まして、我が御心清々し。」と詔り給ひて、其地
になも宮作り坐しける。故、其地をば今に須賀とぞいふ。

茲大神初作_二須賀宮_一之時。自_二其地_一雲立騰。爾作_二御歌_一。其歌曰。夜久毛多都。伊豆毛夜
幣賀岐。都麻菜微爾。夜幣賀岐都久流。曾能夜幣賀岐袁。於是喚_二其足名椎神_一。告言汝
者任_二我宮之首_一。且負_二名號稻田宮主須賀之八耳神_一。
茲の大神、初め須賀の宮作らしし時に、其地より雲立ち騰りき。爾、御歌作み給ふ。其
の御歌は、

八雲起つ 出雲八重垣 夫妻隠みに 八重垣造る 其の八重垣を
於是かの足名椎の神を喚して、「汝は我が宮の首たれ。」と告り給ひ、且、名を稻田の宮主
須賀之八耳の神と負せ給ひき。

故其櫛名田比賣以。久美度邇起而。所_レ生神名。謂_二八島士奴美神_一。自_レ士下三字
山津見神之女。名神大市比賣。生子大年神。次宇迦之御魂神。二字以_レ音。
故、其の櫛名田比賣を以て、隱寢所に起して、生みませる神の御名を、八島士奴美の神
といふ。又、大山津見の神の御女、名は神大市比賣に娶ひまして、御子大年の神、次に宇
迦之御魂の神を生みましき。

兄八島士奴美神。娶_二大山津見神之女_一。名木花知流。此二字 比賣_一生子。布波能母遲久奴須
奴神。此神娶_二淤迦美神之女_一。名日河比賣。生子。深淵之水夜禮花神。夜禮二字 此神娶_二天
之都度閉知泥上神。自_レ都下五 字以_レ音。生子。淤美豆奴神。此神名 此神娶_二布怒豆怒神。此神名 之女。
名布帝耳上神。布帝二字 字以_レ音。生子。天之冬衣神。此神娶_二刺國大上神之女_一。名刺國若比賣。生

○八雲起つ 雲の盛
んに起ち騰るさま。
○出雲 出で立つ雲
○夫妻隠みに つま
まは夫妻互に呼び合
ふ時に云ふ詞。
○首 司掌の長官。

○隱寢所に起す 夫
婦の契りを結ぶ。

○色許男 色許は障の意であるが、こゝでは男ましこか延しどかいふ意になる。

子。大國主神。亦名謂大穴牟遲神。牟遲二亦名謂葦原色許男神。色許二亦名謂八千矛神。亦名謂宇都志國玉神。宇都志三并有五名。御兄、八島土奴美之神、大山津見の神の御女、名は木花知流比賣に娶ひまして生みませる御子、布波能母遲久奴須奴之神。此の神、淤迦美の神の女、名は日河比賣に娶ひまして生みませる御子、深淵之水夜禮花の神。此の神、天之都度閉知泥の神に娶ひまして生みませる御子、淤美豆奴の神。此の神、布怒豆怒の神の女、名は布帝耳の神に娶ひまして生みませる御子、天之冬衣の神。此の神、刺國大神の女、名は刺國若比賣に娶ひまして生みませる御子、大國主の神、亦の御名は大穴牟遲の神と謂し、亦の御名は葦原色許男の神と謂し、亦の御名は八千矛の神と謂し、亦の御名は宇都志國玉の神と謂す。并せて御名五つあり。

故此大國主神之兄弟。八十神坐。然皆國者避於大國主神。所以避之者。其八十神各有欲婚稻羽之八上比賣之心。共行稻羽時。於大穴牟遲神負倍。爲從者率往。於是到氣多之前時。裸菟伏也。爾八十神謂其菟云。汝將爲者。浴此海鹽。當風

○避け 退き譲り。
○稻羽 因幡。
○氣多の前 因幡の國、氣多の郡の菟濱

吹而。伏高山尾上。故其菟。從八十神之教而伏。爾其鹽隨乾。其身皮悉風見吹折。故痛苦泣伏者。最後之來大穴牟遲神。見其菟言何由汝泣伏。菟答言。僕在淤岐島。雖欲度此地。無度因故。欺海和邇。此二字以言。吾與汝競欲計族之多小。故汝者。隨其族在悉率來。自此島至于氣多前。皆列伏度。爾吾踏其上。走乍讀度。於是知下與吾族孰多。如此言者。見欺而列伏之時。吾踏其上。讀度來。今將下地時。吾云汝者我見欺言竟。即伏最端和邇捕我。悉剝我衣服。因此泣患者。先行八十神之命以。誨告浴海鹽當風伏。故爲如教者。我身悉傷。於是大穴牟遲神。教告其菟。今急往此水門。以水洗汝身。即取其水門之蒲黃敷散而。輾轉其上者。汝身如本膚。必差。故爲如教。其身如本也。此稻羽之素菟者也。於今者謂菟神也。故其菟白大穴牟遲神。此八十神者。必不を得八上比賣。雖負倍。汝命獲之。故、此の大國主の神の御兄弟、八十神坐しき。然れども、皆、國は大國主の神に避りまつりき。避りまつりし所以は、其の八十神、各、稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて、共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲の神に袋を負せ、從者として率て往きき。こゝに、氣多の前に到りける時に、赤裸なる菟伏せり。八十神其の菟に言ひけらく、「汝、爲まくは、

○拆えし故にさか
れたから。
○渡岐 隱岐。

○ありの悉 あらん
限り。
○衣服 毛皮。

○水門 河口。
○蒲の黄 蒲の花に
同じ。

此の潮を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏してよ。」といふ。故、其の菟、八十神の教ふる従にして伏しき。爾に、其の潮の乾くまに、其の身の皮、悉に風に吹き折えし故に、痛みて泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲の神、其の菟を見て、「何故、汝泣き伏せる。」と問ひ給ふに、菟答言さく、「僕、渡岐の島に在りて、此の地に渡らまく欲りつれども、渡らむ因なかりし故に、海の鰐を欺きて言ひけらく、「吾と汝と、族の多き少なきを競べてむ。故、汝は、其の族のありの悉率て來て、此の島より氣多の前まで皆列み伏し渡れ、吾其の上を踏みて走りつ、讀み渡らむ。こゝに、吾が族と何れ多きといふ事を知らむ。」かく言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時に、吾其の上を踏みて讀み渡り來て、地に下りむとする時に、吾、「汝は我に欺かえつ。」と言ひ竟れば、即ち最端に伏せる鰐、我を捕へて、悉に我が衣服を剥ぎき。これに因りて、泣き患ひしかば、先立ちて行でませる八十神の御言以ちて、「潮を浴みて風に當りて伏せれ。」と、誨へ給ひき。かれ、教への如せしかば、我が身悉に傷はえつ。」と告す。

こゝに大穴牟遲の神、其の菟に教へたまはく、「今急く此の水門に往きて、水以て汝が身を洗ひて、即ちその水門の蒲の黄を取りて敷き散らして、其の上に輾轉びてば、汝が身本獲給ひなむ。」と白しき。

の膚の如、必ず癒えなむものぞ。」と教へ給ひき。かれ、教への如爲しかば、其の身本の如くになりき。これ稻羽の素菟といふ者なり。今に菟神とないふ。故、其の菟、大穴牟遲の神に白さく、「此の八十神は、必ず八上比賣を得給はじ、袋を負ひ給へれども、汝が命ぞ獲給ひなむ。」と白しき。

○手間の山本 和名
抄にある伯耆の會
見郡大高の里の事。

於是八上比賣。答八十神言。吾者不聞汝等之言。將嫁大穴牟遲神。故爾八十神怒。欲殺大穴牟遲神。共議而。至伯伎國之手間山本云。赤猪在此山。故和禮以。共追下者。汝待取。若不待取者。必將殺汝云而。以火燒似猪大石而。轉落。爾追下取時。即於其石所燒著而死。爾其御祖命哭患而。參上于天。請神產巢日之命。時。乃遣蛭貝比賣與蛤貝比賣。令作活。爾蛭貝比賣岐佐宜。此三字以音。集而。蛤貝比賣持水而。塗母乳汁者。成麗壯夫。云云。出遊行。

於是、八上比賣、八十神に答へけらく、「吾は、汝等の言は聞かじ、大穴牟遲の神に嫁はな。」といふ。

故爾に、八十神怒りて、大穴牟遲の神を殺さむとあひ議りて、伯伎の國の手間の山本に

至りて云ひけるは、「此の山に赤猪あるなり。故我共追ひ下りなば、汝待ち取れ、若し待ち取らずば、必ず汝を殺さむ。」といひて、猪に似たる大石を、火以て焼きて、轉し落しき。

爾、追ひ下り取る時に、其の石に焼き著かえて死せ給ひき。
爾に、其の御祖の命、哭き患ひて、天に參上りて、神産巢日の命に請し給ふ時に、乃ち蜃貝比賣と蛤貝比賣とを遣せて、作り活かさしめ給ふ。爾、蜃貝比賣、きさけ焦がして、蛤貝比賣水を持ちて、母の乳汁と塗りしかば、麗はしき壯夫になりて出で遊行きき。

○御祖の命 大穴牟遲の神の御母刺國若比賣を指す。
○蜃貝 蚌の事で今のあかがひに當る。
○蛤貝 はまぐりの事で蛤類の總稱。
○きさけ しがして蜃貝が其の殻を削り焦して。
○母の乳汁 母の乳汁を塗る様に。

○矢 楔。

於是八十神見。且欺率入山而。切伏大樹。茹矢。打立其木。令入其中。即打離其冰目矢而拷殺也。爾亦其御祖命哭乍求者。得見。即拆其木而。取出活。告其子言。汝有此間者。遂爲八十神所滅。乃速遣於木國之大屋毘古神之御所。爾八十神竟追臻而。矢刺之時。自木保漏逃而去。御祖命告子云。可參向須佐能男命所坐之根堅洲國。必其大神議也。故隨詔命而。參到須佐之男命之御所者。其女須勢理毘賣出見。爲目合而相婚。還入白其父言甚麗神來。於是、八十神見て、且欺きて、山に率て入りて、大樹を切り伏せ、矢を茹め、其の木に

○冰目 削れ目。

○見得て 尋ね當てて。

○木の國 紀伊國。
○矢刺す 矢を弓にさし番へる。

○目交ひ 目と目と見合はす事。

打ち立て、其の中に入らしめて、即ち、其の冰目矢を打ち離ちて、拷ち殺しき。

爾亦其の御祖の命、哭きつ、求けば、見得て、即ち其の木を拆きて取り出で活して、其の御子に告り給はく、「汝、此にあらば、遂に八十神に滅ほさえなむ。」と告り給ひて、乃ち木の國の大屋毘古の神の御所に、速がし遣り給ひき。爾、八十神、竟き追ひ臻りて、矢刺す時に、木の保より漏き逃れて去り給ひき。

御祖の命、御子に告り給はく、「須佐能男の命のまします、根の堅洲國に參向てよ。必ず其の大神議り給ひなむ。」と詔り給ふ。

かれ、詔命のまに、須佐之男の命の御所に參到たりしかば、其の御女、須勢理毘賣出で見て、目交ひして相婚ひまして、還り入りて其の御父に、「甚麗はしき神參來つ。」と言し給ひき。

爾其大神出見而。告此者謂之葦原色許男。即喚入而。令寢其蛇室。於是其妻須勢理毘賣命。以三蛇比禮二字授其夫云。其蛇將咋。以三此比禮三舉打撥。故如教者。蛇自靜故。平寢出之。亦來日夜者。入吳公與蜂室。且授吳公蜂之比禮。教如先故。

平出之。亦鳴鏑射入大野之中。令探其矢。故入其野時。即以火廻燒其野。於是
 不知所出之。鼠來云。內者富良富良。此四字外者須夫須夫。此四字如
 其處者。落隱入之間。火者燒過。爾其鼠咋持其鳴鏑出來而奉也。其矢羽者。其鼠子
 等皆喫也。於是其妻須世理毘賣者。持喪具而哭來。其父大神者。思已死訖。出
 立其野。爾持其矢以奉之時。率入家而喚入八田間大室。而令取其頭之鼠。故
 爾見其頭者。吳公多在。於是其妻。以半久木實與赤土。授其夫。咋破其木
 實。含赤土唾出者。其大神。以下爲咋破吳公唾出而。於心思愛而寢。爾握其大神之
 髮。其室每椽結著而。五百引石取塞其室戶。負其妻須世理毘賣。即取其大神之
 生大刀與生弓矢。及其天詔琴而。逃出之時。其天詔琴拂樹而地動鳴。故其所寢大
 神間驚而。引不其室。然解結椽髮之間遠逃。故爾追至黃泉比良坂。遙望呼謂大
 穴牟遲神曰。其汝所持之生大刀生弓矢以而。汝庶兄弟者。追伏坂之御尾。亦追撥
 河之瀨而。意禮二字爲大國主神。亦爲宇都志國玉神。而我之妻須世理毘賣爲嫡
 妻。於宇迦能山。以音之山本。於底津石根宮柱布刀斯理。此四字於高天原。冰椽
 多迦斯理。此四字以音而居。是奴也。故持其大刀弓。追避其八十神之時。每坂御尾追伏。每

○蛇の比禮 比禮は
 振手の約で打ち振る
 物。速速日の命が天
 からお降りになる時
 に天神が授け給うた
 十種の瑞寶の中に、
 蛇の比禮、蜂の比禮
 などがあつて寄禮を
 拂ふ道具。
 ○外は窄々 上の方
 はすばまつて狭いけ
 れども道人の事が出
 来る。
 ○喪具 埋葬の道具

河瀨追撥而。始作國也。故其八上比賣者。如先期美刀阿多波志都。此七字故其八上
 比賣者。雖率來。畏其嫡妻須世理毘賣而。其所生子者。刺狹木俣而返。故名其
 子云木俣神。亦名謂御井神也。
 爾其大神出で見て、「此は、葦原色許男といふ神ぞ。」と告り給ひて、やがて喚び入
 れて、其の蛇の室屋に寢しめ給ひき。於是、其の御妻須世理毘賣の命、蛇の比禮を其の夫
 に授けて曰り給はく、「其の蛇食はむとせば、此の比禮を二度擧りて、打ち撥ひたまへ。」と
 詔り給ふ。故、教への如爲給ひしかば、蛇、自ら静まりし故に、平く寢て出で給ひき。
 亦、来る日の夜は、吳公と蜂との室屋に入れ給ひしを、且吳公、蜂の振物を授けて、先の
 如教へ給ひし故に、平く出で給ひき。亦、鳴鏑を大野の中に射入れて、其の矢を採らしめ
 給ふ。故、其の野に入ります時に、即ち火以て其の野を焼き廻らしつ。於是、出でむ所を
 知らざる間に、鼠來て云ひけるは、「内は洞々、外は窄々。」斯くいふ故に、其處を踏みし
 かば、落ち入り隠りし間に、火は焼け過ぎぬ。爾に、其の鼠かの鳴鏑を咋ひ持ち出で來て
 奉りき。其の矢の羽は其の鼠の子等、皆喫ひたりき。
 於是、其の御妻、須世理毘賣は、喪具を持ちて哭きつゝ、來まし、其の父の大神は、既

○八田間の大室 八は敷の多い事、澤山間敷のある大廣間。

に死せぬとおもほして、其の野に出で立たせば、すなはち、其の矢を持ちて奉る時に、家に牽て入りて、八田間の大室に喚び入れて、其の御頭の虱を取らせ給ひき。故、其の御頭を見れば、吳公多かり。於是其の御妻、椋の木の實と赤土とを、其の夫に授け給へば、其の木の實を咋ひ破り、赤土を含みて唾き出し給へば、其の大神、吳公を喰ひ破りて唾き出すと思ほして、御心に愛しく思ほして御寢ましき。爾に、其の大神の御髪を握りて、其の室の椋毎に結び著けて、五百引石を其の室の戸に取り塞へて、其の御妻須世理毘賣を負ひて、其の大神の生大刀、生司矢、又其の天の詔琴を取り持たして、逃げ出でます時に、其の天の詔琴樹にふれて、地、動鳴きぬ。

○生大刀 「生」は命長くめでたいこと、武器の美稱である。

○五百引石 大石。

かれ、其の御寢ませる大神、聞き驚かして、其の室を引き出し給ひき。然れども、椋に結へる御髪を解かする間に、遠く逃げ給ひき。かれ、こゝに、黄泉比良坂まで追ひいでまして、遙ばろにみさけて、大穴牟遲の神をよばひて曰り給はく、「其の汝が持たる生大刀生司矢を以て、汝が庶兄弟どもをば、坂の御尾に追ひ伏せ、河の瀬に追ひ撥ひて、汝、大國主の神と爲り、亦宇都志國玉の神となりて、其の我が女、須世理毘賣を嫡妻として、宇迦の山の山本に、底津石根に宮柱太知り、高天の原に氷椋高知りて居れ、是奴よ。」と詔り

○御尾 「御」は接頭語、坂路のだから長く延びた處。

給ひき。かれ、其の生大刀を持ちて、其の八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひはらひて、國作り始め給ひき。

○宇賀の山 出雲。○底津石根に云々 地底にある岩根に宮柱を丈夫に建てて。○氷椋 千木。

此八千矛神。將婚高志國之沼河比賣幸行之時。到其沼河比賣之家。歌曰。夜知富許能。迦微能美許登波。夜斯麻久爾。都麻麻岐迦泥耳。登富登富斯。故志能久邇邇。佐加志賣遠。阿理登岐加志耳。久波志賣遠。阿理登伎許志耳。佐用婆比爾。阿理多多斯。用婆比邇。阿理加用婆勢。多知賀遠母。伊麻陀登加受耳。淤須比遠母。伊麻陀登加泥婆。遠登賣能。那須夜伊多斗遠。淤曾夫良比。和何多多勢禮婆。比許豆良比。和何多多勢禮婆。阿遠夜麻邇。奴延波那伎。佐怒都登理。岐藝斯波登與牟。爾波都登理。迦那波那

久。宇禮多久母。那久那留登理加。許能登理母。宇知夜米許世泥。伊斯多布夜。阿麻波勢豆加比。許登能。加多理其登母。許遠婆。爾其沼河日賣。未開戸。自内歌曰。夜知富許能。迦微能美許等。怒延久佐能。賣通志阿禮婆。和何許許呂。宇良須能登理敘。伊麻許會婆。知杼理邇阿良米。能知波。那杼理爾阿良牟遠。伊能知波。那志勢多麻比會。伊斯多布夜。阿麻波世豆迦比。許登能。加多理其登母。許遠婆。阿遠夜麻邇。比賀迦久良婆。奴婆多麻能。用波伊傳那牟。阿佐比能。惠美佐迦延岐豆。多久豆怒能。斯路岐多陀牟岐。阿和由岐能。和加夜流牟泥遠。會陀多岐。多多岐麻那賀理。麻多麻傳。多麻傳佐斯麻岐。毛毛那賀爾。伊波那佐牟遠。阿夜爾。那古斐岐許志。夜知富許能。迦微能美許登。許登能。迦多理其登母。許遠婆。故其夜者不_レ合而。明日夜爲_二御合_一也。

此の八千矛の神、高志の國の沼河比賣を婚ひに幸行しし時、其の沼河比賣の家に到りて歌ひたまはく、

八千矛の神の命は 八洲國 妻覺ぎかねて 遠々し 越の國に さかしめを ありと聞かして くはしめを ありときこして さよばひに ありたたし よばひに ありかよはせ 大刀が緒も 未だ解かずて おすひをも 未だ解かねば 處女の 鳴す

○八千矛の神 大國
主命の別名。
○ありたたし 次の
在り通はせむ對句。
これまで幾度も立ち
幾度も通うたの意。
○解かねば 解かね
のの意。

○おそぶらひ 押し
搦ぶるの意。
○ひこづらび 引搦
り。
○さ野つ鳥庭つ鳥
庭、鶉の鶉詞。
○うれたくも 恨め
しくも。
○うちやめこせね
打ち留ませたき事よ
○いたふや云々
戀しさに念ぎ飛ぶ様
にして来た天隨使の
我が。
○ぬえ草の 枕詞。
○和鳥 母千鳥に對
するなきごりの約。
○栲綱「白」の縁語
○軟やる身根 うち
若いなやかな身體
○そなたき ひしと
指い指く。
○叩きまながり ま
ながりは互にさしぬ
き交す。
○ま玉手 男の御手
○股長に 足をさし
延べてゆるぐこと。
○あやに 歡聲。
○な戀ひきこし あ
まり切なく思ひ給ふ
なり。

や板戸を おそぶらひ 我が立たせれば ひこづらひ 我が立たせれば 青山に 鶉
は鳴き さ野つ鳥 きやしは響む 庭つ鳥 鶉は鳴く うれたくも 鳴くなる鳥か
この鳥も 打ちやめこせね いたふや 天隨使 事の 語りごととも こをば
爾に、其の沼河比賣、未だ戸を開かずて、内より歌ひ給はく、
八千矛の 神の命 ぬえ草の 女にしあれば 我が心 浦洲の鳥ぞ 今こそは 千鳥
にあらめ 後は 和鳥にあらむを 命は 死せ給ひそ いたふや 天隨使 事の
語りごととも こをば
青山に 日が隠らば ぬば玉の 夜は出でなむ 朝日の 笑み榮え来て 栲綱の 白
き腕 沫雪の 軟やる身根を そだつき 叩きまながり ま玉手 玉手さしまき
股長に 寝はなさむを あやにな戀ひきこし 八千矛の 神の命 事の語りごととも
こをば
かれ、其の夜は妻さすて、明る日の夜娶ひし給ひき。

又其神之嫡后須勢理毘賣命。甚爲_二嫉妬_一。故其日子遲神和備互。三字 自_二出雲_一。將_三上_二

○嫉妬 うはなりは
後妻を指す。本妻が
後妻を嫉む意。
○日子遅の神 夫の
神。
○は、たきも 袖を
捲りあけて見る。

坐倭國而束裝立時。片御手者繫御馬之鞍。片御足踏入其御燈而歌曰。奴婆多麻能。久路岐美那斯遠。麻都夫佐爾。登理與曾比。淤岐都登理。牟那美流登岐。波多多藝母。許禮婆布佐波受。幣都那美。曾邇奴岐字豆。蘇邇杼理能。阿遠岐美那斯遠。麻都夫佐邇。登理與曾比。淤岐都登理。牟那美流登岐。波多多藝母。許母布佐波受。幣都那美。曾邇奴棄字豆。夜麻賀多爾。麻岐斯。阿多泥都岐。曾米紀賀斯流邇。斯米許呂母遠。麻都夫佐邇。登理與曾比。淤岐都登理。牟那美流登岐。波多多藝母。許斯與呂志。伊刀古夜能。伊毛能美許等。牟良登理能。和賀牟禮伊那婆。比氣登理能。和賀比氣伊那婆。那迦士登波。那波伊布登母。夜麻登能。比登母登須須岐。宇那加夫斯。那賀那加佐麻久。阿佐阿米能。佐疑理邇。多多牟岐。和加久佐能。都麻能美許登。許登能。加多理菜登母。許遠婆。

又その神の嫡后、須世理昆賣の命、いたく嫉妬し給ひき。かれ、その日子遅の神、わびて、出雲より倭の國に上りまさむとして、裝束し立たすときに、片御手は御馬の鞍にか
け、片御足はその御燈に踏み入れて、歌ひたまはく、
ぬばたまの 黒き御衣を ま具に 取裝ひ 沖つ鳥 胸見る時 はたきも これは

○鴉鳥の 青の冠詞

○染木 西。

○いとこやの いと
ほしき子。妹の冠辭
○ひけ鳥の 引け行
なほの枕詞。
○汝が泣かさまく
汝は泣くに違ひない

應はず 邊つ浪 そに脱ぎうて 鴉鳥の 青き御衣を ま具に 取裝ひ おきつ鳥
胸見る時 はたきも こも應はず 邊つ浪 そに脱ぎうて 山がたに 求ぎし茜つ
き 染木が汁に 染衣を ま具に 取裝ひ 沖つ鳥 胸見る時 はたきも 是しよ
ろし いとこやの 妹の命 羣鳥の わが羣れ行なば ひけ鳥の 吾が引け行なば
泣かじとは 汝はいふとも 山との 一本すき うなかぶし 汝が泣かさまく 朝
雨の さ霧にたたむぞ 若草の つまの命 事の 語りごとこも こをば

爾其后。取大御酒环。立依指舉而。歌曰。夜知富許能。加微能美許登夜。阿賀淤富久邇。奴斯許曾波。遠邇伊麻世婆。宇知微流。斯麻能佐岐邪岐。加岐微流。伊蘇能佐岐淤知受。和加久佐能。都麻母多勢良米。阿波母與。賣邇斯阿禮婆。那遠岐豆。遠波那志。那遠岐豆。都麻波那斯。阿夜加岐能。布波夜賀斯多爾。牟斯夫須麻。爾古夜賀斯多爾。多久夫須麻。佐夜具賀斯多爾。阿和由岐能。和加夜流牟泥遠。多久豆怒能。斯路岐多陀牟岐。曾陀多岐。多多岐麻那賀理。麻多麻傳。多麻傳佐斯麻岐。毛毛那賀邇。伊遠斯那世。登與美岐。多豆麻都良世。

○打見る 撞き見る
圓々をめぐり見る意
○落ちず 残らず。

○綾垣 寮所の綾の帷帳。

○むしぶすま 守部は蟲被で絹の姿と説き、宣長は燕被で嘘い意に解してゐる。

○栲ぶすま ころわした姿。

○うきゆひ うきは義、ゆひは結ぶ意即ち閉めの姿をする事

○うながけり 互に手を項にかけ合ふ。

如レ此歌。即爲三字伎由比_{以レ音}而。宇那賀氣理豆。六字_{以レ音}至今鎮坐也。此謂之神語一也。

こゝにその後、大御酒杯を取らして、立ちよりさゝけて歌ひ給はく、

八千矛の神の命や 吾が大國 主こそは 男に坐せば 打見る 鳥のさきさき 搔

き見る 磯のさき落ちず 若草の 妻持たせらめ 吾はもよ 女にしあれば 汝をき

て 夫はなし 汝をきて 夫はなし 綾垣の ふはやが下に むしぶすま にごやが

下に 栲ぶすま さやぐが下に 沫雪の わかやる身根を 栲綱の 白き腕 そだ

たき 叩きまながり ま玉手 玉手さしまき も、長に 寝をしなせ 豊御酒 獻

らせ

かく歌ひて、即ちうきゆひして、うながけりて、今に至るまで鎮まします。これを神語

といふ。

故此大國主神。娶下坐三胸形奥津宮一神。多紀理毘賣命生子。阿遲_{以レ音}鈕高日子根神。次

妹高比賣命。亦名下光比賣命。此之阿遲鈕高日子根神者。今謂迦毛大御神一者也。

かれ、此の大國主の神、胸形の奥津宮にます神、多紀理毘賣の命に娶ひまして生みませ

る御子、阿遲鈕高日子根の神。次に妹高比賣の命、亦の御名は下光比賣の命。此の阿遲鈕高日子根の神は、今迦毛の大御神とまをす神なり。

大國主神。亦娶三神屋楯比賣命一生子。事代主神。亦娶三八鳥牟遲能神_{自レ牟下三}之女鳥耳

神一生子。鳥鳴海神。訓_レ鳴云_二此神。娶三日名照額田毘道男伊許知邇神。田下毘_{又自レ伊}生子。

國忍富神。此神。娶三葦那陀迦神。自_レ那下_三亦名八河江比賣生子。速甕之多氣佐波夜遲奴

美神。自_レ多下_八此神。娶三天之甕主神之女。前玉比賣一生子。甕主日子神。此神。娶三淤

加美神之女。比那良志毘賣_{此神名}一生子。多比理岐志麻流美神。此神名_{此神}娶三比比羅

木之其花麻豆美神_{木上三字花}之女。活玉前玉比賣神一生子。美呂浪神。美呂_二此神。

娶三敷山主神之女。青沼馬沼押比賣一生子。布忍富鳥鳴海神。此神娶三若畫女神一生子。天

日腹大科度美神。度美_二此神。娶三天狹霧神之女。遠津待根神。生子。遠津山岬多良斯

神。

右件。自三八鳥士奴美神以下。遠津山岬帶神以前。稱二十七世神。

大國主の神、また神屋楯比賣の命に娶ひて生みませる御子、事代主の神。また八鳥牟遲

能神の女、鳥耳の神に娶ひて生みませる御子、鳥鳴海の神。この神日名照額田毘道男伊許知邇の神に娶ひて生みませる御子、國忍富の神。この神葦那陀迦の神、亦の名は八河江比賣に娶ひて生みませる御子、速甕之多氣佐波夜遲奴美の神。この神天之甕主の神の女、前玉比賣に娶ひて生みませる御子、甕主日子の神。この神淡加美の神の女、比那良志毘賣に娶ひて生みませる御子、多比理岐志麻流美の神。この神比々羅木之其花麻豆美の神の女、活玉前玉比賣の神に娶ひて生みませる御子、美呂浪の神。この神敷山主の神の女、青沼馬沼押比賣に娶ひて生みませる御子、布忍富鳥鳴海の神。この神若畫女の神に娶ひて生みませる御子、天の日腹大科度美の神。この神天之狹霧の神の女、遠津待根の神に娶ひて生みませる御子、遠津山岬多良斯の神。

右の件、八島士奴美の神より下、遠津山岬多良斯の神まで、十七世の神といふ。

故大國主神。坐出雲之御大之御前時。自波穗。乘天之羅摩船二而。内剝鷺皮一剝爲衣服。有歸來神。爾雖問其名。不答。且雖問所從之諸神。皆白不知。爾多邇具久白言。自多下四。此者久延毘古必知之。即召久延毘古。問時。答曰此者神產巢日神之

- 波の穂 涙の白く高く起つ様。
- 羅摩の船 羅摩の實の皮で作つた船。
- 鷺 火器の意で鷺の誤り、宣長は説く。
- 多邇具久 楯餘。
- 久延毘古 安山子。
- くきし 生まれ落ちた。
- 常世の國 遠く離れた海外の國土。

御子。少名毘古那神。自毘下三。故爾白上於神產巢日御祖命一者。答告此者實我子也。於三子之中。自我手候久岐斯子也。自久下三。故與汝葦原色許男命爲兄弟二而。作堅其國。故自爾。大穴牟遲與少名毘古那二柱神相竝。作堅此國。然後者。其少名毘古那神者。度于常世國也。故顯白其少名毘古那神。所謂久延毘古者。於今者山田之曾富騰者也。此神者。足雖不行。盡知天下之事一神也。

かれ大國主の神、出雲の御大の御前にます時に、波の穂より、天の羅摩の船に乗りて、鷺の皮を内剝にはぎて衣服にして、歸來る神あり。かれ其の名を問はすれども答へず。また所從の神たちに問はすれども、皆「知らず」と申しき。こゝに多邇具久まをさく、「此は久延毘古ぞ、必ず知りたらむ」と申せば、即ち久延毘古を召して問はす時に、「こは神產巢日の神の御子、少名毘古那の神なり」と申しき。かれこゝに、神產巢日の御祖の命に申し上げしかば、「こはまことに我が御子なり、御子のなかに、我が手候よりくきし御子なり。かれ汝葦原色許男の命と兄弟となりて、其の國を作り堅めよ」とのり給ひき。かれそれより大穴牟遲、少名毘古那と、二柱の神相ならばして、この國を作り堅め給ひき。さて後には、その少名毘古那の神は、常世の國に渡りましき。かれその少名毘古那の神をあらはし

申せりし、いはゆる久延昆古は、今に山田の曾富騰といふものなり。この神は、足はあるかねども、天の下の事を、ことごとくに知れる神にもありける。

於是大國主神愁而。告吾獨何能得作此國。孰神與吾能相作此國耶。是時有光海依來之神。其神言。能治我前者。吾能共與相作成。若不然而者國難成。爾大國主神曰。然者。治奉之狀奈何。答言吾者。伊都岐奉于倭之青垣東山上。此者坐御諸山上之神也。

こゝに大國主の神うれひて、「われ獨りして、いかでもこの國を得作らむ。孰れの神と共に、吾は此の國を相作らまし。」と宣りたまひき。この時海原をてらしてより來る神あり。その神のり給はく、「あが御前をよく治めてば、あれ共々に相作りなしてむ。もし然らずば國なりがてまし。」とのり給ひき。かれ大國主の神申し給はく、「然らば治めまつらむまはいかにぞ。」と申し給へば、「あれをば、倭の青垣東の山の上につきまつれ。」とのり給ひき。こは御諸の山の上につき神なり。

○うれひ 少名昆古那神が常世の國に渡り給うた事を指す。

○御前云々 我によく仕へたならば。

○青垣 垣の様に山がぐるりを取り巻いて居る有様。

○御諸の山 大和の東にある三輪山の事

故其大年神。娶神活須昆神之女。伊怒比賣生子。大國御魂神。次韓神。次曾富理神。次白日神。次聖神。又娶香用比賣。生子。大香山戸臣神。次御年神。又娶天

知迦流美豆比賣。調天如天、亦自生子。奥津日子神。次奥津比賣命。亦名大戸比賣神。此

者諸人以拜竈神者也。次大山上咋神。亦名山末之大主神。此神者坐近淡海國之日枝山。

亦坐葛野之松尾。用鳴鑊神者也。次庭津日神。次阿須波神。次波比岐神。次香山戸臣神。次羽山戸神。次庭高津日神。次大土神。亦名土之御祖神。

上件大年神之子。自大國御魂神以下大土神以前。并十六神。

かれ、その大年の神、神活須昆の神の女、伊怒比賣にみあひまして生みませる御子、大國御魂の神、次に韓の神、次に曾富理の神、次に向日の神、次に聖の神。また香用比賣に

みあひまして生みませる御子、大香山戸臣の神、次に御年の神。また天知迦流美豆比賣に

娶ひまして生みませる御子、奥津日子の神、次に奥津比賣の命、亦の名は大戸比賣の神。

こは諸人のもちいつく竈の神なり。次に大山咋の神、またの名は山末の大主の神。この神

は、近つ淡海の國の日枝の山にます。又葛野の松の尾にます、鳴鑊になりませる神なり。

次に庭津日の神、次に阿須波の神、次に波比岐の神、次に香山戸臣の神、つぎに羽山戸の

○日枝 近江國。○松の尾 山城國。

神、次に庭高津日の神、次に大土の神、またの名は土の御祖の神。
上の件、大年の神の御子、大國御魂の神より以下大土の神まで、并せて十六神。

羽山戸神。娶ニ大氣津比賣神。自氣下四生子。若山咋神。次若年神。次妹若沙那賣神。
自沙下三 次彌豆腐岐神。自彌下四 次夏高津日神。亦名夏之賣神。次秋毘賣神。次久久年神。以久二字 次久久紀若室葛根神。以久紀三字 字以音。

上件羽山戸神之子。自若山咋神以下。若室葛根神以前。并八神。
羽山戸の神、大氣津比賣の神に娶ひまして生みませる御子、若山咋の神。つぎに若年の神、次に妹若沙那賣の神、次に彌豆腐岐の神、つぎに夏高津日の神、またの名は夏の賣の神、次に秋毘賣の神、次に久久年の神、次に久久紀若室葛根の神。

上の件、羽山戸の神の御子、若山咋の神より以下、若室葛根の神まで、并せて八神。
天照大御神之命以。豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者。我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國。言因賜而。天降也。於是天忍穗耳命。於天浮橋多多志。而詔之。

豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者。伊多久佐夜藝且。此七字以音。有祁理。此二字以音。告而。更還上。請于天照大御神。爾高御產巢日神。天照大御神之命以。於天安河之河原。神ニ集八百萬神ニ集而。思金神令レ思而詔。此葦原中國者。我御子之所知國。言依所レ賜國也。故以爲於此國道速振荒振國神等之多在。是使何神ニ而將ニ言趣。爾思金神及八百萬神議白之。天菩比神是可遣。故遣天菩比神者。乃媚附大國主神。至子三年。不復奏。

○豐葦原 豐は美稱 葦原は天上から此の國土を指して未開の狀態にあるのを指す
○據きて 立ち騒いで。
○道速振 神の冠辭で其の勢力の偉大を形容したもの。
○ことむけまし 自分の命に服させよう

天照大御神之命以ちて、「豐葦原の千秋の長五百秋の水穗の國は、我が御子、正勝吾勝勝速日天の忍穗耳の命の知らさむ國」と言よさしたまひて、天降し給ひき。是に天の忍穗耳の命、天の浮橋に立たして詔り給はく、「豐葦原の千秋の長五百秋の水穗の國は、いたくさやぎて有りけり。」と告り給ひて、更に還り上らして、天照大御神に申し給ひき。かれ、高御產巢日の神、天照大御神の命もちて、天安の河の河原に、八百萬の神を神集へに集へて、思金の神に思はしめて詔り給はく、「この葦原の中つ國は、我が御子の知らさむ國と、言よさし給へる國なり。かれ、この國に道速振荒振國つ神どもの多なると思ほすは、何れの神を使はしてかことむけまし。」と詔り給ひき。こゝに思金の神、また八百萬の神たち議

りて、天の菩比の神、これ遣はしてむ。」と白しき。かれ、天の菩比の神を遣はしつれば、やがて大國主の神に媚び附きて、三年になるまで復奏さざりき。

是以高御產巢日神天照大御神。亦問諸神等。所遣葦原中國之天菩比神。久不復奏。亦使何神之吉。爾思金神答曰。可遣天津國玉神之子。天若日子。故爾以天之麻迦古弓。自麻下三字以音。天之波波。以二字。矢。賜天若日子而遣。於是天若日子。降其國。即娶大國主神之女下照比賣。亦慮獲其國。至于八年。不復奏。故爾天照大御神高御產巢日神。亦問諸神等。天若日子久不復奏。又遣曷神以。問天若日子之淹留所由。於是諸神及思金神答曰。可遣雉名鳴女時。詔之。汝行問天若日子狀者。汝所以使葦原中國者。言趣和其國之荒振神等之者也。何至于八年不復奏。こゝをもて、高御產巢日神、天照大御神、また諸の神たちに問ひ給はく、「葦原の中つ國に遣はせる天の菩比の神、久しくかへりごと申さず。又何れの神をば遣はしてばえけむ。」こゝに思金の神申しけらく、「天津國玉の神の子、天若日子を遣はしてむ。」と申しき。かれ、こゝに、天の麻迦古弓、天の波々矢を天若日子に賜ひて遣はしき。こゝに、天若日

○天の麻迦古弓 麻は美稱、迦古は鹿兒、鹿を射るべき大弓。○波々矢 羽張矢に當り羽の大きな矢。

子、かの國に降りつきて、即ち大國主の神の女下照比賣を妻とし、又其の國を獲むと思ひはかりて、八年に至るまで復奏さざりき。かれ、こゝに、天照大御神、高御產巢日神、また諸の神等に問ひ給はく、「天若日子、久しく復奏さず、またいづれの神を遣はしてか、天若日子が久しく留まる故を問はしめむ。」と問ひ給ひき。こゝに諸の神たち、また思金の神申さく、「雉名鳴女を遣はしてむ。」と申す時に、詔り給はく、「汝行きて、天若日子に問はむさまは、汝を葦原の中つ國に遣はせる故は、其の國の荒振神どもを言むけ和せとなり。なほ八年になるまでかへりごと申さざると問へ。」と詔り給ひき。

○名鳴女 自分の名を鳴くといふ義。書紀に「無名女」とある様に卑しい者の義。○和せ 柔けよ。

故爾鳴女自天降到。居天若日子之門湯津楓上而。言委曲如天神之詔命。爾天佐具賣。此三字。以音。聞此鳥言而。語天若日子言。此鳥者其鳴音甚惡。故可射殺云進。即天若日子。持天神所賜天之波士弓天之加久矢。射殺其雉。爾其矢自雉胸通而。逆射上。逮下坐天安河之河原。天照大御神。高木神之御所。是高木神者。高御產巢日神之別名。故高木神取其矢見者。血著其矢羽。於是高木神。告之此矢者所賜天若日子之矢。即示諸神等詔者。或天若日子。不誤命。爲射惡神之矢之至者。不中。天若

日子。或有邪心者。天若日子於此矢。麻賀禮此三字以音云而。取其矢。自其矢穴。衛返下者。中下天若日子。寢胡牀之高胸坂。以死。此還矢可。恐之本也亦其雉不還。故於今諺。曰雉之頓使一本是也。

○湯津楓 湯津は五百箇(いはつ)で枝の多い義、楓は桂。

○波士弓 前の麻迦古弓と同じ、體(はじ)の木で造つた弓。○加久矢 波々矢。

○命 詔命。○まがれ 曲(まが)あれの約で、禍あれ、死すべしの意。

かれこ、に鳴女、天より降りつきて、天若日子が門なる湯津楓の上に居て、まつぶさに天つ神の詔命のごとのりき。こ、に天の佐具賣、この鳥のいふことを聞きて、天若日子に、「この鳥は鳴く聲いと悪し、かれ射殺したまひぬ。」といひす、むれば、即ち天若日子、天つ神の賜へる天の波士弓、天の加久矢を持ちて、この雉を射殺しつ。こ、に其の矢、雉の胸よりとほりて、さかさまに射上げらえて、天の安の河原にまします、天照大御神、高木の神の御所にいたりき。この高木の神は、高御産巢日の神のまたの御名なり。かれ、高木の神、その矢を取らしてみそなはずれば、その矢の羽に血つきたり。こ、に高木の神、「この矢は天若日子に賜へりし矢ぞかし。」と告りたまひて、即ち諸の神たちに見せて詔り給へらくは、「もし天若日子、命をたがへず、荒ぶる神を射たりし矢の來つるならば、天若日子に中らざれ、もしきたなき心あらば、天若日子この矢にまがれ。」とのり給ひて、其の矢を取らして、その矢の穴より、つきかへしたまひしかば、天若日子が胡牀に寢たる

○高胸坂 胸部。○雉の頓使 頓は單と同意。

高胸坂にあたりて身失せにき。またかの雉かへらす。かれ今に諺に、雉の頓使といふ本これなり。

○風のむた 風と共に。

○喪屋 殯宮。○ささりもち 死者に供へる食物を持つて行く者。

○翠鳥 翡翠。○御食人 死者に供へる食儀を掌る者。○雉女 米を舂く者。○遊び 樂に當り、歌管絃歌舞を指す。

故天若日子之妻下照比賣之哭聲。與風響。到天。於是在天天若日子之父。天津國玉神。及其妻子聞而。降來哭悲。乃於其處作喪屋而。河鴈爲岐佐理持。自岐下三爲掃持。翠鳥爲御食人。雀爲雉女。雉爲哭女。如此行定而。日八日夜八夜以遊也。かれ天若日子が妻、下照比賣の哭かせる聲、風のむた響きて天に到りき。こ、に、天なる天若日子が父、天津國玉の神、又その妻子供、聞きて、降り來て泣き悲しみて、すなはち其處に喪屋を作りて、河鴈をささりもちとし、鶯を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を雉女とし、雉を泣女とし、かく行ひ定めて、日八日、夜八夜を遊びたりき。

此時阿遲志貴高日子根神自阿下四字以音到而。弔天若日子之喪二時。自天降到天若日子之父。亦其妻皆哭云。我子者不_レ死有_レ禰理。此二字以音下效此我君者不_レ死坐_レ禰理云。取懸手足而。哭悲也。其過所以者。此二柱神之容姿。甚能相似。故是以過也。於是阿遲志貴高日

先づその天の尾羽張の神は、天の安の河の水を逆に塞ぎ上げて、道を塞ぎ居れば、あだし神は得行かじ、かれ別に、天の迦久の神を遣はして問ひ給ふべし。」と申しき。かれこゝに天の迦久の神を使はして、天の尾羽張の神に問ふ時に、「かしこし、仕へ奉らむ。然れども此の道には、僕が子建御雷の神を遣はすべし。」と申して、乃ち貢進りき。かれ、天の鳥船の神を建御雷の神に副へて遣はしき。

○此の道 葦原の中つ國を所謂言向けに行く事を指していふ
○天の鳥船の神 夷鳥の神と同神。

是以。此一神降に出雲國伊那佐之小濱而。伊那佐三拔三十掬劍。逆刺立于浪穗。跌坐其劍前。問其大國主神。言。天照大御神高木神之命以問使之。汝之宇志波祢流。此五字葦原中國者。我御子之所知國言依賜。故汝心奈何。爾答白之。僕者不_レ得白。我子八重言代主神。是可_レ自然。爲鳥遊取魚而。往御大之前。未還來。故爾遣_三天鳥船神_一。徵_三來八重事代主神_二而。問賜之時。語其父大神言。恐之。此國者。立_三奉天神之御子_一。即蹈_三傾其船_二而。天逆手突於青柴垣_一打成而。隱也。訓_三柴云_二こゝをもて、この二柱の神、出雲の國伊那佐の小濱に降り著きて、十掬劍を抜きて、浪の穗に逆_三に刺し立てて、其の劍の前に_二踏み坐て、其の大國主の神に_一問ひ給はく、「天照大

○伊那佐 神名帳に出雲國出雲郡因佐の神社といふのがある。
○踏み坐て 胡坐して遊ぶこと。

○鳥の遊び 鳥を獵して遊ぶこと。

○天の逆手 呪術の一種で、これで船を柴垣にしようといふのである。
○打ち成す 變化せしめる。

御神高木の神の命もちて、問ひに使はせり。汝が領ける葦原の中つ國は、我が御子の知らさむ國と言依し給へり。故汝が心奈何にぞ。」と問ひ給ふ時に、答へまつらく、「僕は得申さじ、我が子八重言代主の神、これ白すべきを、鳥の遊び、取魚しに御大の前に往きて、未だ還り來ず。」と申しき。かれこゝに天の鳥船の神を遣はして、八重事代主の神を召して問ひ給ふ時に、其の父大神に、「かしこし、此の國は、天つ神の御子に奉り給へ。」といひて、即ち其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ちなして、隠りましき。

故爾問其大國主神。今汝子事代主神。如_レ此白訖。亦有_三可_レ白子_二乎。於是亦白之。亦我子有_三建御名方神_一。除_レ此者無也。如_レ此白之間。其建御名方神。千引石擊_三手末_二而來言。誰來_三我國_二而。忍忍如_レ此物言。然欲_三爲力競_一。故我先欲_レ取_三其御手_二。故令_レ取_三其御手_二者。即取_三成立冰_一。亦取_三成劍刃_一。故爾懼而退居。爾欲_レ取_三其建御名方神之手_二。乞歸而取者。如_レ取_三若葦_一。搦批而投離者。即逃去。故追往而。迫_三到科野國之洲羽海_一。將_レ殺時。建御名方神白。恐。莫_レ殺_レ我。除_三此地_二者。不_レ行_三他處_一。亦不_レ違_三我父大國主神之命_一。不_レ違_三八重事代主神之言_一。此葦原中國者。隨_三天神御子之命_一獻。

かれこゝに、その大國主の神に問ひ給はく、「今汝が子、事代主の神かく申しぬ。また申すべき子ありや。」と問ひ給ひき。こゝに又申しつらく、「また我が子、建御名方の神あり。これを除きては無し。」かく申し給ふ折しも、この建御名方の神、千引石を手末に擎けて来て、「誰ぞ我が國に来て忍びくにかく物言ふ。しからば力競べせむ。かれ我先づその御手を取らむ。」と云ふ。かれ、その御手を取らしむれば、即ち立氷に取りなして、また劔刃に取りなしつ。かれ懼れて退き居り。こゝにその建御名方の神の手を取らむと乞ひかへして取れば、若葦を取るがごと、つかみひしぎて投げはなち給へば、即ち逃げ去にき。かれ追ひ往きて、科野の國の洲羽の海に迫りて、殺さむとし給ふ時に、建御名方の神申しつらく、「かしこし、我をな殺し給ひそ。此の處をおきては、あだし處に行かじ。また我が父大國主の神の命に違はじ、八重事代主の神の言に違はじ。この葦原の中つ國は、天つ神の御子の命のまに〜奉らむ。」と申し給ひき。

故更且還來。問其大國主神。汝子等。事代主神。建御名方神二神者。隨天神御子之命。勿違白訖。故汝心奈何。爾答白之。僕子等二神隨白。僕之不違。此葦原中國者。隨

○立氷 冰柱。
○乞ひかへす 逆に建御雷の神が御名方の神の手を貸して呉れと要求される事。
○洲羽の海 豐前河

命既獻也。唯僕住所者。如天神御子之天津日繼所レ知之。登陀流此三字以天之御巢而。於三底津石根二宮柱布斗斯理。此四字於高天原二冰木多迦斯理。多迦斯理而。治賜者。僕者。於三百不足八十堀手隱而侍。亦僕子等。百八十神者。即八重事代主神。爲三神之御尾前而仕奉者。違神者非也。如レ此之白而。乃隱也。かれ更にまた還り来て、その大國主の神に問ひ給はく、「汝が子ども、事代主の神、建御名方の神二神は、天つ神の御子の命のまに〜、違はじと申しぬ。かれ、汝が心如何にぞ。」と問ひ給ひき。爾に答へまつらく、「僕が子ども二神の申せるまに〜、僕も違はじ。この葦原の中つ國は、命のまに〜既に獻らむ。たゞ僕が住所をば、天つ神の御子の天津日繼知しめさむ、とだる天の御巢なして、底津岩根に宮柱太しり、高天の原に冰木高しりて治め給はば、僕は百足らず八十堀手に隠りて侍らひなむ。また僕が子ども、百八十神は、八重事代主の神、神の御尾前となりて仕へまつらば、違ふ神はあらじ。」かく申し、乃ち隠りましき。

故隨白而。於三出雲國之多藝志之小濱。造天之御舍。多藝志三字以音。而。水戸神之孫。櫛八玉

○とだる天の云々 天神の厨の屋根の煙出しの穴の様に、とだるは高足る。千木垂の雨説がある。
○百足らず 八十の枕詞。
○八十堀手 黄泉國
○御尾前 前后的事

○御舍 出雲の大神
 ○膳夫 膳部を掌る人、宮中の大膳職。
 ○八十毘良迦 澤山の淺い十器。
 ○柄 蓋。
 ○燈白燈杆 火をきり出す道具。
 ○八拳たるまで 永く焼いて榮えに榮えるといふ意。
 ○尾鬘 鬘の小さな盤。
 ○さわ／＼に 栲繩を海人などが曳く時うら／＼有様。
 ○を／＼に 竹も撻むばかりに。
 ○真魚昨 魚の料理

神。爲膳夫。獻天御饗之時。禱白而。櫛八玉神化。入海底。咋出底之波。此二字。作天八十毘良迦。而。鎌海布之柄。作燈白。以海尊之柄。作燈杆。而。鑽出火云。是我所燈火者。於高天原者。神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝煙。調凝煙之、八拳垂摩耳燒舉。摩耳二地下者。於底津石根。燒凝而。栲繩之千尋繩打延。爲釣海人之。口大之尾鬘。須受岐。佐和佐和。控依騰而。打竹之登遠登遠。遠。此七字。獻天之真魚昨也。故建御雷神。返參上。復下奏言。向和平葦原中國之狀。かれ、申し給ひしまに／＼、出雲の國の多藝志の小濱に、天の御舍を造りて、水戸の神の孫、櫛八玉の神を膳夫として、天の御饗たてまつる時に、禱ぎ申して、櫛八玉の神鶴に化りて、海の底に入りて、底の埴を喰ひ出で、天の八十毘良迦を作りて、海布の柄を鎌りて燈白を作り、海尊の柄を燈杆に作りて、火を鑽り出でて申しけらく、「この我が燈れる火は、高天の原には神產巢日御祖の命の、登陀流天の新巢の凝煙の八拳たるまで燒きあげ、地の下は、底津岩根に燒きこらして、栲繩の千尋繩打ちはへ、釣らせる海人が、大口の尾鬘、さわ／＼に引寄せあけて、拆竹のとを／＼に、天の真魚昨、獻らむ」と申しき。かれ、建御雷神、返り參上りて、葦原の中つ國、言向け和しぬる狀を復奏し給ひき。

○通成志 書紀には「熊石」と書いてある物の豊かに充ち溢れた意の美稱。

爾天照大御神高木神之命以。詔太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命。今平訖葦原中國之白。故隨言依賜。降坐而知看。爾其太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命答白。僕者。將降裝束之間。子生出。名天邇岐志國邇岐志。天津日高日子番能邇邇藝命。此子應降也。爾に、天照大御神高木の神の御言もちて、日嗣の御子、正勝吾勝勝速日天の忍穗耳の命に詔り給はく、「今葦原の中つ國言向け訖へぬと白す。かれ、言よさし賜へりしまに／＼、降りまして知ろしめせ。」と詔り給ひき。爾に、その日嗣の御子、正勝吾勝勝速日天の忍穗耳の命の白し給はく、「僕は降りなむ裝ひせしほどに、御子生れ坐しつ。御名は、天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝の命。此の御子を降すべし。」と白し給ひき。此御子者。御合高木神之女。萬幡豐秋津師比賣命一生子。天火明命。次日子番能邇邇藝命二也。是以隨言白之。科詔日子番能邇邇藝命。此豐葦原水穗國者。汝將知國言依賜。故隨言命以可天降。

この御子は、高木の神の御女、萬幡豐秋津師比賣の命に御合ひまして生みませる御子、天の火明の命、次に日子番能邇々藝の命にます。こゝをもて、申し給ふまに、日子番能邇々藝の命に仰せて、「この豊葦原の水穂の國は、汝知らさむ國なりと、言よさし給ふ。かれ、命のまに、天降りますべし。」と宣り給ひき。

爾日子番能邇々藝命。將天降之時。居天之八衢二面。上光高天原。下光葦原中國之神。於是。有。故爾天照大御神高木神之命以。詔天宇受賣神。汝者雖有手弱女人。與伊牟迦布神。自伊至。而勝神。故專汝往將問者。吾御子爲天降之道。誰如。此而居。故問賜之時。答曰。僕者國神。名獲田毘古神也。所以出居者。聞天神御子天降坐。故。仕奉御前二面。參向之侍。

○天の八衢 衢は道股(ちまた)の意。

かれに、日子番能邇々藝の命、天降りまさむとする時に、天の八衢に居て、上は高天原を光らし、下は葦原の中つ國を光らす神こゝにあり。かれ、こゝに、天照大御神高木の神の命もちて、天宇受賣の神に詔り給はく、「汝は手弱女なれども、伊牟迦布神と面勝神なり。かれ専ら汝行きて問はむは、わが御子の天降り

まさむとする道を、誰ぞかくて居ると問へ。」と宣り給ひき。かれ問はせ給ふ時に、答へ申さく、「僕は國つ神、名は獲田毘古の神なり。出で居る故は、天つ神の御子天降りますと聞きつる故に、御前に仕へまつらむとして、參迎へさもらふ」と申し給ひき。

○國つ神 今天より降臨し給ふ神に對して自分の地位を明らかにし給ふのである
○出で居る故 この八衢に出で居る次第の意。

爾天兒屋命。布刀玉命。天宇受賣命。伊斯許理度賣命。玉祖命。并五伴緒矣支加而。天降也。

こゝに天の兒屋の命、布刀玉の命、天宇受賣の命、伊斯許理度賣の命、玉の祖の命、あはせて五伴の緒をくまり加へて、天降りまさしめ給ひき。

○くまり加へて くるは配るで、其の順に配り合はせて。

於是副賜其遠岐斯此三字 八尺勾瓊鏡。及草那藝劍。亦常世思金神。手力男神。天石門別神。而詔者。此之鏡者。專爲我御魂。而。如拜吾前。伊都岐奉。次思金神者。取持前事。爲政。

こゝに、かの招禱し八尺の勾瓊鏡、また草那藝の劍、また常世の思金の神、手力男神、天の石門別の神をそへ給ひて、詔り給ひつらくは、「これの鏡は、もはらあが御魂とし

○招禱し 天照大神を禱り招き出した。

て、あが御前をいつくがごと、いつきまつり給へ。次に思金の神は、御前の事をとりもちて、申し給へ。」と詔り給ひき。

此二柱神者。拜祭佐久久斯侶伊須受能宮。能以音次登由宇氣神。此者坐外宮之度相神者也。次天石戸別神。亦名謂楯石窗神。亦名謂豐石窗神。此神者。御門之神也。次手力男神者。坐佐那縣也。

此の二柱の神は、佐久々斯侶伊須受の宮にいつきまつる。次に登由宇氣の神、こは外つ宮の度相にます神なり。次に天の石戸別の神、またの名は楯石窗の神と申し、またの名は豊石窗の神と申す。この神は御門の神なり。次に手力男の神は佐那縣にませり。

○佐久々斯侶 鈴の枕詞。

○御門の神 皇孫の大御門守衛の神。

○佐那縣 伊勢多氣郡。

故其天兒屋命者。中臣連等之祖。布刀玉命者。忌部首等之祖。天宇受賣命者。媛女君等之祖。伊斯許理度賣命者。鏡作連等之祖。玉祖命者。玉祖連等之祖。

かれその天の兒屋の命は、中臣の連等が祖。布刀玉の命は、忌部の首等が祖。天の宇受賣の命は、媛女の君等が祖。伊斯許理度賣の命は、鏡作の連等が祖。玉の祖の命は、玉

の祖の連等が祖。

故爾詔天津日子番能邇邇藝命而。離天之石位。押分天之八重多那。能知和岐知和岐豆。坐于三紫日向之。高千穂之久士布流多氣。取負天之石鞞。取佩頭椎之大刀。取持天之波士弓。手挾天之真鹿兒矢。立御前而仕奉。故其天忍日命。通笠沙之御前而朝日之直刺國。夕日之日照國也。故此地甚吉地詔而。於底津石根。宮柱布斗斯理。於高天原。冰椽多迦斯理而坐也。

かれ爾に、天津日子番能邇邇藝の命、天の石位を離れ、天の八重棚雲を押分けて、稜威の道別きく、て、天の浮橋に、宇岐士摩理、そりたたして、筑紫の日向の高千穂の久士布流嶽に天降りましき。

かれこゝに、天の忍日の命、天津久米の命、二人、天の石鞞を取負ひ、頭椎の太刀を取佩き、天の波士弓を取持ち、天の真鹿兒矢を手挟み、御前に立たして仕へ奉りき。かれそ

○天の石位 高天の原にある御座所。
○稜威の道別 威風堂々道を進むこと。
○宇岐士摩理云々 未詳天の浮橋と云うた爲にその縁語を以て浮橋りといつたらしく、確かに立ち給うてまいふ程の意。
○久士布流嶽 高千穂嶽二山の一つ。
○頭椎 御首が穂の様に曲つて大なる物

○脊肉の韓國 海の
彼方の不毛の地。
○直刺す 直射する

の天の忍日の命、(此は大伴の連等が祖。)天津久米の命、(此は久米の直等が祖なり。)
茲に脊肉の韓國を、笠沙の御前に求ぎ通りて、詔り給はく、「こゝは、朝日の直刺す國、
夕日の日照る國なり、故、此地ぞいと吉き地。」と詔り給ひて、底津岩根に宮柱太知り、高
天の原に冰椽高知りてまし／＼き。

故爾詔ニ天宇受賣命。此立ニ御前ニ所ニ仕奉。獲田毘古大神者。專所顯申之汝送奉。亦其神
御名者。汝負仕奉。是以獲女君等。負ニ其獲田毘古之男神名ニ而。女呼ニ獲女君ニ之事是也。
故其獲田毘古神坐ニ阿邪訶_{此三字以}。時。爲レ漁而。於ニ比良夫貝_{自比至}。其手見ニ咋合_{レ音地名}。
而。沉ニ濁海鹽。故其沉ニ居底ニ之時名。謂ニ底度久御魂。度久_二其海水之都夫多都時名。
謂ニ都夫多都御魂_{自都下四}。其阿和佐久時名。謂ニ阿和佐久御魂。久_以。於レ是送ニ獲田毘
古神ニ而。還到。乃悉追ニ聚鱸廣物鱸狹物ニ以。問ニ言汝者天神御子仕奉耶ニ之時。諸魚皆仕
奉白之中。海鼠不レ白。爾天宇受賣命。謂ニ海鼠ニ云。此口乎不レ答之口而。以ニ紐小刀_{レ音}
拆ニ其口。故於レ今海鼠口拆也。是以御世。鳥之速鬣獸之時。給ニ獲女君等ニ也。
かれ、茲に、天の宇受賣の命に詔り給はく、「この御前に立ちて仕へ奉れりし、獲田毘古

の大神をば、もはらあらはし申せる汝、送り奉れ。またその神の御名は、汝負ひて仕へ奉
れ。」と詔り給ひき。是を以て、獲女の君等、その獲田毘古の男神の御名を負ひて、女を獲
女の君と呼ぶ事是れなり。

かれ、その獲田毘古の神、阿邪訶に坐しける時に、漁して、比良夫貝に其の手を咋ひ
合はさえて、海鹽に沉溺れ給ひき。かれ、その底に沉み居給ふ時の御名を、底度久御魂と
申し、その海水の都夫立つ時の御名を、都夫多都御魂と申し、その泡さく時の御名を、阿
和佐久御魂と申す。

茲に、獲田毘古の神を送りて、還り到りて、即ち悉に鱸の廣物、鱸の狹物を追ひ聚め
て、「汝は天つ神の御子に仕へ奉らむや。」と問ふときに、諸の魚ども皆、「仕へ奉らむ。」と
申す中に、海鼠白さず。かれ、天の宇受賣の命、海鼠に謂ひけらく、「此の口や、答へせぬ
口。」といひて、紐小刀もちてその口を拆きき。かれ、今に海鼠の口拆けたり。茲を以て御
世御世、鳥の速鬣獸れる時に、獲女の君等に賜ふなり。

於レ是天津日高日子番能邇邇藝能命。於ニ笠沙御前。遇ニ麗美人ニ爾。問ニ誰女。答白之。大

○阿邪訶 伊勢國阿
坂。
○比良夫貝 書紀續
日本紀に度々見え鮓
を指して云ふ。
○海鹽 鹽は潮の意
○底度久 度久は「づ
く」で底に著くの意。
○さく 咲く、起る
○鱸の廣物鱸の狹物
大小の魚類。
○紐小刀 書紀に七
首を「ひもかたな」
と訓ませてある。
○鳥の速鬣 志摩の
初物を奉るこゝで。

山津見神之女。名神阿多都比賣。此神名亦名謂三木花之佐久夜毘賣。此五字又問下有二汝之兄弟乎。答曰我姊石長比賣在也。爾詔。吾欲目合汝。奈何。答曰僕不得白。僕父大山津見神將也。故乞遣其父大山津見神之時。大歡喜而。副其姊石長比賣。令持二百取机代之物。奉出。故爾其姊者。因甚凶醜。見畏而。返送。唯留其弟木花之佐久夜毘賣。以。一宿爲婚。爾大山津見神。因返石長比賣。而。大恥。白送言。我之女二並立奉由者。使石長比賣者。天神御子之命。雖雪零風吹。恆如石而。常堅不動坐。亦使木花之佐久夜毘賣者。如木花之榮。榮坐。宇氣比豆自字下四字以音貢進。此今返石長比賣。而。獨留木花之佐久夜毘賣。故。天神御子之御壽者。木花之阿摩比能此五字坐以音。故是以至于今。天皇命等之御命不長也。故後木花之佐久夜毘賣。參出白。妾妊身。今臨產時。是天神之御子。私不可產。故請。爾詔。佐久夜毘賣。一宿哉妊。是非我子。必國神之子。爾答曰吾妊之子。若國神之子者。產不。幸。若天神之御子者。幸。即作無戸八尋殿。入其殿內。以土塗塞而。方產時。以火著其殿。而產也。故其火盛燒時。所生之子名。火照命。此者凡人阿多君之祖次生子名。火須勢理命。須勢理三字以音次生子御名。火遠理命。亦名天津日高日子穗穗手見命。柱三

○百取の机代の物
多くの御隨走土産物
○奉出しき 萬葉集
にも多くある用法。

○常に堅に常石と
こいはに堅石(か
たいは)の約で、動
かず揺れずの意。
○隨ひのみ 隨く堅
くない有様。

こゝに、天津日高日子番能邇々藝の命、笠沙の御前に、顔よき美人の遇へるに、「誰が女ぞ。」と問ひ給ひき。答へ白し給はく、「大山津見の神の女、名は神阿多都比賣、亦の名は木花之佐久夜毘賣。」と申しき。又、「汝が兄弟ありや。」と問ひ給へば、「我が姊石長比賣あり。」と申したまひき。かれ詔り給はく、「吾、汝に婚ひせむと思ふは如何に。」と詔りたまへば、「僕はえ申さじ、僕が父大山津見の神ぞ申さむ。」と申し給ひき。かれ、その父大山津見の神に乞ひに遣はしける時に、いたく喜びて、その姊石長比賣を副へて、百取の机代の物を持たしめて奉出しき。かれ、こゝに、その姊はいと醜きによりて、見畏みて返し送り給ひて、唯その弟木花之佐久夜毘賣を留めて、一宿婚はしつ。
こゝに大山津見の神、石長比賣を返し給へるに因りて、いたく恥ぢて、申し送りける言は、「我が女二人並べて奉れる由は、石長比賣を使はしてば、天つ神の御子の御命は、雪零り風吹けども、恆なること石の如く、常に堅に坐せ。また、木花之佐久夜毘賣を使はしてば、木の花の榮ゆるごと榮え坐せと、誓給ひて奉りき。かかるに今、石長比賣を返して、木花之佐久夜毘賣ひとり留めたまひつれば、天つ神の御子の御命は、木の花の脆ひのみ、ましまむ。」と白し給ひき。かれ、是を以て、今に至るまで、天皇命等の御命、長く

は坐さざるなり。

かれ後に、木花之佐久夜毘賣、參出でて申したまはく、「あれ妊めるを、今子産むべき時になりぬ。この天つ神の御子、わたくしに産み奉るべきにあらず。かれ、申す。」と申し給ひき。こゝに、詔り給はく、「佐久夜毘賣、一宿にや妊める。そは吾が御子にあらじ、必ず國つ神の子にこそあらめ。」と詔り給へば、「吾が妊める御子、若し國つ神の子ならむには、産むこと幸からじ。若し、天つ神の御子にまさば、幸からむ。」と申し給ひて、戸無き八尋殿を作りて、其の殿の内に入りまして、土もて塗り塞ぎて、産みます時に方りて、その殿に火をつけてなも産ましける。かれ、その火の盛りに焼ゆる時に、生まれませる御子の御名は、火照の命(こは隼人、阿多の君の祖)次に生まれませる御子の御名は、火須勢理の命(二柱)次に生まれませる御子の御名は天津日高日子穗々手見の命(二柱)。

○かれ申すと云々
 大切なお子様であるからこの由を申し上げますと姫が申し出られた。
 ○國つ神 土神。
 ○幸からじ 幸を動詞に用いたもの。
 ○隼人 「はやと」
 「はいと」も訓む。
 ○火須勢理の命 須勢理は連の意。

故火照命者。爲海佐知毘古。此四字以レ而。取鰭廣物鰭狹物。火遠理命者。爲山佐知毘古。而。取毛鹽物毛柔物。爾火遠理命。謂其兄火照命。各相易佐知欲も用。三度雖乞不許。然遂纒得相易。爾火遠理命。以海佐知釣魚。都不得一魚。亦其鉤失海。

於是其兄火照命。乞其鉤曰。山佐知母己之佐知佐知。海佐知母己之佐知佐知。今各謂返佐知之時。佐知其弟火遠理命答曰。汝鉤者。釣魚不レ得一魚。遂失海然。其兄強乞。故其弟。破御佩之十拳劍。作五百鉤。雖償。不レ取。亦作一千鉤。雖償。不レ受。云猶欲得其正本鉤。於是其弟。泣患居海邊之時。鹽椎神來問曰。何虛空津日高之。泣患所由。答言。我與兄易鉤而。失其鉤。是乞其鉤之故。雖償多鉤。不レ受。云猶欲得其本鉤。故泣患之。爾鹽椎神。云我爲汝命。作善議。即造无間勝間之小船。載其船以教曰。我押流其船者。差暫往。將有味御路。乃乘其道往者。如魚鱗所造之宮室。其綿津見神之宮者也。到其神御門者。傍之井上。有湯津香木。故坐其木上者。其海神之女。見相議者也。訓香木云云。加都良。かれ、火照の命は、海幸毘古として、鰭の廣物鰭の狹物を取り給ひ、火遠理の命は、山幸毘古として、毛の鹽物毛の柔物を取り給ひき。こゝに火遠理の命、その兄火照の命に、各に幸を相易へて用ゐてむと謂ひて、三度乞はししかども、許さざりき。然れども、遂に纒かに得易へたまひき。かれ、火遠理の命、海幸を以て魚釣らすに、かつて一魚をも得給はず。亦其の鉤をさへに海に失ひたまひき。是に其の兄火照の命、その鉤を乞ひて、

○海幸毘古 海に漁つて獲物を得る男。
 ○毛の鹽物毛の柔物 獸類の總稱。
 ○幸 獵具。

○己が幸々 自己の所有にかゝる道具、この句は實に古い日本語を現はして居る今の小兒が自己の領分をか所有さか、常に自己本位に表現するには、必ず繰り返して、この句法を同じものを使用する。
 ○鹽椎の神 鹽は知の變化、土は美稱、この名稱は或個人の神のみならず一般に知識の神に對しても用ゐる言はれて居る。
 ○虛空津日高 太子の稱。
 ○無間勝間 編目の細かくて隙のない籠。
 ○味御路 善い路即ち鹽道のこと。
 ○魚鱗のごと造れる 宮室 宮の門などが澤山並び建つてゐる有様を形容したるもの。
 ○湯津香木 枝の繁つた桂。湯津は五百箇。

「山幸も己が幸々、海幸も己が幸々。今は各幸返さむ。」と謂ふ時に、その弟火遠理の命、詔りたまはく、「汝の鉤は、魚釣りしに一魚も得ずて、遂に海に失ひてき。」と告り給へども、その兄、強ちに乞ひ微りき。かれその弟、御佩の十拳劍を破りて、五百鉤を作りて償ひ給へども、取らず。亦一千鉤を作りて償ひ給へども、受けずて、猶かの正本の鉤を得むとぞ謂ひける。茲に、その弟、海邊に泣き患ひて居ます時に、鹽椎の神來て問ひけらく、「如何にぞ、虛空津日高の泣き患ひ給ふ所以は。」と問へば、答へ給はく、「我兄と鉤を易へて、其の鉤を失ひてき。かくて、その鉤を乞ふ故に、數多の鉤を償ひしかども、受けずて、猶その本の鉤を得むといふなり。かれ、泣き患ふ。」と告り給ひき。鹽椎の神、「我、汝が命の御爲に、善き議せむ。」といひて、即ち無間勝間の小船を造りて、その船に載せ奉りて教へけらく、「我この船をおし流さば、稍暫時往で坐せ、味御路あらむ。乃ちその道に乗りて往ましなば、魚鱗のごと造れる宮室、それ綿津見の神の宮なり。その神の御門に到り坐しなば、傍なる井の上に湯津香木あらむ。かれ、その木のの上に坐さば、その海の神の御女、見て相議らむものぞ。」と教へ奉りき。

故隨教小行。備如其言。即登其香木以坐。爾海神之女。豐玉毘賣之從婢。持玉器。將酌水之時。於井有光。仰見者。有麗壯夫。登古下效。此以爲甚異奇。爾火遠理命見其婢。乞欲得水。婢乃酌水。入玉器。貢進。爾不飲水。解御頸之環。含口。唾入其玉器。於是其瓊著器。婢不離環。故瓊任著。以進豐玉毘賣命。爾見其環。問婢曰。若人有門外哉。答曰。有三人坐我井上香木之上。甚麗壯夫也。益我王而甚貴。故其人。乞水故。奉水者。不飲水。唾入此環。是不得離。故。任入將來而獻。爾豐玉毘賣命思奇。出見。乃見感。目合而。白其父曰。吾門有麗人。爾海神自出見云。此人者。天津日高之御子。虛空津日高矣。即於內率入而。美智皮之疊敷八重。亦絕疊八重敷其上。坐其上而。具百取机代物。爲御囊。即令婚其女豐玉毘賣。故至三二年。住其國。

かれ教へし隨に、少し出でましけるに、備にその言の如くなりしかば、即ち香木に登りてましましき。茲に、海の神の御女、豐玉毘賣の從婢、玉器を持ちて、水酌まむとする時に、井に光あり。仰ぎて見れば、麗はしき壯夫あり。いと異しと思ひき。かれ火遠理の命、その婢を見給ひて、「水を得しめよ。」と乞ひ給ふ。婢、乃ち水を酌みて、玉器に入れ

○玉器 玉は美稱、水を盛る器。

○我が王 綿津見の神を指す。

○天津日高 天子の稱、虚空津日高は太子の稱。

て奉りき。爾に、水をば飲み給はずて、御頸の瓊を解かして、御口に含みて、その玉器に唾き入れ給ひき。茲にその瓊、器に著きて、婢瓊を得離たず、故瓊つけながら、豊玉毘賣の命に奉りき。故、その瓊を見て、婢に、「若し、門の外に人ありや。」と問ひ給へば、「我が井の上の香木の上に人坐す。いと麗はしき壯夫に坐す。我が王にも優りていと貴し。かれ、その人水を乞はせる故に、奉りしかば、水をば飲まさずて、この瓊をなも唾き入れ給へる。これ、得離たぬ故に、入れながら持ち参來て奉りぬ。」と申しき。

かれ、豊玉毘賣の命、あやしと思ほして、出で見て、乃ち見感でて、目合ひして、その父に、「吾が門に、うるはしき人坐す。」と白し給ひき。茲に海の神、自ら出で見て、「此の人は、天津日高の御子、虚空津日高に坐せり。」といひて、即ち内に率て入れ奉りて、美智の皮の疊、八重を敷き、亦絶疊、八重をその上に敷きて、その上に坐せ(或はまさせ)奉りて、百取の机代の物を具へて、御饗して、即ち其の御女、豊玉毘賣を婚はせ奉りき。かれ三年といふまで、その國に住み給ひき。

於是火遠理命。思其初事而。大一歎。故豊玉毘賣命。聞其歎。以白其父言。三年

雖住。恆無歎。今夜爲一大歎。若有何由故。其父大神。問其聾夫曰。今且聞我女之語。云三年雖坐。恆無歎。今夜爲一大歎。若有由哉。亦到此問之由奈何。爾語其大神。備如其兄詞失鉤之狀。是以海神。悉召集海之大小魚問曰。若有取此鉤一魚乎。故諸魚白之。頃者赤海鯽魚。於喉鯁。物不食愁言。故必是取。於是探赤海鯽魚之喉者。有鉤。即取出而清洗。奉火遠理命之時。其綿津見大神。誨曰。以此此鉤。給其兄時。言狀者。此鉤者。淤煩鉤。須須鉤。貧鉤。宇流鉤云而。於後手賜。淤煩及須須亦字。然而。其兄作高田者。汝命。營下田。其兄作下田者。汝命營高田。爲然者。吾掌水故。三年之間。必其兄貧窮。若恨怨其爲然之事。而。攻戰者。出鹽盈珠而溺。若其愁請者。出鹽乾珠而活。如此令憶苦云。授鹽盈珠鹽乾珠并兩箇。即悉召集和邇魚。問曰。今天津日高之御子。虚空津日高。爲將出幸上國誰者幾日送奉而覆奏。故各。隨己身之尋長。限日而白之中。一尋和邇白。僕者一日送。即還來。故爾告其一尋和邇。然者汝送奉。若渡海中時。無令惶畏。即載其和邇之頸。送出。故如期。一日之内送奉也。其和邇將返之時。解所佩之紐小刀。著其頸而返。故其一尋和邇者。於今謂佐比持神也。

○大きなる歎き長
大息。

○割れる 責め求め
た所の。

○赤海鯉魚 鯛。

○喉 呑門。

○喉 轉。

○赤海鯉魚云々 心結
ばれ、心淺はかなる
貧しき、たばけたる
等の惡徳を釣り取る
釣の意。

○後手 後向き。

○水を掌れ「しる」
に掌を當ててあるの
は、教知の知と比し
てその源を知る事が
出来る。

○水を掌れ「しる」
に掌を當ててあるの
は、教知の知と比し
てその源を知る事が
出来る。

爾に、火遠理の命、その初めの事を思ほして、大きなる歎き一つし給ひき。かれ、豊玉
毘賣の命、その御歎きを聞かして、その父に白し給はく、「三年住み給へども、恆は歎かす
事もなかりしに、今夜大きなる歎き一つし給ひつるは、若し、何の所由あるにか。」(或は
もし何ぞ、故あるにか。)と白し給へば、その父の大神、その御婿の君に問ひまつらく、「今
且、我が女の語るを聞けば、三年坐せども恆は歎かす事もなかりしに、今夜大きなる歎き
し給ひつと申せり。若し所由ありや。亦此處に到ませる所由は如何にぞ。」と問ひ奉りき。
かれ、その大神に、つぶさにその兄の失せにし、鉤を罰れる状を語りたまひき。是を以
て、海の神、ことごとくに、海之大小魚を召集めて、「若し、この鉤を取れる魚ありや。」
と問ひ給ふ。かれ、諸の魚共白さく、「この頃、赤海鯉魚なも、喉に鯉ありて、物得食は
ずと愁ふなれば、必ず、是れ取りつらむ。」と白しき。茲に、赤海鯉魚の喉を探りしかば、
鉤あり。即ち、取り出でて清洗して、火遠理の命に奉る時に、その綿津見の大神誨へ
奉りけらく、「此の鉤を其の兄に給はむ時に、言り給はむ状は、此の鉤は、淤煩鉤、須々
鉤、貧鉤、宇流鉤、と云ひて、後手に賜へ。然して、その兄高田を作らば、汝が命は下田
を營り給へ。その兄下田を作らば、汝が命は高田を營り給へ。然爲給はば、吾、水を掌れ

○尋さのまに、
身長に應じて。

○勿強ませ奉りそ
怖ろしい目を見せ申
す様な事があつては
ならぬ。

○佐比持 佐比は物
を切る有様をいふ詞
で紐小刀を賜はつて
持つたのをいふ敬稱

ば、三年の間、必ず、その兄貧しくなりなむ。若しそれ然爲給ふことを恨みて、攻めなば、
鹽盈珠を出して溺らし、若しそれ愁ひ申さば、鹽乾珠を出して活し、かくして苦め給へ。」
と白して、鹽盈珠、鹽乾珠、并せて二個を授けまつりて、即ち、悉に、和邇魚共を召集め
て、問ひ給はく、「今、天津日高之御子、虚空津日高、上つ國に幸さむとす。誰は幾日に送
り奉りて、覆奏申さむ。」と問ひたまひき。かれ、各己身の尋さのまに、日を限りて白
すに、「一尋和邇、僕は一日に送り奉りて還り來なむ。」と白す。かれ、その一尋和邇に、「然
らば、汝送り奉りてよ、若し海中を渡る時、勿強ませ奉りそ。」と告りて、即ちその和邇の
頸に載せ奉りて、送り出し奉りき。
かれ、謂ひしがごと、一日の内に送り奉りき。その和邇返りなむとせし時に、御佩せる
紐小刀を解かして、その頸に著けてなも返し給ひける。かれその一尋和邇をば、今に佐比
持の神とぞいふなる。

是以備如三海神之教言。與其鉤。故自爾以後。稍愈貧。更起荒心。迫來。將攻之時。
出鹽盈珠而令溺。其愁請者。出鹽乾珠而救。如令三德苦之時。稽首白。僕者自

○誓首 古い詞で、
津波故罪を乞ふ意味

○種々の態 昔大雷
會の折などに舞樂と
して行はれるのであ
る。

今以後。爲_レ汝命之晝夜守護人_ニ而仕奉。故至今。其溺時之種種之態。不_レ絶仕奉也。
こ、を以て、備に海の神の教へし言の如くして、かの鉤を與へ給ひき。かれ、それよ
り後、いよ、貧しくなりて、更に荒き心_ニを起して迫め來。攻めなむとする時は、鹽盈珠を
出して溺らし、それ愁ひまをせば、鹽乾珠を出して救ひ、かくして寤めたまふ時に、稽首
白さく、「僕は今より以後、汝が命の晝夜の守護人となりてぞ仕へまつらむ。」とまをしき。
かれ、今に至るまで、その溺れし時の種々の態、絶えず仕へまつるなり。

於是海神之女豐玉毘賣命。自參出白之。妾已妊身。今臨_ニ產時_一。此念。天神之御子。不_レ
可_レ生_ニ海原_一。故參出到也。爾即於_ニ其海邊波限_一。以_ニ鵜羽_一爲_ニ齋草_一。造_ニ產殿_一。於是其產
殿未_ニ齋合_一。不忍御腹之急故。入_ニ坐產殿_一。爾將_ニ方產_一之時。白_ニ其日子_一言。凡_レ他國人
者。臨_ニ產時_一。以_ニ本國之形_一產生。故妾今以_ニ本身_一爲_ニ產。願_ニ勿見妾_一。於是思_ニ奇_一其言。
竊_ニ伺其方產_一者。化_ニ八尋和邇_一而。匍匐委蛇。即見驚畏而。遁退。爾豐玉毘賣命。知_ニ
其伺見之事_一。以_ニ爲心恥_一。乃生_ニ置其御子_一而。白_ニ妾恆_一。通_ニ海道_一。欲_ニ往來_一。然。伺_ニ見吾形_一
是甚忤之上。即塞_ニ海坂_一而。返入。是以名_ニ其所_一產之御子。謂_ニ天津日高日子波限建鵜草
葺不合命_一。

草葺不合命。訓_ニ波限_一云_ニ那藝佐_一
訓_ニ葺草_一云_ニ加夜_一

こ、に、海の神の御女豐玉毘賣の命、自ら參出て白し給はく、「妾はやくより妊めるを、
今御子産むべき時になりぬ。此を念ふに、天つ神の御子を、海原に生みまつるべきにあ
らず。かれ、まる出できつ。」とまをしたまひき。

かれ即ち、その海邊の波限に、鵜の羽の葺草にして、産殿を造りき。こ、に其の産殿、
未だ葺き合へぬに、御腹忍へがたくなりたまひければ、産殿に入りましき。こ、に御子産
みまさむとする時に、其の日子に白したまはく、「凡て他國の人は、子産むをりになれば、
本國の形になりてなも生むなる。かれ、妾も今本の身になりて産みなむとす。妾をな見
たまひそ。」とまをしたまひき。こ、に其の言を奇しと思ほして、其のまさかりに御子産み
たまふを伺見たまへば、八尋鰐になりて、匍匐もこよひき。かれ見驚き畏みて、遁け退き
たまひき。こ、に豐玉毘賣の命、その伺見たまひし事を知らして、うら恥かしくおもほし
て、其の御子を生み置きて、「妾、恆は海つ道を通して、通はむとこそ思ひしを、吾が形を
伺見たまひしが、いと恥かしきこと。」とまをして、即ち海坂を塞きて、返り入りましき。
是を以て、其の産れませる御子の御名を、天津日高日子波限建鵜草葺不合の命と申す。

○波限 渚。

○日子 夫、産火々
出見の命を指す。

○まさかりに 今將
にこいふ時に。
○匍匐もこよひき
腹聞ひうねつて居つ
た。

○海つ道 海神の國
と日本國土との道。
○海坂 坂は埒の義
海陸の境界。

然後者。雖恨其伺情。不忍戀心。因下治養其御子之緣。附其弟玉依毘賣而。獻歌之。其歌曰。阿加陀麻波。袁佐閉比迦禮杵。斯良多麻能。岐美何余曾比斯。多布斗久阿理祁理。爾其比古遲。三字答歌曰。意岐都登理。加毛度久斯麻遲。和賀章泥斯。伊毛波和須禮士。余能許登基登遲。故日子穗穗手見命者。坐高千穗宮伍佰捌拾歲。御陵者。卽在二其高千穗山之西一也。

然れども、後は、その伺見たまひし御心を恨みつゝも、戀しきにあへたはすて、其の御子を養しまつる縁に因りて、其の弟玉依毘賣に附けて、歌をなも獻りたまひける。その歌。

赤玉は 緒さへ光れど 白玉の 君がよそひし 貴くありけり

かれ、其の比古遲答へたまひける御歌。

奥つ鳥 鴨著く鳥に 我がる寢し 妹は忘れじ 世のことくくに

かれ、日子穗々手見の命は、高千穗の宮に伍百捌拾歳坐しき。御陵は、やがてその高千穗山の西の方にあり。

○養し 日足しに當り、養育する意。
○弟 昔は女性にも用ゐた。

○奥つ鳥 鴨の枕詞
○鴨著く著くは「つぐ」「つぐ」の意。
○高千穗の宮 大隅の鹿兒島神社を指す

○常世の國 外國。こゝでは三韓で新羅國王は此の神の御裔であるといふ。

是天津日高日子波限建鷦草葺不合命。娶其姨玉依毘賣命。生御子名。五瀬命。次稻冰命。次御毛沼命。次若御毛沼命。亦名豐御毛沼命。亦名神倭伊波禮毘古命。柱故御毛沼命者。跳波穗。渡坐于常世國。稻冰命者。爲妣國而。入坐海原也。この天津日高日子波限建鷦草葺不合の命、御姨玉依毘賣の命に娶ひて、生みませる御子の御名は、五瀬の命。次に稻冰の命。次に御毛沼の命。次に若御毛沼の命、またの御名は豐御毛沼の命、またの御名は神倭伊波禮毘古の命(四柱)かれ御毛沼の命は、波の穂を跳みて、常世の國に渡りまし、稻冰の命は、御妣の國として、海原に入りましき。

中卷

神武

神倭伊波禮毘古命。自伊下五與_レ其伊呂兄五瀬命。伊呂二柱。坐_二高千穗宮_一而議云。
 坐_二何地_一者。平_二聞看天下之政_一。猶思_二東行_一。即自_二日向_一發幸御_二筑紫_一。故到_二豐國宇沙_一
 之時。其土人。名字沙都比古宇沙都比賣。此十字二人。作_二足一騰宮_一而。獻_二大御饗_一。自_二
 其地_一遷移而。於_二益紫之岡田宮_一一年坐。亦從_二其國_一上幸而。於_二阿岐國之多祈理宮_一七年
 坐。自多下三亦從_二其國_一遷上幸而。於_二吉備之高島宮_一八年坐。
 神倭伊波禮毘古命。其同母兄五瀬の命と二柱、高千穂の宮にましまして議りたまは
 く、「何れの地にまさばか、天の下の政をば平らけく聞しめさむ。猶東の方にこそ行で
 まさめ。」とのりたまひて、即ち日向より發たして筑紫に幸しき。
 かれ豐國の宇沙に到りませる時に、其の土人、名は宇沙津比古、宇沙都比賣二人、足一
 つ騰の宮を作りて、大御饗獻りき。

○豐國の宇沙 豐前國佐郡。
 ○足一騰の宮 宇佐川の岸に構へた宮の形、一は柱を川の岸へ、一は川中に建てて造つたもの。

○岡田の宮 筑前國遠賀郡黒崎村。
 ○阿岐の國之多祈理の宮 安藝國高宮か

其地より遷らして、筑紫の岡田の宮に一年ましましき。
 また其の國より上り幸して、阿岐の國之多祈理の宮に七年ましましき。また其の國より遷り上り幸して、吉備の高島の宮に八年ましましき。

故從_二其國_一上幸之時。乘_二龜甲_一爲_レ釣乍打羽舉來人。遇_レ于_二速吸門_一。爾喚歸。問_二之_一汝者誰_一也。答_二曰_一僕者國神。名字豆毘古。又問_二汝者知_二海道_一乎。答_二曰_一能知。又問_二從而仕奉乎_一。答_二曰_一仕奉。故爾指_二度橋機_一。引_二入其御船_一。即賜_レ名_二號橋根津日子_一。此者倭祖之。

かれ其の國より上り幸す時に、龜の甲に乗りて、釣しつゝうち羽振り來る人、速吸門に遇ひき。かれ喚びよせて、「汝は誰ぞ。」と問はしければ、「僕は國つ神、名は宇豆毘古。」とまをしき。また、「汝は海つ道を知れりや。」と問はしければ、「能く知れり。」とまをしき。また「從に仕へまつらむや。」と問はしければ、「仕へまつらむ。」とまをしき。かれすなはち橋をさしわたして、其の御船に引き入れて、橋根津日子といふ名を賜ひき。(此は倭の國の造等が祖なり。)

○うち羽振る 左右の袖を打振る。
 ○速吸門 豐後海部郡早吸日女神社附近

○橋 舟を漕ぐ棹。

故從其國上行之時。經浪速之渡而泊青雲之白肩津。此時登美能那賀須泥昆古。自登下九與軍。待向以戰。爾取所入御船之楯而下立。故號其地謂楯津。於今者云三日下之蓼津也。於是與登美昆古戰之時。五瀨命。於御手負登美昆古之箭矢串。故爾詔。吾者爲日神之御子。向日而戰不敗。故負賤奴之痛手。自今者。行廻而背負日以擊期而自南方廻幸之時。到血沼海。洗其御手之血。故謂血沼海也。從其地廻幸。到紀國男之水門而詔。負賤奴之手乎死。爲男建而崩。故號其水門謂男水門也。陵即在紀國之竈山也。

かれ其の國より上り行でます時に、浪速之渡を経て、青雲の白肩の津に泊てたまひき。この時、登美能那賀須泥昆古軍を興して、待ち向ひて戦ひしかば、御船に入れたる楯を取りて下り立ち給ひき。かれ其の地の名を楯津とつけつるを、今に日下之蓼津ともいふ。こゝに登美昆古と戦ひたまふ時に、五瀨の命御手に登美昆古が痛矢串を負はしき。かれこゝに詔りたまはく、「吾は日の神の御子として、日に向ひて戦ふことふさはず。かれ賤奴が痛手をなも負ひつる。今よりはも行き廻りて、日を背負ひてこそ撃ちてめ。」と期

○其の國 不詳。
○浪速の渡 攝津國西生郡又は東生郡の西邊までをいふ。
○青雲の 白の枕詞
○白肩の津 河内の草香邑。
○登美 大和生駒郡
○日下之蓼津 河内國中河内郡日根市村
○痛矢串 矢の重傷

○血沼の海 和泉國和泉郡茅渚海。
○男之水門 和泉國泉南郡の南部の稱。
○竈山 紀伊國海草郡三田村に竈山神社とせいふのがある。

りたまひて、南の方より廻り幸すときに、血沼の海にいたりて、其の御手の血を洗ひたまひき。かれ血沼の海とはいふなり。其地より廻りいでまして、紀の國の男之水門に到りまして詔りたまはく、「賤奴が手を負ひてや命すぎなむ。」と、男健して崩りましぬ。かれ其の水門を男の水門とぞいふ。陵はやがて紀の國の竈山にあり。

故神倭伊波禮昆古命。從其地廻幸。到熊野村之時。大熊髮出入即失。爾神倭伊波禮昆古命。倏忽爲遠延。及御軍皆遠延而伏。遠延二字。此時熊野之高倉下。此者齋。一横刀。到於天神御子之伏地而獻之時。天神御子即寤起。詔長寢乎。故受三取其横刀之時。其熊野山之荒神。自皆爲切仆。爾其惑伏御軍。悉寤起之。故天神御子。問下獲其横刀之所由。高倉下答曰。已夢云。天照大神高木神。一柱神之命以。召建御雷神。而詔。葦原中國者伊多玖佐夜藝帝阿理祁理。此十一字。我之御子等。不坐坐良志。此二字。其葦原中國者。專汝所三言向之國故。汝建御雷神可降。爾答曰。僕雖不降。專有平三其國之横刀。可降。此刀名。云佐土布都神。亦名云雲布都神。降三此刀一狀者。穿三高

倉下之倉頂。自其墮入。故建御雷神教曰。穿汝之倉頂。以此刀墮入。故阿佐米余
玖字以音。汝取持。獻天神御子。故如夢教而。且見己倉者。信有橫刀。故以是橫
刀而獻耳。

○をえまし 病み疲
れること。
○高倉下 熊野の土
臺。
○天つ神の御子 茲
は神武天皇を云ふ。

かれ神倭伊波禮毘古の命、其地より廻りいでまして、熊野の村にいでませる時に、大き
なる熊、山より出でて即ち失せぬ。こゝに神倭伊波禮毘古の命倏忽にをえまし、また御
軍も皆をえて伏しき。此の時に熊野の高倉下、一横刀をもちて天つ神の御子の伏せる地に
まる来て、獻る時に、天つ神の御子即ち寤めまして、「長寢しつるかも。」と詔り給ひき。
かれ其の横刀を受け取り給ふ時に、其の熊野の山の荒ぶる神、自ら皆切り仆さえて、
かのをえ伏せる御軍悉に寤めたりき。かれ天つ神の御子、其の横刀を獲つる故を問ひた
まへば、高倉下答へ申さく、「己夢に、天照大神高木の神、二柱の神の命もちて、建御雷
の神を召して詔りたまはく、「葦原の中つ國は甚く騒ぎてありけり。我が御子たち不平みま
すらし。かの葦原の中つ國は、専ら汝が言向ける國なれば、汝建御雷神降りてよ。」と
のりたまひき。こゝに答へ申さく、「僕降らすとも、専らかの國平けし横刀あれば、降して
む。此の刀の名は佐士布都の神といふ、またの名は甕布都の神といふ、またの名は布都の

○不平み 惡神の毒
氣に觸れ 病むこと

○石の上の神の宮
大和國山添郡。

○朝日吉く 朝に早
く吉い物を見れば悦
ぶ意。
○且 明且の意。

御魂、此の刀は石の上の神の宮に坐す。この刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、
そこより墮し入れむ。」とまをしたまひき。(かれ建御雷神の神教へ給はく、「汝が倉の頂を穿ち
て、この刀を墮し入れむ。かれ朝日吉く、汝取り持ちて、天つ神の御子に獻れ。」と教へ
たまひき。かれ夢の教へのまゝに、且己が倉を見しかば、信に横刀ありき。かれこの横
刀は獻るにこそ。」とまをしき。)

於是亦高木大神之命以覺白之。天神御子。自此於奥方莫使入幸。荒神甚多。今自
天遣八咫鳥。故其八咫鳥引道。從其立後應幸行。故隨其教覺。從其八咫鳥之後
幸行者。到舌野河之河尻。時作筌有取魚人。爾天神御子。問汝者誰也。答曰僕
者國神。名謂執持之子。此者阿陀之
鴨養之祖。從其地幸行者。生尾人自井出來。其井有光。
爾問汝者誰也。答曰僕者國神。名謂井冰鹿。此者吉野
首等祖也。即入其山之。亦遇生尾人。
此人押三分巖而出來。爾問汝者誰也。答曰僕者國神。名謂石押分之子。今聞天神
御子幸行一故。參向耳。此者吉野
國巢之祖。自其地踏穿越。幸宇陀。故曰宇陀之穿也。
こゝにまた高木の大神の命もちて、さとし申したまはく、「天つ神の御子、こゝより與つ

○さとし申したまは
く 御夢に高木の大神
が覺し給ふのであ
る。

○八咫鳥 大いなる鳥の意。

○笮をうちて 笮を作つて。

○賛持 捕魚を業とする者。

○井冰鹿 井光の意の名であらう。

○宇陀 大和國宇陀郡宇賀茂村。

方かたになりましそ。荒ぶる神いと多かり。今天いまより八咫鳥やを遣せむ。かれ其の八咫鳥や導きなむ。其の立たむ後しりより幸すべし。」とさとし申したまひき。かれ其の御覺みしのまに、其の八咫鳥やの後しりよりいでもししかば、吉野よしのの河かはの河尻かはじりに到りましき。時に笮なをうちて魚取いさなる人ありき。こゝに天あまつ神かみの御子みこ、「汝いましは誰たれぞ。」と問はしければ、「僕は國くにつ神かみ、名なは賛持にちもちの子。」とまをしき。(此は阿陀あだ之の鶴養つるひの祖おや)。其地そのちよりいでもせば、尾おある人ひと井いより出いで來き、其の井光いひかりれり。「汝いましは誰たれぞ。」と問はせば、「僕は國くにつ神かみ、名なは井冰鹿いひか。」とまをしき。(此は吉野よしのの首等おびらが祖おやなり。)かくて其の山いに入りまししかば、また尾おある人ひと遇いへり。この人ひと巖いわをおし分わけて出いで來き。「汝いましは誰たれぞ。」と問はせば、「僕は國くにつ神かみ、名なは石押分いしおしわけの子こ、今天いまつ神かみの御子みこ幸いすと聞きける故ゆに、まる迎むかへまつるにこそ。」とまをしき。(此は吉野よしのの國巢くにすの祖おや)。其地そのちより踏ふみ穿うち越こえて宇陀うたに幸いしき。かれ宇陀うたの穿うちといふ。

故爾ゆ於こ三字陀さんじだ。有二ふた兄あに宇迦斯うかす。以下以下三字弟あに宇迦斯うかす二人。故先遣ゆ八咫鳥や。問と三人さん曰い。今天いま神かみ御子みこ幸行い。汝等なんぢら仕奉つかまつ乎。於こ是こ兄あに宇迦斯うかす。以もつ鳴鑼なるら待まち射返や其使し。故其鳴鑼所なるら落お之地ち。謂い訶夫羅前かぶらまへ也。將まさ待擊まち云い而聚あ軍然むすむす。不な得え聚軍あ者もの。欺あ陽やう仕奉つかまつ而して。作な大殿たい。

於こ其殿内そのどのうち作な押機待時おしきまち。弟宇迦斯あに先參向拜日まへまむかひひら。僕兄わがあに宇迦斯うかす。射返や天神御子あまのかみみこ之使し。將まさ爲な待攻まち而聚軍あ。不な得え聚軍あ者もの。作な大殿たい。其内張そのうち押機おしき。將まさ待取まち。故參向顯白まへまむかひあき。爾大伴連なんぢら等ら之祖道臣命そのおきな。久米直等くみちか之祖大久米命おほくみのみこと二人。召よ兄宇迦斯あに罵詈ののし云い。伊賀いげ此二字このふたご所こ作な仕奉つかまつ於こ大殿内そのどのうち者もの。意禮いれい此二字このふたご先入まへいり。明あき白あき其將そのまさ爲な仕奉つかまつ之狀そのさま而して。即握す横刀よこば之手て上う。矛こ由氣よき此二字このふたご矢刺而やさ。追入お之時とき。乃すなは己所おのれ作な押見おしみ打而死う。爾即控出斬散なんぢら。故其地謂ゆ三字陀さんじだ之血原ちのけ也。

かれこゝに宇陀うたに、兄宇迦斯あに弟宇迦斯あにと二人ありけり。かれ先づ八咫鳥やを遣はして、二人ふた人に問はしめたまはく、「今天いまつ神かみの御子みこいでませり、汝いましも仕つかまつへまつらむや。」こゝに兄宇迦斯あに鳴鑼なるらをもちて、其の御使みつかひを待ち射返やしき。かれ其の鳴鑼なるらの落ちたりし地そのちを訶夫羅前かぶらまへと謂いふ。待ち撃たむといひて、軍人いくさびとを聚めしかども、え聚めざりしかば、仕つかまつへまつらむと欺いりて、大殿おほを作りて、其の殿内そのどのうちに押機おしきを張りて待ちける時に、弟宇迦斯あに先づまる迎へて、拜まがみて申さく、「僕わがが兄あに、兄宇迦斯あに天あまつ神かみの御子みこの御使みつかひを射返やし、待ち攻めむとして軍を聚あむれども、え聚めざれば大殿おほを作り、其の内に押機おしきを張りて、待ち取らむとす。かれまる迎へて顯はしまをす。」と申しき。こゝに大伴おほの連等らが祖おや、道の臣みちのおみの命のみこと、久米くみの直等ちかが祖おや、

○鳴鑼 鑼矢。
○射返す 射て逐ひかへす。
○押機 陷陣の一種
○弟宇迦斯先づ云々 皇軍に敵すべからざるを知り參向して

○備が 備は誓の轉
で我の意、次のおれ
と同じく特に人を賤
めていふ詞。
○槍ゆけ 矛を授く

大久米の命二人、兄宇迦斯を召して罵りていひけらく、「備が作りつかへまつれる大殿内には、おれ先づ入りて、其のつかへまつらむとする状を明しまをせ。」といひて、横刀の手上握り、槍ゆけ矢刺して追ひ入る、時に、己が張り置ける押機に打たれて死にき。即ち控き出して斬り散りき。かれ其地を宇陀の血原となもいふ。

○高城 城は木棚を
結ひ廻らした處。

然而其弟宇迦斯之獻大饗者。悉賜其御軍。此時歌曰。宇陀能。多加紀爾。志藝和那波留。和賀麻都夜。志藝波佐夜良受。伊須久波斯。久治良佐夜流。古那美賀。那許波佐婆。多知曾婆能微能。那那久袁。許紀志斐惠泥。宇波那理賀。那許波佐婆。伊知佐加紀

○勇細し 細しは美
稱、鯨の勇しく勝れ
たのをいふ枕詞。

微能。意富那久袁。許紀陀斐惠泥。疊疊引志夜胡志夜。此者伊基能布曾。此五字 阿阿引

○立根稜の實 次句
の序詞。

志夜胡志夜。此者嘲咲者也。故其弟宇迦斯。此者宇陀水取等之祖也。然して其の弟宇迦斯が獻れる大饗をば、悉に其の御軍人どもに賜ひき。この時に御

○長けくを 長きを
○幾許 「いくはく」
○肉を薄く
小さく切れ。

歌よみしたまはく、
宇陀の 高城に 鳴籠張る 我が待つや 鳴は障らす 勇細し 鯨障る 前妻が 魚
乞はさば 立根稜の實の 長けくを 幾許稜るね 後妻が 魚乞はさば 拾實の

○拾實 拾は實の多
く生る木、下句の序

乞はさば 立根稜の實の 長けくを 幾許稜るね 後妻が 魚乞はさば 拾實の

○え、しゃこしや
あ、しゃこしや共
に今の體子。
○いこのふ 怒る。

大けくを 幾許稜るね
え、しゃこしや。(此はいこのふぞ。)あ、しゃこしや。(此は嘲咲ふぞ。)
かれ其の弟宇迦斯。(此は宇陀の水取等が祖なり。)

自其地幸行。到忍坂大室之時。生尾土雲具毛八十建。在其室待伊那流。此三字故爾天神御子之命以。饗賜八十建。於是宛八十建設八十膳夫。每人佩刀。誨其膳夫等曰。聞歌之者一時共斬。故明將打其土雲之歌曰。意佐加能。意富卒盧夜爾。比登佐波爾。岐伊理袁理。比登佐波爾。伊理袁理登母。美都美都斯。久米能古賀。久夫都伊。伊斯都伊母知。伊麻宇多婆余良斯。如此歌而。拔刀一時打殺也。其地よりいでまして、忍坂の大室に到りませる時に、尾ある土雲八十建、その室にありて待ちいなる。かれこゝに天つ神の御子の命もちて、八十建に御饗を賜ひき。こゝに八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、人毎に刀佩けて、其の膳夫どもに、歌を聞かば、一時に斬れと誨へたまひき。かれ其の土雲を打たむとすることを明せる歌。

○待ちいなる 待構
へる。

○みつ／＼し 勢ひ
 猛き有様。
 ○久米の子 久米部
 の軍兵。
 ○頭椎石椎 前の頭
 椎に同じ。

忍坂の 大室屋に 人多に 來入り居り 人多に 入り居りとも みつ／＼し 久米
 の子が 頭椎石椎もち 撃ちてしやまむ みつ／＼し 久米の子等が 頭椎石椎
 もち 今撃たば善らし
 かく歌ひて、刀を抜きてもろともうち殺しつ。

○根芽 根は登美昆
 古、芽はその黨類に
 譬へたもの。

○口響く 口中のび
 りびりするこぞ。

然後將レ撃ニ登美昆古ニ之時歌曰。美都美都斯。久米能古良賀。阿波布爾波。賀美良比登
 母登。曾泥賀母登。曾泥米都那藝豆。宇知豆志夜麻牟。又歌曰。美都美都斯 久米能古
 良賀。加岐母登爾。宇惠志波士加美。久知比比久。和禮波和須禮士。宇知豆斯夜麻牟。
 その後、登美昆古を撃ちたまはむとせし時の大御歌。
 みつ／＼し 久米の子等が 粟生には 臭蕪一莖 其根が莖 其根芽繋ぎて 撃ちて
 しやまむ
 また、
 みつ／＼し 久米の子等が 垣下に 植ゑし 葦 口響く 吾は忘れじ 撃ちてしや
 まむ

○神風の 伊勢の枕
 詞。
 ○細螺 一種の貝殻
 ○いはじもとほり
 「いはは接頭語。
 ○榊並めて 次句の
 枕詞。
 ○榊の間よも 榊の
 間より、「も」は添辭
 ○鳥つ鳥 鶴の枕詞

又歌曰。加牟加是能。伊勢能宇美能。意斐志爾。波比母登富呂布。志多陀美能。伊波比
 母登富理。宇知豆志夜麻牟。又撃ニ兄師木弟師木ニ之時、御軍暫疲。爾歌曰。多多那米
 豆。伊那佐能夜麻能。許能麻用母。伊由岐麻毛良比。多多加閉婆。和禮波夜惠奴。志麻
 都登理。宇上加比賀登母。伊麻須氣爾許泥。
 また、

神風の 伊勢の海の 大石に はひもとほらふ 細螺の いはひもとほり 撃ちてし
 やまむ
 また兄師木弟師木を撃ちたまへる時に、御軍暫しは疲れたりき。そのときの大御歌。
 榊並めて 伊那佐の山の 樹の間よも い行きまもらひ 戦へば われはや仇ぬ 鳥
 つ鳥 鶴養が徒 今助に來ね

故爾邇藝速日命。參赴白レ於ニ天神御子。聞ニ天神御子天降坐ニ故。追參降來。即獻ニ天津
 瑞以仕奉也。故邇藝速日命。娶ニ登美昆古之妹。登美夜昆賣ニ生子。宇摩志麻遲命。者此

物部連。德積臣。妹臣祖也。

○天つ神の御子。尚は神武天皇、後は邇邇速日の命を指す。

○天つ瑞。天孫であるといふしるしの寶

かれ茲に邇邇速日の命まる来て、天つ神の御子に申さく、「天つ神の御子天降りましぬと聞きつる故に、追ひてまる降り來つ。」と申して、即ち天つ瑞を獻りて仕へまつりき。かれ邇邇速日の命、登美毘古が妹、登美夜毘賣に娶ひて生める子、宇摩志麻遲の命。(此は物部の連、德積の臣、妹の臣の祖なり。)

故如此。言「向平和荒夫琉神等。」夫琉二字。退「撥不伏人等」而。坐「畝火之白檮原宮」治「天下」也。

○言向けやはし。皇軍が賊黨に對して先づ降順すべき旨を懇に説くこと。

○白檮原。大和國高市郡政傍山の麓。

かれかくのごと、荒ぶる神等を言向けやはし、伏はぬ人どもを掃ひ平けたまひて、畝火の白檮原の宮にましまして、天の下治しめしき。

○阿多之小椅。地名による名であらう。

故坐三日向一時。娶阿多之小椅君妹。名阿比良比賣。自阿以下生子。多藝志美美命。次岐須美美命。二柱坐也。

かれ日向にましましし時、阿多之小椅の君の妹、名は阿比良比賣を娶して生みませる御

子、多藝志美々の命、次に岐須美々の命、二柱ませり。

然更求下爲「太后」之美人也時。大久米命曰。此間有「媛」女是「謂神御子」。其所「以謂神御子」者。三島湮咋之女。名勢夜陀多良比賣。其容姿麗美故。美和之大物主神見感而。其美人爲「大便」之時。化「丹塗」矢。自「其爲大便之溝流下」。突「其美人之富登」。此二字「以爾其美人」驚而。立走伊須須岐伎。此五字。乃將「來其矢」。置「於」牀邊。忽成「麗壯夫」。即娶「其美人」。生子。名謂「富登多多良伊須須岐比賣命」。亦名謂「比賣多多良伊須氣余理比賣」。是者惡「其富登」云。故是以謂「神御子」也。

然れども更に、太后とせむ美人を求ぎたまふ時に、大久米の命のまをさく、「こゝに神の御子なりとまをす媛女あり。そを神の御子なりとまをす所以は、三島の湮咋の女、名は勢夜陀多良比賣、それ容姿麗かりければ、美和の大物主の神見感でて、其の美人の廁に入れる時に、丹塗矢になりて、其の廁の下より、其の美人の富登を突き給ひき。かれ其の美人驚きて、立ち走りいすゞぎき。かくて其の矢を持ち來て、牀の邊に置きしかば、忽ちに麗はしき壯夫に成りて、即ち其の美人に娶ひて生みませる御子、名は富登多多良伊須々岐比

○美和。三輪。

○富登。隱部。

○いすゞぎき。驚いて立ち惑ふ様。

賣の命、またの名は、比賣多多良伊須氣余理比賣とまをす。(こは其の富登といふことを惡みて、後に改へつる名なり。)かれこを以て神の御子とはまをすなり。」とまをしき。

於是七媛女。遊行於高佐士野。佐士二字以音伊須氣余理比賣在其中。爾大久米命見其伊須氣余理比賣而。以歌白於天皇曰。夜麻登能。多加佐士怒袁。那那由久。袁登賣杼母。多禮袁志摩加牟。爾伊須氣余理比賣者。立其媛女等之前。乃天皇見其媛女等而。御心知伊須氣余理比賣立於最前。以歌答曰。加都智都母。伊夜佐岐陀互流。延袁斯麻加牟。爾大久米命。以天皇之命。詔其伊須氣余理比賣之時。見其大久米命黠利目而。思奇歌曰。阿米都都。知杼理麻斯登登。那杼佐禰流斗米。爾大久米命答歌曰。袁登賣爾。多陀爾阿波牟登。和加佐禰流斗米。故其孃子。白之仕奉也。於是其伊須氣余理比賣命之家。在狹井河之上。天皇幸行其伊須氣余理比賣之許。一宿御寢坐也。其河謂佐草河。由者。於其河邊。山由理草多在。故取其山。後其伊須氣余理比賣。參入由理草之名。號佐草河也。山由理草之本名云佐草也。後其伊須氣余理比賣。參入宮内之時。天皇御歌曰。阿斯波良能。志禰去岐袁夜邇。須賀多多美。伊夜佐夜斯岐互。和賀布多理泥斯。然而阿禮坐之御子名。日子八井命。次神八井耳命。次神沼河耳命。柱

○七媛女 七人の少女。

○高佐士野 大和の何處か不詳。

○かつくも 先づまづ。
○裂ける利目 裂けたかと思ふ程目の大きくて鋭いこと。
○胡燕子云々 皆鳥名で目の大きいのを譬へたのである。
○直に逢はむと 天皇の爲にまのあたり見つけようために。
○狹井河 大和國城上郡。

こゝに七媛女、高佐士野に遊べるに、伊須氣余理比賣其の中に在りき。大久米の命其の伊須氣余理比賣を見て、歌もて天皇にまをしけらく、
倭の 高佐士野を 七行く 媛女ども 誰をしまかむ
こゝに伊須氣余理比賣は、其の媛女どもの前に立てりき。天皇其の媛女どもを見そなはして、御心に伊須氣余理比賣の最前に立てることを知りたまひて、御歌もて答へたまはく、
かつくも 最前立てる 愛をしまかむ
こゝに大久米の命、天皇の命を、其の伊須氣余理比賣に詔れる時に、其の大久米の命の裂ける利目を見て、奇しと思ひて、
胡燕子鶴鴿 千鳥真鷲 など裂ける利目
と歌ひければ、大久米の命、
媛女に 直に逢はむと 吾が裂ける利目
と歌ひてぞ答へける。かれ其の孃子、「仕へまらむ。」とまをしき。
こゝに其の伊須氣余理比賣の命の家、狹井河の上にありき。天皇其の伊須氣余理比賣

がり幸して、一夜御寢ましき。(其の河を佐章河といふ由は、其の河の邊に、山百合草多かりき。かれ其の山百合草の名を取りて、佐章河と名づけき。山百合草の本の名、佐章といひき。)後に其の伊須氣余理比賣宮内みやうちにまるれる時に、天皇御歌よみしたまはく、

葦原の 濕ぬき小屋に 菅かや疊かさ 彌清やみ敷しきて 朕わがが二人ふたり寢ねし

しかして生まれませる御子の御名は、日子八井の命。次に神八井耳の命。次に神沼河耳の命。(三柱。)

○濕ぬき 汗あせい。

故天皇崩後。其庶兄當藝志美美命。娶其嫡后伊須氣余理比賣之時。將殺其三弟而謀之間。其御祖伊須氣余理比賣患苦而。以歌令知其御子等。歌曰。佐章賀波用。久毛多知和多理。宇泥備夜麻。許能波佐夜藝奴。加是布加牟登須。又歌曰。宇泥備夜麻。比流波久毛登章。由布佐禮婆。加是布加牟登會。許能波佐夜牙流。於是其御子聞知而。驚乃爲將殺當藝志美美之時。神沼河耳命。曰其兄神八井耳命。那泥此二字以レ音 汝命。持兵入而殺當藝志美美。故持兵入以將殺之時。手足和那那岐互此五字以レ音 不不得殺。故爾其弟神沼河耳命。乞取其兄所持之兵。入殺當藝志美美。故亦稱其御名。謂建

○庶兄 異母兄。
○淫たくる 搦なむこ

沼河耳命。

かれ天皇崩りまして後に、其の庶兄當藝志美々の命、其の嫡后伊須氣余理比賣に淫くる時に、其の三柱の弟たちを殺せむとして、謀りこつばどに、其の御祖伊須氣余理比賣患へまして、歌よみして其の御子たちに知らしめたまへりし、其の御歌。

狭井河よ 雲くも起たち互たがり 畝うね火山か 木の葉は喧や擾やぎぬ 風吹かむとす

また、

畝火山 晝は雲と居 夕されば 風吹かむとぞ 木の葉喧擾ける

こゝに其の御子たち聞き知りまして、驚きて乃ち當藝志美々を殺せむとしたまふ時に、神沼河耳の命、その兄神八井耳の命にまをし給はく、「なね汝が命、兵を取りて入りて當藝志美々を殺せたまへ。」とまをしたまひき。かれ兵を取りて入りて殺せむとしたまふ時に、手足わなきて得殺せたまはざりき。かれこゝに其の弟神沼河耳の命其の兄の持たせる兵を乞ひ取りて、入りて當藝志美々を殺せたまひき。

かれまた其の御名をたへて、建沼河耳の命ともまをしき。

○晝は雲と居 晝の間こそ雲があるだけであるけれども。
○風吹かむとぞ 其の雲が風にならうとして。
○兵 武器。

○建 すべて武勇勝れたるを云ふ美稱。○上とあるべから上とは天皇の位、天下萬民の上といふ意。○忌人 神事に仕へ奉る人。

爾神八井耳命。讓弟建沼河耳命曰。吾者不能殺レ仇。汝命既得レ殺レ仇。故吾雖レ兄。不レ宜レ爲レ上。是以汝命爲レ上。治天下。僕者扶ニ汝命。爲ニ忌人ニ而仕奉也。こゝに神八井耳の命、弟建沼河耳の命に譲りてまをたまはく、「吾は仇を得殺せず、汝が命既に得殺せ給ひぬ。かれ吾は兄なれども、上とあるべからず。こゝを以て汝が命上とまして、天の下治しめせ。僕は汝が命を扶けて、忌人となりて仕へまつらむ。」とまをたまひき。

故其日子八井命者。茨田連。手鳥連之祖。神八井耳命者。意富臣。小子部連。坂合部連。火君。大分君。阿都那直。伊余國造。科野國造。道奥石城國造。常道仲國造。蘇君。筑紫三家連。雀部臣。雀部造。小長谷造。長狭國造。伊勢船木直。尾張丹羽臣。鳥田臣等之祖也。神沼河耳命者。治天下也。凡此神倭伊波禮毘古天皇。御年壹佰參拾漆歲。御陵在三畝火山之北方白橋尾上二也。

かれ其の日子八井の命は、(茨田の連、手鳥の連の祖。)神八井耳の命は、(意富の臣、小子部の連、坂合部の連、火の君、大分の君、阿蘇の君、筑紫の三家の連、雀部の臣、雀部の造、小長谷の造、都那の直、伊余の國の造、科野の國の造、道奥の石城の國の造、常道の仲の國の造、長狭の國の造、伊勢の船

○神沼河耳の命 綏靖天皇。

木の直、尾張の丹羽の臣、鳥田の臣等が祖なり。

神沼河耳の命は天の下治しめしき。

すべて此の神倭伊波禮毘古の天皇、御年壹佰參拾漆歲、御陵は畝火山の北の方白橋の尾の上にあり。

綏靖

神沼河耳命。坐葛城高岡宮。治天下也。此天皇。娶師木縣主之祖。河俣毘賣。生御子。師木津日子玉手見命。柱。天皇。御年肆拾伍歲。御陵在三衢田岡二也。

○高岡 大和國葛城郡。

神沼河耳の命。葛城の高岡の宮にましまして、天の下治しめしき。此の天皇、師木の縣主の祖、河俣毘賣を娶して、生みませる御子、師木津日子玉手見の命(一柱)。

○衢田の岡 大和國高市郡。

この天皇御年四拾五歲。御陵は衢田の岡にあり。

安寧

師木津日子玉手見命。坐三片鹽浮穴宮。治天下二也。此天皇。娶河俣毘賣之兄。縣主殿延之女。阿久斗比賣。生御子。常根津日子伊呂泥命。自伊下三次大倭日子組友命。次師木津日子命。此天皇之御子等。并三柱之中。大倭日子組友命者。治天下。次師木津日子命之子。二王坐。一子孫者。伊賀須知之稻置。那婆理之稻置。三野之稻置之祖。一子。和知都美命者。坐淡道之御井宮。故此王有三一女。兄名蠅伊呂泥。亦名意富夜麻登久邇阿禮比賣命。弟名蠅伊呂杵也。天皇。御年肆拾玖歲。御陵在三畝火山之美富登一也。

師木津日子玉手見命。片鹽の浮穴の宮に坐して、天の下しらしめしき。此の天皇、河俣毘賣の兄、縣主殿延の女、阿久斗比賣を娶して、生みませる御子、常根津日子伊呂泥の命。次に大倭日子組友の命。次に師木津日子の命。

此の天皇の御子等、并せて三柱の中、大倭日子組友の命は天の下治しめしき。次に師木津日子の命の御子二柱ませる、一柱の子孫は、伊賀の須知の稻置、那婆理之稻置、三野之稻置。一柱の御子、知々都美の命は、淡道之御井の宮にましき。

○師木津日子玉手見の命 安寧天皇。
○浮穴 大和國とも河内國とも言つてをるが、判明しない。
○縣主殿延 師木の縣主。
○美富登 山を人體に譬へたもので、大和國高市郡白樺村大字吉田を指す。
○大倭日子組友の命 懿德天皇。

かれ此の王、御女二柱ましき。兄の名は蠅伊呂泥、またの名は意富夜麻登久邇阿禮比賣の命、弟の名は蠅伊呂杵。

この天皇御年四十九歳、御陵は畝火山之美富登にあり。

懿德

大倭日子組友命。坐三輕之境岡宮。治天下二也。此天皇。娶三師木縣主之祖。賦登麻和訶比賣命。亦名飯日比賣命。生御子。御真津日子訶惠志泥命。自訶下四次多藝志比古命。二故御真津日子訶惠志泥命者。治天下二也。次當藝志比古命者。血沼之別。多遲麻之竹柱。葉井之稻置之祖。天皇。御年肆拾伍歲。御陵在三畝火山之眞名子谷上一也。

大倭日子組友の命。輕之境岡の宮にましまして、天の下治しめしき。此の天皇、師木の縣主の祖、賦登麻和訶比賣の命、またの名は飯日比賣の命を娶して、生みませる御子、御真津日子訶惠志泥の命、次に多藝志比古の命。(二柱。)

かれ御真津日子訶惠志泥の命は、天の下治しめしき。次に當藝志比古の命は、(血沼の別、

○輕之境岡 大和國高市郡。
○御真津日子訶惠志泥の命 孝昭天皇。

多遲麻之竹の別、葦井之稻置の祖なり。

この天皇御年四拾五歳、御陵は畝火山の眞名子谷の上にあり。

孝昭

御眞津日子訶惠志泥命。坐葛城掖上宮。治天下也。此天皇。娶尾張連之祖。奥津余曾之妹。名余曾多本毘賣命。生御子。天押帶日子命。次大倭帶日子國押人命。故弟帶

日子國忍人命者。治天下也。兄天押帶日子命者。春日臣。大宅臣。栗田臣。小野臣。柿本

勢飯高君。壹師君。近淡海國造之祖也。天皇。御年玖拾參歳。御陵在掖上博多山上也。

御眞津日子訶惠志泥の命。葛城の掖の上の宮にましまして、天の下治しめしき。此の天

皇。尾張の連の祖、奥津余曾の妹、名は余曾多本毘賣の命を娶して、生みませる御子、天

押帶日子の命。次に大倭帶日子國押人の命(二柱)。

かれ弟帶日子國押人の命は、天の下治しめしき。兄天押帶日子の命は、春日の臣、大宅

の臣、栗田の臣、小野の臣、柿の本の臣、壹比章の臣、大坂の臣、阿那の臣、多紀の臣、

○掖の上 大和國南葛城郡。

○大倭帶日子國押人の命 孝安天皇。

羽栗の臣、知多の臣、牟邪の臣、都怒山の臣、伊勢の飯高の君、壹師の君、近淡海の國の造の祖なり。

この天皇御年九拾參歳、御陵は掖の上の博多の山の上にあり。

孝安

大倭帶日子國押人命。坐葛城室之秋津島宮。治天下也。此天皇。娶姪忍鹿比賣命。生御子。大吉備諸進命。次大倭根子日子賦斗邇命。故大倭根子日子賦斗邇命者。治天下也。天皇。御年壹佰貳拾參歳。御陵在玉手岡上也。

大倭帶日子國押人の命。葛城の室之秋津島の宮にましまして、天の下治しめしき。此

の天皇御姪忍鹿比賣の命に娶ひまして、生みませる御子、大吉備の諸進の命。次に大倭

根子日子賦斗邇の命(二柱)。

かれ大倭根子日子賦斗邇の命は、天の下治しめしき。

この天皇、御年壹百貳拾參歳、御陵は玉手の岡の上にあり。

○秋津島 大和國南葛城郡秋津村。

○忍鹿比賣 紀には押波とある。

○玉手の岡の上 大和國南葛城郡掖上行

孝靈

大倭根子日子賦斗邇命。坐黑田廬戶宮。治天下也。此天皇。娶三十市縣主之祖。大目之女。名細比賣命。生御子。大倭根子日子國玖琉命。一柱。玖琉。二字以音。又娶春日之千千速真若比賣。生御子。千千速比賣命。柱。一又娶意富夜麻登玖邇阿禮比賣命。生御子。夜麻登登母母曾毘賣命。次日子刺肩別命。次比古伊佐勢理毘古命。亦名大吉備津日子命。次倭飛羽矢若屋比賣。柱。四又娶其阿禮比賣命之弟。蠅伊呂杼。生御子。日子寤間命。次若日子建吉備津日子命。柱。二此天皇之御子等。并八柱。男王五。女王三。大倭根子日子賦斗邇命。黑田の廬戶の宮に坐して、天の下治しめしき。此の天皇、十市の縣主の祖、大目の女、名は細比賣の命を娶して、生みませる御子、大倭根子日子國玖琉の命。一柱。又春日之千千速真若比賣を娶して、生みませる御子、千千速比賣の命。一柱。また意富夜麻登玖邇阿禮比賣の命に娶ひまして、生みませる御子、夜麻登登母母曾毘賣の命。次に日子刺肩別の命。次に比古伊佐勢理毘古の命。またの御名は大吉備津日子

○大倭根子日子賦斗邇の命。孝靈天皇。
○黒田の廬戶の宮。大和國磯城郡郡村。
○十市の縣主。大和の十市であつて、書紀に細媛を立てて皇

の命。次に倭飛羽矢若屋比賣。四柱。また其の阿禮比賣の命の弟。蠅伊呂杼に娶ひまして生みませる御子、日子寤間の命、次に若日子建吉備津日子の命。二柱。此の天皇の御子たち、并せて八柱ませり。男王五柱、女王三柱。

故大倭根子日子國玖琉命者。治天下也。大吉備津日子命。與若建吉備津日子命。二柱相副而。於針開冰河之前。居忌筥而。針開爲道口。以言向和吉備國也。故此大吉備津日子命者。吉備上道。臣之祖也。次若日子建吉備津日子命者。吉備下道。臣之祖也。次日子寤間命者。高志之利波。豐國之國前。臣之祖也。五百原君。角鹿海直之祖也。天皇。御年壹佰陸歲。御陵在片岡馬坂上也。

○針開。播磨。
○忌筥。上古の土器陶器を云ひ、こゝでは祭器を指す。

かれ大倭根子日子國玖琉の命は、天の下治しめしき。大吉備津日子の命と若建吉備津日子の命とは、二柱相副はして、針開の氷の河の前に、忌筥を居ゑて、針開を道の口として吉備の國を言向け和したまひき。
かれ此の大吉備津日子の命は、吉備の上つ道の臣の祖なり。次に若日子建吉備津日子の命は、吉備の下つ道の臣、筥の臣の祖なり。次に日子寤間の命は、針開の牛鹿の臣の祖なり。

り。次に日子刺肩別の命は、(高志之利波の臣、豊國の國前の臣、五百原の君、角鹿の海の直の祖なり。)

○片岡の馬坂の上
大和國北葛城郡。

この天皇、御年壹百六歳、御陵は片岡の馬坂の上へにあり。

孝元

大倭根日子國玖琉命。坐三輕之塚原宮。治天下也。此天皇。娶三穗積臣等之祖。内色許男命音。下效。此妹。内色許賣命。生御子。大毘古命。次少名日子建猪心命。次若倭根日子大毘古命。柱。三。又娶三内色許男命之女。伊賀迦色許賣命。生御子。比古布都押之信命。自比至。又娶河内青玉之女。名波邇夜須毘賣。生御子。建波邇夜須毘古命。柱。一。此天皇之御子等。并五柱。故若倭根日子大毘古命者。治天下也。其兄大毘古命之子。建沼河別命者。阿倍臣。等之祖。次比古伊那許志別命。自比至。志六字。以。此者膳臣之祖也。比古布都押之信命。娶三尾張連等之祖。意富那毘之妹。葛城之高千那毘賣。那毘。二。生子。味師内宿禰。此者山代内。又娶三木國造之祖。宇豆比古之妹。山下影日賣。生子。建内宿禰。

○大倭根日子子國玖琉の命 孝元天皇。
○輕之塚原の宮 大和國高市郡白檮村。

大倭根日子子國玖琉の命。輕之塚原の宮に坐して、天の下しろしめしき。此の天皇、穗積の臣等が祖、内色許男の命の妹、内色許賣の命を娶して、生みませる御子、大毘古の命。次に少名日子建猪心の命。次に若倭根日子大毘古の命。(三柱。また内色許男の命の女、伊賀迦色許賣の命を娶して、生みませる御子、比古布都押之信の命。(一柱。また河内の青玉が女、名は波邇夜須毘賣を娶して、生みませる御子、建波邇夜須毘古の命。(一柱。此の天皇の御子たち、并せて五柱ませり。

○建波邇夜須毘古の命 崇神の朝に謀反した人。
○建沼河別の命 崇神の朝に功勳のあつた人。

かれ若倭根日子大毘古の命は、天の下治しめしき。其の兄大毘古の命の御子、建沼河別の命は、(阿倍の臣等が祖。次に比古伊那許志別の命。(此は膳の臣の祖なり。)

○味師内の宿禰 應神の朝に建内の宿禰を讓して罪せられた人。
○建内の宿禰 成務天皇の朝に始めて大臣となつた人。

比古布都押之信の命、尾張の連等が祖、意富那毘が妹、葛城之高千那毘賣に娶ひて、生みませる御子、味師内の宿禰。(此は山代の内の臣の祖なり。また木の國の造の祖、宇豆比古が妹、山下影比賣に娶ひて、生みませる御子、建内の宿禰。

此建内宿禰之子。并九。男七。波多八代宿禰者。波多臣。林臣。波美臣。星川次許勢小柄宿禰者。許勢臣。雀部臣。次蘇賀石河宿禰者。蘇我臣。川邊臣。田中臣。高向臣。小次平葦都輕部臣之祖也。治田臣。櫻井臣。岸田臣等之祖也。

久宿禰者。平羣臣。佐和良臣。坂本臣之祖。次久米能摩伊刀比賣。次怒能伊呂比賣。馬御。微連等祖也。次葛城長江曾都昆古者。玉手臣。的臣。生江臣。阿藝那臣等之祖也。又若子宿禰。江野財臣之祖。此天皇。

御年伍拾漆歲。御陵在劍池之中岡上也。

此の建内の宿禰の子、并せて九人(男七人女二人)波多の八代の宿禰は、(波多の臣、林の臣、波美の臣、星川の臣、淡海の臣、長谷部の君の祖なり)次に許勢の小柄の宿禰は、(許勢の臣、雀部の臣、輕部の臣の祖なり)次に蘇賀の石河の宿禰は、(蘇賀の臣、川邊の臣、田中の臣、高向の臣、小治田の臣、櫻井の臣、岸田の臣等の祖なり)次に平羣の都久の宿禰は、(平羣の臣、佐和良の臣、馬御櫛の連等の祖なり)次に木の角の宿禰は、(木の都奴の臣、坂本の臣の祖)次に久米能摩伊刀比賣次に怒能伊呂比賣。次に葛城の長江の曾都昆古は、(玉手の臣、的の臣、生江の臣、阿藝那の臣等の祖なり)また若子の宿禰は、(江野財の臣の祖)。

○劍池 大和國高市郡。

此の天皇、御年五拾七歲、御陵は劍池の中岡の上により。

開化

○若倭根日子大昆毘命 開化天皇。
○伊邪河 大和國添上郡。
○且波 丹波。
○日子坐の王 此に始めて命を王と記したのである。

若倭根日子大昆毘命。坐春日之伊邪河宮。治天下也。此天皇。娶且波之大縣主。名由基理之女。竹野比賣。生御子。比古由牟須美命。一柱。此王。又娶三庶母伊賀迦色許賣命。生御子。御真木入日子印惠命。印惠二字。次御真津比賣命。柱。又娶三九邇臣之祖。日子國意都命之妹。意都都比賣命。意都都三字。生御子。日子坐王。柱。一又娶三葛城之垂見宿禰之女。鶴比賣。生御子。建豐波豆羅和氣王。一柱。自波。此天皇之御子等。并五柱。男王四。故御真木入日子印惠命者。治天下也。其兄比古由牟須美王之子。大筒木垂根王。次讚岐垂根王。二王。讚岐。此二王之女。五柱坐也。

若倭根日子大昆々の命。春日之伊邪河の宮に坐して、天の下治しめしき。此の天皇、且波之大縣主。名は由基理が女。竹野比賣を娶して生みませる御子、比古由牟須美の命、(一柱)また庶母伊賀迦色許賣の命に娶ひまして、生みませる御子、御真木入日子印惠の命。次に御真津比賣の命。(二柱)また丸邇の臣の祖、日子國意都都の命の妹、意都都比賣の命を娶して、生みませる御子、日子坐の王。(一柱)また葛城之垂見の宿禰の女、鶴比賣

○兄「子の上」で子等の中の第一の義。

を娶して、生みませる御子、建甕波豆羅和氣の王。(一柱)此の天皇の御子たち、并せて五柱。(男王四、女王一) 〇兄比古由牟須美の王の御子、大筒木垂根の王、次に讚岐垂根の王。(二柱)此の二柱の王の御女、五柱ましき。

○山代 山城。

次日子坐王。娶山代之存名津比賣。亦名刈幡戸辨。此一字生子。大俣王。次小俣王。次志夫美宿禰王。柱又娶春日建國勝戸賣之女。名沙本之大闇見戸賣。生子。沙本毘古王。次袁邪本王。次沙本毘賣命。亦名佐波遲比賣。此沙本毘賣命者。為伊久米天皇之后。次室毘古王。柱又娶近淡海之御上祝以伊都玖。此三字天之御影神之女。息長水依比賣。生子。丹波比古多多須美知能字斯王。此王名次水之穗真若王。次神大根王。亦名八瓜入日子王。次水穗五百依比賣。次御井津比賣。柱又娶其母弟袁邪都比賣命。生子。山代之大筒木真若王。次比古意須王。次伊理泥王。三柱。此二凡日子坐王之子。并十一王。次に日子坐の王、山代の存名津比賣、またの名は刈幡戸辨に娶ひて、生みませる御子、大俣の王。次に小俣の王。次に志夫美の宿禰の王。(三柱)また春日の建國勝戸賣が女、名

○沙本 大和國添上郡の佐保。
○伊久米の天皇 垂仁天皇。
○近つ淡海の御上の祝 近江國野洲三上の祝部、今日の神主に當る。

は沙本之大闇見戸賣に娶ひて、生みませる御子、沙本毘古の王。次に袁邪本の王。次に沙本毘賣の命、またの御名は佐波遲比賣。(此の沙本毘賣の命は、伊久米の天皇の后とませり。)次に室毘古の王。(四柱)又近つ淡海の御上の祝がもちいつく、天之御影の神の御女、息長の水依比賣に娶ひて、生みませる御子、丹波の比古多多須美知能字斯の王。次に水穗の真若の王。次に神大根の王、亦の名は、八瓜入日子の王。次に水穗の五百依比賣。次に御井津比賣。(五柱)また御母の弟、袁邪都比賣の命に娶ひて、生みませる御子、山代之大筒木の真若の王。次に比古意須の王。次に伊理泥の王。(三柱)すべて日子坐の王の御子、并せて十五。

故兄大俣王之子。曙立王。次菟上王。柱此曙立王者。伊勢之品遲部君。伊菟上王者。比賣之祖。次小俣王者。當麻勾君之祖。次志夫美宿禰王者。佐佐君之祖也。次沙本毘古王者。日下部連。甲斐國造之祖。次袁邪本王者。葛野之別。近淡海。次室毘古王者。若狭之耳。其美知能字志王。娶丹波之河上之摩須郎女。生子。比賣須比賣命。次真砥野比賣命。次弟比賣命。次朝廷別王。柱此朝廷別王者。三川之穗。此美知能字斯王之弟。水穗真若王者。近淡海之祖。次神大根王者。三野國之祖。

巢國造。長。次山代之大筒木真若王。娶同母弟伊理泥王之女。母泥能阿治佐波毘賣。生
 子。迦邇米雷王。迦邇米三。此王。娶丹波之遠津臣之女。名高材比賣。生子。息長宿禰
 王。此王娶葛城之高額比賣。生子。息長帶比賣命。次虛空津比賣命。次息長日子王。
 三柱。此王者。吉備品遲。又息長宿禰王。娶河俣稻依毘賣。生子。大多牟坂王。多牟二字以音。
 君。針間阿宗君之祖。又息長宿禰王。娶河俣稻依毘賣。生子。大多牟坂王。多牟二字以音。
 造之祖。上所謂建豐波豆羅和氣王者。道守臣。忍海部造。御名部造。稻羽忍海部。此者多遲摩國
 也。陸拾參歲。御陵在伊邪河之坂上一也。丹波之竹野別。依網之阿里古等之祖也。天皇。御年

○兄。この一度は日
 子坐の王の御子孫を
 擧げたのであるから
 日子坐の王の第一王
 子大俣の王を指して
 申し上げたのである

○三川之穂の別。三
 川は今の参河である

次。沙本毘古の王は、(目下部の連、甲斐の國の造の祖。)つぎに袁邪本の王は、(葛野之
 別、近つ淡海の蚊野之別の祖なり。)
 次に室毘古の王は、(若狭之耳の別の祖。)其の美知能宇志の王、丹波の河上の摩須の郎女
 に娶ひて生みませる御子、比須須比賣の命。次に眞砥野比賣の命。次に弟比賣の命。次に
 朝廷別の王。(四柱。)此の朝廷別の王は、(三川之穂の別の祖。)此の美知能宇志の王の弟、水

○三野の國之造。三
 野は室造である。

○息長帶比賣の命
 後の神功皇后の事。

○伊邪河の坂の上
 大和國奈良市油坂地
 方町造をいふ。

穂の眞若の王は、(近つ淡海之安の直の祖。)次に神大根の王は、(三野の國之造、木巢の國
 の造、長幡部の連の祖。)次に山代之大筒木の眞若の王、同母弟伊理泥の王の御女、母泥
 之阿治佐波毘賣に娶ひて、生みませる御子、迦邇米雷の王。此の王、丹波之遠津の臣の
 女、名は高材比賣に娶ひて生みませる御子、息長の宿禰の王。此の王、葛城之高額比賣に
 娶ひて生みませる御子、息長帶比賣の命。次に虛空津比賣の命。次に息長日子の王。(三
 柱。)此の王は吉備の品遲の君、針間の阿宗の君の祖。)また息長の宿禰の王、河俣の稻依毘
 賣に娶ひて生みませる御子、大多牟坂の王。(此は多遲摩之國の造の祖なり。)
 上に謂へる建豐波豆羅和氣の王は、(道守の臣、忍海部の造、御名部の造、稻羽の忍
 海部、丹波之竹野の別、依網之阿里古等か祖なり。)
 この天皇、御年六拾參歲、御陵は伊邪河の坂の上にある。

崇神

御眞木入日子印惠命。坐三師木水垣宮。治天下也。此天皇。娶三木國造。名荒河刀辨之

○御真木入日子印惠の命 崇神天皇。
 ○師木の水垣の宮 大和國橿原郡三輪一宇金屋。
 ○豐木入日子の命 書紀に豐城の命とあるのは此の方である。

女。刀辨^二遠津年魚目目微比賣。生御子。豐木入日子命。次豐鉏入日賣命。^柱又娶^二尾張連之祖。意富阿麻比賣。生御子。大入杵命。次八坂之入日子命。次沼名木之入日賣命。次十市之入日賣命。^柱又娶^二大毘古命之女。御真津比賣命。生御子。伊玖米入日子伊沙知命。^{伊玖米伊沙知六字以音}次伊邪能真若命。^{自伊至能以音}次國片比賣命。次千都久和^{此三字以音}比賣命。次伊智比賣命。次倭日子命。^柱此天皇之御子等。并十二柱。男王七。女五也。
 御真木入日子印惠の命。師木の水垣の宮に坐して、天の下しろしめしき。此の天皇、木の國の造、名は荒河戸辨が女、遠津の年魚目々微比賣を娶して、生みませる御子、豐木入日子の命。次に豐鉏入日賣の命。^{二柱}また尾張の連の祖、意富阿麻比賣を娶して、生みませる御子、大入杵の命。次に八坂之入日子の命。次に沼名木之入日賣の命。次に十市之入日賣の命。^{四柱}また大毘古の命の女、御真津比賣の命に娶ひまして、生みませる御子、伊玖米入日子伊沙知の命。次に伊邪之真若の命。次に國片比賣の命。次に千々都久和比賣の命。次に伊智比賣の命。次に倭日子の命。^{六柱}此の天皇の御子たち、并せて十一柱。^{男王六、女王六、ます。}

○上毛野下毛野 上野上野の二國。

○人垣 人を立て置きて生埋めにすること即ち殉死である。

故伊久米伊理毘古伊佐知命者。治^二天下也。次豐木入日子命者。^{上毛野國。下毛野君等之祖也。}妹豐鉏比賣命。^{拜祭伊勢大神之宮也。}次大入杵命者。^{能登臣之祖也。}次倭日子命。^{此王之時。治而於陵立人垣。}かれ伊久米伊理毘古伊佐知の命は、天の下治しめしき。次に豐木入日子の命は、^{上毛野の君、下毛野の君等が祖なり。}妹豐鉏比賣の命は、^{伊勢の大神の宮を拜き祭りたまひき。}次に大入杵の命は、^{能登の臣の祖なり。}次に倭日子の命。^{此の王の時に始めて陵に人垣を立てたりき。}

此天皇之御世。役病多起。人民死。爲^レ盡。爾天皇愁歎而。坐^二神牀^一之夜。大物主大神。顯^レ於^二御夢^一曰。是者我之御心。故以^二意富多多泥古^一而。令^レ祭^二我御前^一者。神氣不起。國安平。是以驛使班^レ于^二四方^一。求^レ謂^二意富多多泥古^一人之時。於^二河内之美努村^一。見^二得其人^一。貢進。爾天皇。問^二賜之汝者誰子^一也。答^レ曰僕者大物主大神。娶^二陶津耳命之女^一。活玉依毘賣。生子。名櫛御方命之子。飯肩巢見命之子。建甕槌命之子。僕意富多多泥古^上白。於是天皇大歡以。詔^二之天下平民榮^一。即以^二意富多多泥古命^一爲^二神主^一而。於^二御諸山^一。拜^二祭意富美和之大神前^一。又仰^二伊迦賀色許男命^一。作^二天之八十毘羅訶^一。此三字定^レ以^レ音。

○疫癘 流行病。
 ○神牀 神の御命を祈るための齋場。
 ○神の氣 神の祟り
 ○驛使 早馬使の約

奉天神地祇之社。又於三宇陀墨坂神。祭赤色楯矛。又於大坂神。祭黑色楯矛。又於坂之御尾神。及三河瀬神。悉無遺忘。以奉幣帛也。因此而役氣悉息。國家安平也。此謂意富多多泥古一人。所以知神子者。上所云活玉依毘賣。其容姿端正。於是神壯夫。其形姿威儀。於時無比。夜半之時。倏忽到來。故相感。共婚供住之間。未經幾時。其美人妊身。爾父母怪其妊身之事。問其女曰。汝者自妊。無夫。何由妊身乎。答曰。有麗美壯夫。不知其姓名。每夕到來。供住之間。自然懷妊。是以其父母欲知其人。誨其女曰。以赤土散牀前。以閉蘇。此二字。紡麻貫針。刺其衣欄。故如教而。且時見者。所著針麻者。自三戸之鈎穴控通而出。唯遺麻者。三勾耳。爾即知自鈎穴出之狀上而。從絲尋行者。至美和山而。留神社。故知其神子。故因其麻之三勾遺而。名其地謂美和一也。此意富多多泥古命者。神君。鴨君之祖。

此の天皇の御世に、疫病多に起り、人民死せて盡きなむとす。こゝに天皇愁へたまひて、神牀に坐せる夜、大物主の大神、御夢に顯はれて宣り給はく、「こは我が御心ぞ。かれ意富多多泥古をもて、我が御前を祭らしめ給はば、神の氣起らず、國平らぎなむ。」とのり給ひき。こゝを以て驛使を四方に班ちて、意富多多泥古といふ人を求むる時に、河

○美努の村 河内國中河内郡三野郷村大字上之島に御野蘇主神社といふがある

○平笠 祭器。
 ○天つ神地つ紙 天にまします神又は天より降られた神々此の圖になりませる神々。この時神紙の別が定められた。

○神壯夫 凡人ならぬ壯夫。
 ○麗かもあらねば 何れも麗たぬに。

内の美努の村に、其の人を見得て貢りき。こゝに天皇、「汝は誰が子ぞ。」と問ひたまひき。「僕は物主の大神、陶津耳の命の女、活玉依毘賣に娶ひて生みませる御子、名は楯御方の命の子、飯肩巢見の命の子、建甕槌の命の子、僕意富多多泥古。」とまをしき。

こゝに天皇大く歡ひたまひて、「天の下平らぎ、人民榮えなむ。」と詔りたまひて、即ちこの意富多多泥古の命を神主として、御諸山に、意富美和之大神の御前を齋き祭りたまひき。また伊迦賀色許男の命に仰せて、天の八十平笠を作り、天つ神地つ紙の社を定めまつりたまひき。また宇陀の墨坂の神に、赤色の楯矛を祭り、また大坂の神に、黒色の楯矛を祭り、また坂之御尾の神、河の瀬の神まで、悉に遣つる事なく、幣帛たてまつりたまひき。これによりて疫の氣悉に息みて、天の下平らぎき。

此の意富多多泥古と謂ふ人を、神の御子と知れる故は、上にいへる活玉依毘賣、それ顔好かりき。こゝに神壯夫ありて、其の顔姿世に比無きが、夜半に忽ち來つ。かれ相感でて住めるほどに、麗かもあらねば、其の美人妊みぬ。こゝに父母其の妊める事を怪しみて、其の女に、「汝は自ら妊めり。夫無きに如何にしてかも妊める。」と問へば、答へけらく、「麗はしき壯夫の、其の名も知らぬが、夕毎に來て住める程に、自ら妊みぬ。」といふ。

○卷子紡麻 紡いた麻を圓く卷いた物。
○三勾 勾とは凡て長い物を圓く卷いたのを云ふ。
○美和山 三輪山。

こ、を以て其の父母、其の人を知らまくほりて、女に誨へつらくは、「赤土を牀の邊に散らし、卷子紡麻を針に貫きて、其の衣の欄に刺せ。」と誨ふ。かれ教へし如して、且に見れば針のつけたりし麻は、戸の鈎穴より控き通り出て、唯遺れる麻は、三勾のみなりき。かれここに鈎穴より出でし狀を知りて、絲のまに／＼尋ね行きしかば、美和山に至りて、神の社に留まりにき。かれ其の神の御子なりとは知りぬ。
かれ其の麻の三勾遺れるによりてなも、其地を美和とは謂ひける。(此の意富多々泥古の命は、神の君、鴨の君の祖なり。)

又此之御世。大毘古命者。遣高志道。其子建沼河別命者。遣東方十二道二而。令和二平其麻都漏波奴白麻下五人等。又日子坐王者。遣且波國。令殺政賀耳之御笠。此人名政賀一故大毘古命。罷往於高志國之時。服腰裳一少女。立山代之幣羅坂二而。歌曰。古波夜。美麻紀。伊理毘古波夜。美麻紀。伊理毘古波夜。意能賀袁。奴須美斯勢牟登。斯理都斗用。伊由岐多賀比。麻幣都斗用。伊由岐多賀比。宇迦迦波久。斯良爾登。美麻紀。伊理毘古波夜。於是大毘古命思怪。返馬。問其少女曰。汝所謂之言。何

○高志の道 越の國即ち越前國中越後。
○東の方十二道 伊勢、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、總(上總下總)常陸、陸奥。
○戸よ 戸より。
○麻はく知らにぞ 麻ふの知らずは何心もなくおはします

言。爾少女。答曰吾勿言。唯爲詠歌一耳。即不見其所如二而。忽失。
又此の御世に、大毘古の命をば、高志の道に遣はし、其の御子建沼河別の命をば、東の方十二道に遣はして、その伏はぬ人どもを言向け和さしめ、又日子坐の王をば、且波の國に遣はして、政賀耳之御笠を殺らしめ給ひき。(此は人の名なり。)かれ大毘古の命、高志の國へ罷り往ます時に、腰裳服せる少女、山代の幣羅坂に立てりて、歌ひけらく、
こはや 御眞木入日子はや 御眞木入日子はや 己が命を 竊み弑せむと 後つ戸よ
い行きたがひ 前つ戸よ 行き違ひ 窺はく 知らにと 御眞木入日子はや
こ、に大毘古の命怪しと思ひて、馬を返して、其の少女に、「汝が謂へる言、如何に言ふことぞ。」と問ひ給へば、少女、「吾物言はず、唯歌をこそ詠ひつれ。」と答へて、行方も見えす、忽ちに失せにき。

故大毘古命。更還參上。請於天皇二時。天皇答詔之。此者爲。在二山代國二我之庶兄。建波邇安王。起邪心二之表耳。波邇二字 伯父與軍。宜行。即副二丸邇臣之祖。日子國夫政命二而。遣時。即於二丸邇坂二居二忌覺二而。罷往。於是到二山代之和訶羅河二時。其建波

邇安王。興軍待遮。各中扶河而。對立相挑。故號其地。謂伊杼美。今謂伊豆美也。爾日子國夫玖命。乞云其庸人先忌矢可彈。爾其建波邇安王雖射。不三中。於是國夫玖命彈矢者。即射建波邇安王而。死。故其軍悉破而。逃散。爾追迫其逃軍。到久須婆之度。時。皆被追窘而。屎出。懸於禪。故號其地。謂屎禪。今者謂久須婆。又遮其逃軍。以斬者。如鵜浮於河。故號其河。謂鵜河也。亦斬波布理其軍士。故號其地。謂波布理會能。自波下五。如以此平訖。參上。覆奏。

○伯父 大毘古の命
○丸邊坂 大和國添上郡樫木町。
○和河羅河 木津川
○伊豆美 山城國相樂郡。

○忌矢 開戦の合圖に兩軍より放つ第一矢、特に神に祈つて放つのでかく云ふ。

かかれ大毘古の命、更に還りまる上りて、天皇にまをす時に、天皇詔りたまはく、「此は思ふに、山代の國なる汝が庶兄、建波邇安の王の、邪心を起せる表にこそあらめ。伯父軍を興して、行かせ。」と詔り給ひて、即ち丸邊の臣の祖、日子國夫玖の命を副へて遣はす時に、丸邊坂に忌覺を居るて、罷り往ましき。
こゝに山代の和河羅河に到れる時に、其の建波邇安の王、軍を興して、待ち遮り、各河を中におきて、對き立ちて相挑みき。かれ其地の名を、伊杼美と謂ひしを、今は伊豆美とぞ謂ふ。こゝに日子國夫玖の命、「其方の人先づ忌矢を放て。」と乞ふまゝに、建波邇安の王射つれども得中てざりき。こゝに國夫玖の命の放てる矢は、建波邇安の王に射中てて死

○久須婆之渡 河内國北河内郡樫葉村。
○窶みて 苦しませられし。

○波布理會能 山城國相樂郡樫葉村。

にき。
かれ其の軍悉に破れて、逃げ散らけぬ。こゝに其の逃ぐる軍を追ひ迫めて、久須婆之渡に到る時に、皆迫めらえ窶みて、屎出でて禪に懸りき。かれ其地の名を屎禪と謂ひしを今は久須婆と謂ふ。また其の逃ぐる軍を遮りて斬れば、鵜のごと河に浮きたりき。かれ其の河を、鵜河と謂ふ。また其の軍士を斬り屠りし故に、其地の名を、波布理會能とも謂ふ。かく平け訖へて、まる上りて覆奏しき。

故大毘古命者。隨先命而。罷行高志國。爾自東方所遣。建沼河別。與其父大毘古共。往遇于相津。故其地。謂相津也。是以各和平所遣之國政而。覆奏。爾天下太平。人民富榮。於是初令貢男弓端之調。女手末之調。故稱其御世。謂所レ知初國之御眞木天皇也。又是之御世。作依網池。亦作輕之酒折池也。天皇御歲壹佰陸拾捌歲。御陵在三山邊道勾之岡上也。

○遣けし 遣はせし
○相津 陸奥の國の會津。

かれ大毘古の命は、先の命のまに、高志の國に罷り行ましき。こゝに東の方より遣けし、建沼河別、其の父、大毘古と共に、相津に往き遇ひたまひき。かれ其地を相津と

謂ふ。こゝを以て各罷けつる國の政、言向けて、覆奏したまひき。かれ天の下平ら
 ぎ、人民富み榮えき。こゝに初めて男の弓端の調、女の手末の貢を調らしめ給ひき。
 かれ其の御世を稱へまつりて、初國知らしし、御眞木の天皇とまをす。
 またこの御世に、依綱の池を作り、また輕の酒折の池を作らしき。
 この天皇、御歳壹百六十八歳、御陵は山の邊の道の勾の岡の上にあり。

垂仁

伊久米伊理毘古伊佐知命。坐節木玉垣宮。治天下也。此天皇。娶沙本毘古命之妹。
 佐波遲比賣命。生御子。品牟都和氣命。柱。又娶且波比古多須美知能宇斯王之女。冰羽
 州比賣命。生御子。印色之入日子命。印色三字。次大帶日子淤斯呂和氣命。自淤至氣。次大中津
 日子命。次倭比賣命。次若木入日子命。柱。又娶其冰羽州比賣命之弟。沼羽田之入毘賣
 命。生御子。沼帶別命。次伊賀帶日子命。柱。又娶其沼羽田之入日賣命之弟。阿邪美能
 伊理毘賣命。此女王名。生御子。伊許婆夜和氣命。次阿邪美都比賣命。二柱。此二。又娶大筒
 王名以音。生御子。伊許婆夜和氣命。次阿邪美都比賣命。二柱。此二。又娶大筒

○弓端の調 男子は
 弓で捕つた獲物を税
 として朝廷に貢進さ
 せたので此の名があ
 る。
 ○手末の貢 手末は
 手先で、女子には手
 工で出来る布類を貢
 進させたのである。
 ○初國知らしし 崇
 神天皇は中興の君で
 あつてこの御代に天
 下悉く平らぎ四方皆
 皇化に浴したから斯
 く稱讚し奉つたので
 ある。
 ○依綱の池 攝津國
 ○山の邊の道の勾の
 岡の上 大和磯城郡

木垂根王之女。迦具夜比賣命。生御子。袁邪辨王。柱。又娶山代大國之淵之女。刈羽田
 刀辨。此二字。生御子。落別王。次五十日帶日子王。次伊登志別王。伊登志三
 之淵之女。弟刈羽田刀辨。生御子。石衝別王。次石衝毘賣命。亦名布多遲能伊理毘賣
 命。二。凡此天皇之御子等。十六王。男王十三。女王三。

○伊久米伊理毘古伊
 佐知の命 垂仁天皇
 ○玉垣の宮 大和國
 磯城郡磯向村。
 ○大帶日子淤斯呂和
 氣の命 景行天皇。

伊久米伊理毘古伊佐知の命。師木の玉垣の宮にましまして、天の下治しめしき。此の天
 皇、沙本毘古の命の妹、佐波遲比賣の命に娶ひまして、生みませる御子、品牟都和氣の命
 (一柱) また且波の比古多須美知能宇斯の王の御女、冰羽州比賣の命に娶ひまして、生
 みませる御子、印色之入日子の命。次に大帶日子淤斯呂和氣の命。次に大中津日子の命。
 次に倭比賣の命。次に若木入日子の命。(五柱) また其の冰羽州比賣の命の弟、沼羽田の入
 毘賣の命に娶ひまして、生みませる御子、沼帶別命。次に伊賀帶日子の命。(二柱) また
 其の沼羽田之入日賣の命の弟、阿邪美能伊理毘賣の命に娶ひまして、生みませる御子、伊
 許婆夜和氣の命。次に阿邪美都比賣の命。(二柱) また大筒木垂根の王の女、迦具夜比賣の
 命を娶して、生みませる御子、袁邪辨の王。(一柱) また山代の大國之淵が女、刈羽田刀辨
 を召して、生みませる御子、落別の王。次に五十日帶日子の王。次に伊登志別の王。また

其の大國之淵が女弟刈羽田刀辨を娶して、生みませる御子、石衛別の王。次に石衛毘賣の命、またの御名は布多遲能伊理毘賣の命(二柱)すべて此の天皇の御子等、十六王。(男王十三、女王三)

故大帶日子淤斯呂和氣命者。治天下也。御身長一丈二寸。御腰長四尺一寸也。御次印色入日子命者。作血沼池。又作狹山池。又作日下高津池。又坐鳥取之河上宮。令作三横刀壹仞口。是奉三納石上神宮。即坐其宮。定河上部也。

かれ大帶日子淤斯呂和氣の命は、天の下治しめしき。御身の長一丈一寸、御腰の長さ四尺一寸まじき。次に印色の入日子の命は、血沼の池を作り、また狹山の池を作り、また日下之高津の池を作りたまひき。また鳥取之河上の宮にましまして、横刀壹仞口を作らしめたまひき。こを石の上の神の宮に納めまつりき。即ち其の宮にましまして、河上部を定めたまひき。

次大中津日子命者。山邊之別。三枝之別。稻木之別。阿太之別。尾張國之三野別。吉備次倭比賣之石无別。許呂母之別。高巢鹿之別。飛鳥君。牟禮之別等祖也。

○血沼の池 和泉國泉南郡佐野村。
○狹山の池 河内國南河内郡狹山村。
○日下之高津の池 和泉國泉北郡高石村。
○鳥取之河上の宮 和泉國泉南郡。
○河上部 都は祖といふ事で葦の意。

○子代 御子様のない方の御名を後世に遺す爲に土地又は部落に其の御名を負はせて一部落を作ること、御名代とも云ふ

命者。拜祭伊勢大神宮也。次伊許婁夜和氣王者。沙本穴太部之別祖也。次阿邪美都比賣命者。嫁稻瀨王。小月之山君。三川次五十日帶日子王者。春日山君。高志池君。春日部君之祖。次伊登志和氣王者。因無爲子代。定次石衛別王者。羽咋君。三尾君之祖。次布多遲能伊理毘賣命者。爲倭建次。次大中津日子の命は、(山)の邊之別、三枝之別、稻木之別、阿太之別、尾張の國之三野の別、吉備之石无の別、許呂母之別、高巢鹿之別、飛鳥の君、牟禮之別等の祖なり。次に倭比賣の命は、(伊勢)の大神の宮を拜き祭り給ふ。次に伊許婁夜和氣の王は、(沙本の穴太部)之別の祖なり。次に阿邪美都比賣の命は、(稻瀨)古の王に嫁ひまじき。次に落別の王は、(小月)之山の君、(三川)之衣の君の祖なり。次に五十日帶日子の王は、(春日)の山の君、(高志)の池の君、(春日)部の君の祖。次に伊登志和氣の王は、(御子)まさざるに因りて、子代として伊登志部を定む。次に石衛別の王は、(羽咋)の君、(三尾)の君の祖。次に布多遲能伊理毘賣の命は、(倭建)の命の后となりたまひき。

此天皇。以沙本毘賣爲后之時。沙本毘賣命之兄。沙本毘古王。問其伊呂妹曰。孰愛夫與兄歟。答曰愛兄。爾沙本毘古王謀曰。汝寔思愛我者。將吾與汝治天下。而。

即作八鹽折之紐小刀。授其妹曰。以此小刀。刺殺天皇之寢。故天皇不知其之謀。而枕其后之御膝。爲御寢坐也。爾其後。以紐小刀。爲刺其天皇之御頸。三度舉而。不忍哀情。不能刺頸而。泣淚。落溢於御面。乃天皇驚起。問其後曰。吾見異夢。從沙本方。暴雨零來。急洽吾面。又錦色小蛇。纏繞我頸。如此之夢。是有何表也。爾其後。以爲不應爭。即白天皇言。妾兄沙本昆古王。問妾曰。孰愛夫與兄。是不勝面問故。妾答曰。愛兄歟。爾詭妾曰。吾與汝共治天下。故當殺天皇云而。作八鹽折之紐小刀。授妾。是以欲刺御頸。雖三度舉。哀情忽起。不得刺頸而。泣淚落。洽於御面。必有是表焉。爾天皇。詔之。吾殆見欺乎。乃興軍。擊沙本昆古王之時。其王作稻城。以待戰。此時沙本昆賣命。不得忍其兄。自後門逃出而。納其之稻城。此時其後妊身。於是天皇。不忍其後。懷妊及愛重。至三年。故迴其軍。不急攻迫。如此逗留之間。其所妊之御子既產。故出其御子。置稻城外。令白天皇。若此御子矣。天皇之御子所思者。可治賜。於是天皇。詔雖怨其兄。猶不得忍愛其後之故。即有得后之心。是以選乘軍士之中。力士輕捷而。宣者。取其御子之時。乃掠取其母王。或髮或手。當隨取獲而。掬以控出。爾其後豫知其情。悉

剃其髮。以髮覆其頭。亦腐玉緒。三重纏手。且以酒腐御衣。如全衣服。如此設備而。抱其御子。刺出城外。爾其力士等。取其御子。即握其御祖。爾握其御髮者。御髮自落。握其御手者。玉緒且絕。握其御衣者。御衣便破。是以取其御子。不得其御祖。故其軍士等。還來。奏言。御髮自落。御衣易破。亦下所纏御手之玉緒。便絕故。不獲御祖。取得御子。爾天皇悔恨而。惡作玉人等。皆奪其地。故諺曰。不得地玉作也。

此の天皇、沙本昆賣を后としたまへる時に、沙本昆賣の兄、沙本昆古の王、其の同母妹に、「夫と兄とは孰れか愛しき。」と問へば、「兄を愛しき。」と答へたまひき。こゝに沙本昆古の王、謀りけらく、「汝寢に我を愛しく思ほさば、吾と汝と天の下を治りてむとす。」といひて、即ち八鹽折の紐小刀を作りて、其の妹に授けて、「此の小刀もて、天皇の寢ませらむを刺し殺しまつれ。」といふ。かれ天皇、其の謀を知ろしめさずて、其の後の御膝を枕きて、御寢ましき。こゝに其の後、紐小刀もて、其の天皇之御頸を刺しまつらむとして、三度まで舉りたまひしかども、忍へかてに哀しく思ほして、得刺しまつらずて、泣き給ふ御涙、御面に落ち溢れき。かれ天皇驚きまして、其の後に問ひたまはく、「吾はあやしき

○八鹽折の紐小刀
鎌り磨いた紐小刀。
○枕きて 枕にして

○沙本 大和國添上郡佐保村、沙本毘古王の住地。

○え面勝たず 情なく拒絶もしかねて。
○誂へけらく 頼み込むの意。

○殆どに云々 すんでの事に備し討ちにされる處であつたよ
○稻城 紀に稻稻作城とあるのがそれである。

○重みしたまふ 大切にし給ふ。
○廻らはしめ 軍を進めない。

夢を見たり。沙本の方より、暴雨の零り来て、急に吾が御面を冷らしつ。また錦色なる小蛇、我が御頸にも纏へりし。かくの夢は、何の表にかあらまし。」と問ひ給ひき。こゝに其の後、争はえじおもほして、申し給はく、「妾が兄、沙本毘古の王、妾に「夫と兄とは孰れか愛しき。」と問ひたりき。かく問ふには、え面勝たずてなも、「兄ぞ愛しき。」と答へつれば、妾に誂へけらく、「吾と汝と天の下を治らさむ。かれ天皇を殺せ奉れ。」といひて、八鹽折の紐小刀を作りて、汝に授けつ。是を以て御頸を刺し奉らむとして、三度まで舉りしかども、忽ちに哀しくなりて、得刺し奉らずて、泣きつる涙の落ちて、御面を冷らしつる。必ずこの表にこそあらめ。」とまをし給ひき。こゝに天皇、「吾は殆どに欺かえつるかも。」と詔り給ひて、乃ち軍を興して、沙本毘古の王を撃りにつかはす時に、其の王稻城を作りて待ち戦ふ。此の時沙本毘古の命、其の兄を思ほしかねて、後つ門より逃げ出でて、その稻城に納りましき。このをりしも其の後妊ましたりき。こゝに天皇、その後の、愛しみ重みしたまふことも、三年になりぬるに、妊ましてさへあることを、いと哀しと思ほしき。かれ其の軍を廻らはしめつ、急げくも攻めたまはざりき。かく逗留る間に、其の妊ませりし御子産れましぬ。かれ其の御子を出して、稻城の外に置きまつりて、天皇に

○治めたまへ 御養育下さるべし。

○玉の緒 手の飾りの玉を貫いた緒。
○刺し出で 差し出す。

まをさしめたまはく、「若し此の御子をば、天皇の御子と思しめさば、治め給へ。」とまをさしめ給ひき。こゝに天皇、其の兄をこそ怨ひ給へれ。猶后をばいと愛しとおもほせりければ、それ得たまはむの御心ましき。こゝを以て軍士の中に、力士の捷きを選り聚へて、宣りたまひつらくは、「かの御子を取らむ時、其の母王をも掠り取りてよ。御髪にまれ、御手にまれ、取り獲むまに、掬みて控き出でまつれ。」とのりたまひき。こゝに其の後、豫め其の御心を知りたまひて、悉に其の御髪を剃りて、其の御髪もて御頭を覆ひ、また玉の緒を腐して、御手に三重纏かし、また酒もて御衣を腐して、全き衣のごと服せり。かく設け備へて、其の御子を抱きて、城の外に刺し出でたまひき。かれ其の力士ども、其の御子を取りまつりて、即ち其の御祖を握りまつらむと、其の御髪を握れば、御髪自ら落ち、其の御手を握れば、玉の緒また絶え、其の御衣を握れば、御衣便ち破れつ。こゝを以て其の御子を取り獲まつりて、其の御祖をば得とりまつらざりき。かれ其の軍士ども、還りまる來て、奏しつらく、「御髪自ら落ち、御衣また破れ、御手に纏かせる玉の緒も絶えにしかば、御祖をば獲まつらず、御子を取り得まつりつ。」とまをす。こゝに天皇、悔い恨みたまひて、玉作りし人どもを惡まして、其の地を皆奪りたまひ

○地得ぬ玉作 傾地を得ぬ玉作の意で思はぬ災難に遭つた譬へ。

○養し 養育の意。
○御母 乳母。
○大湯坐若湯坐 若は小で共に幼児の湯浴みを擊る婦人。
○美豆の小佩 下紐で古は夫婦は互に其の下紐を結び交して他人には解かしめなかつた。

き。かれ諺に、地得ぬ玉作とぞいふなる。

亦天皇。命詔其後。言凡子名。必母名。何稱是子之御名。爾答曰。今當下火燒稻城之時而。火中所生故。其御名。宜稱本牟智和氣御子。又命詔何爲日足奉。答曰。白取御母。定大湯坐若湯坐。宜日足奉。故隨其後白。以日足奉也。又問其後曰。汝所堅之美豆能小佩者誰解。美豆能三字。答曰。且波比古多須美智能宇斯王之女。名兄比賣弟比賣。茲二女王。淨公民故。宜使也。然遂殺其沙本比古王。其伊呂妹亦從也。

また天皇、其の後に詔らしめたまはく、「すべて子の名は、必ず母なもつくるを、その御子の御名をば何とかけむ。」と詔らしめたまひき。かれ御答へまをしたまはく、「今稻城を焼くをりしも、火中に生まれませれば、其の御名は、本牟智和氣の御子とぞつけまつるべき。」とまをさしめたまひき。また、「如何にして養しまつらむ。」と詔らしめたまへるに、「御母を取り、大湯坐若湯坐を定めて、養しまつるべし。」とまをしたまひき。かれ其の後のまをし給ひのまにく、養しまつりき。また其の後に、「汝の堅めし美豆の小佩は、誰かも解かむ。」と問はしめ給へば、「且波の比古多々須美智能宇斯の王の御女、名は兄比賣弟比賣、

この二柱の女王ぞ、淨き公民にませば、使ひたまふべし。」とまをさしめたまひき。然ありて遂に其の沙本比古の王を殺りたまへるに、其の同母妹も從ひたまひき。

故率遊其御子之狀者。在於尾張之相津。一俣樞作二俣小舟而。持上來以。浮倭之市師池輕池。率遊其御子。然是御子。八拳鬚至于心前。眞事登波受。此三字故今聞高往鶴之音。始爲阿藝登比。自阿下四字以音。爾遣山邊之大鶴。此者令取其鳥。故是人追尋其鶴。自木國到針間國。亦追越稻羽國。即到且波國多遲麻國。追廻東方。到近淡海國。乃越三野國。自尾張國傳。以追科野國。遂追到高志國。而於和那美之水門張網。取其鳥而。持上獻。故號其水門。謂和那美之水門也。亦見其鳥者。於思物言而。如思爾勿言事。

かれ其の御子を率て遊べる狀は、尾張の相津なる二俣樞を二俣小舟に作りて、持ち上り來て、倭の市師の池、輕の池に浮べて、其の御子を率て遊びき。然るにこの御子、八拳鬚心前に至るまで眞事とはす。かれ、に高往く鶴が音を聞かして、始めて吾君問ひし給ひき。かれ山の邊之大鶴を遣はして、其の鳥を取らしめき。故この人其の鶴を追ひ尋ねて、

○市師の池 磐余池ともいひ大和國磯城郡安倍村にある。
○八拳鬚心前に至る 御成人なさるさま
○眞事とはす「ま」は接頭語、事は言の借字、物言はず。
○吾君問ひ 幼兒の初言。

○和那美之水門 不明。

木の國より針開の國に到り、又追ひて稻羽の國に越え、即ち且波の國多遲麻の國に到り、東の方に追ひ廻りて、近つ淡海の國に到り、乃ち三野の國に越え、尾張の國より傳ひて科野の國に追ひ、遂に高志の國に追ひ到りて、和那美之水門に綱を張り、其の鳥を取りて持ち上りて獻りき。かれ其の水門を和那美之水門とは謂ふなり。また其の鳥を見たまへば、物言はむと思ほして、思ほすがごと言ひたまふ事なかりき。

於是天皇患賜而。御寢之時。覺于御夢。曰。修理我宮。如天皇之御舍者。御子必眞事登波牟。自登下三字以音 如此覺時。布斗摩邇邇占相而。求何神之心。爾崇。出雲大神之御心。故其御子。令拜其大神宮。將遣之時。令副誰人者吉。爾曙立王食レト。故科曙立王。令三字氣比白。字氣比三字以音 因拜此大神。誠有驗者。住是鷲巢池之樹。鷲乎。字氣比落。如此詔之時。字氣比其鷲墮地死。又詔之字氣比活爾者。更活。又在甜白橋之前。葉廣熊白橋。令三字氣比枯。亦令三字氣比生。爾名賜其曙立王謂倭者師木登美豐朝倉曙立王。登美二字以音 即曙立王菟上王二王。副其御子遣時。自那良戸一遇跛盲。自大坂戸一亦遇跛盲。唯木戸是腋月之吉戸ト而。出行之時。每到坐地。定品遲部也。

○太ト 我が國では古代には那トが行はれ後には龜トが行はれた。
○うけひまをさしむ 誓つて言はせること。
○鷲巢の池 大和國高市郡白橋村。
○葉廣熊白橋 葉の廣がつて繁つてゐる白橋の木。
○那良戸 那良山を越えて大和に入る口。
○大坂戸 河内より大坂山を越えて大和に入る口。
○木戸 紀伊より真土山を越えて大和に入る口。
○掖戸 脇道で正道ではない。
○品遲部 本字智別王の御名代。

ここに天皇患ひたまひて、御寢ませる時に、御夢に覺したまはく、「我が宮を天皇の御舍のごと造りたまはば、御子必ず御言とはむ。」かく覺したまふ時に、太トに占相へて、何れの神の御心ぞと求むるに、その崇は出雲の大神の御心なりき。かれ其の御子をして、其の大神の宮を拜ましめに遣りたまはむとする時に、誰を副はしめば吉けむとトふに、曙立の王、トに合へり。かれ曙立の王に科せて、うけひまをさしむらく、「此の大神を拜むによりて、誠驗あらば、この鷲巢の池の樹に住める鷲や、うけひ落ちよ。」かく詔りたまふ時に、其の鷲地に墮ちて死にき。又、「うけひ活きよ。」と詔り給へば、更に活きぬ。また甜白橋の前なる葉廣熊白橋をうけひ枯らし、またうけひ生かしき。かれ其の曙立の王に、倭老師木登美豐朝倉曙立の王と謂ふ名を賜ひき。即ち曙立の王菟上の王、二王を其の御子に副へて遣はす時に、那良戸よりは跛、盲遇はむ。大坂戸よりも跛、盲遇はむ。唯木戸ぞ掖戸の吉き戸とトへて、出で行かす時に、到ります地毎に品遲部を定めき。

故到於三出雲。拜訖大神。還上之時。肥河之中。作黑橋。仕奉假宮而坐。爾出雲

國造之祖。名岐比佐都美。飭青葉山而。立其河下。將獻大御食之時。其御子詔言。是於河下。如青葉山者。見山非山。若坐出雲之石碕之會宮。葦原色許男大神以伊都玖之祝大廷乎。問賜也。爾所遣御伴王等。聞觀見喜而。御子者。坐檣櫓之長穗宮而。貢上驛使。爾其御子。一宿婚肥長比賣。故竊伺其美人者。蛇也。即見畏遁逃。爾其肥長比賣患。光海原。自船追來故。益見畏以。自山多和。引越御船。逃上行也。於是覆奏言。因拜太神。大御子物詔故。參上來。故天皇歡喜。即返菟上王。令造神宮。於是天皇。因其御子。定鳥取部。鳥甘部。品遲部。大湯坐若湯坐。

○黒檣櫓 皮の儘の木を繋ぎ編んだ櫓。

○葦原色許男の大神 大國主神。

かれ出雲に到りまして、大神を拜み訖へて、還り上ります時に、肥の河の中に、黒檣櫓を作り、假宮を仕へ奉りて、坐さしめき。爾に出雲の造の祖、名は岐比佐都美、青葉の山を飾りて、其の河下に立てて、大御食獻らむとする時に、其の御子詔り給ひつらく、「この河下に青葉の山なせるは、山と見えて山にはあらず、若し出雲の石碕之會の宮にます、葦原色許男の大神をもち齋く祝が大殿か。」と問ひ給ひき。かれ御供に遣はされたる王たち、聞き歡び見喜びて、御子をば檣櫓の長穗の宮に坐せまつりて、驛使を上りき。

こゝに其の御子、一宿肥長比賣に婚ひましき。かれ其の美人を伺みたまへば、蛇なりき。即ち見畏みて遁けたまひき。

○船より追ひくる船で追つて来る。
○山のため 山の低い處。

こゝに其の肥長比賣患たみて、海原を光して船より追ひくれば、益見畏みて、山のたわより御船を引き越して、逃げ上りいでましつ。こゝに覆奏まをさく、「大神を拜みたまへるに因りて、大御子物詔りたまへる故に、まる上り來つ。」と申す。かれ天皇歡ばして、即ち菟上の王を返して、神の宮を造らしめたまひき。こゝに天皇、其の御子に因りて鳥取部、鳥甘部、品遲部、大湯坐、若湯坐を定めたまひき。

○鳥取部云々 鳥取部は鶴を捕へた爲、鳥甘部は其の鶴を飼ひ養つた功に依つて置かれたもの、品遲部以下は本牟智別の命の御名を後世に傳へる爲に定められたものらしい。

○かの后 沙本思賣

又隨其後之白。喚上美知能宇斯王之女等。比婆須比賣命。次弟比賣命。次歌疑比賣命。次圓野比賣命并四柱。然留比婆須比賣命。弟比賣命二柱而。其弟王二柱者。因甚凶醜。返送本土。於是圓野比賣。慙言同兄弟之中。以妾醜。被遷之事。聞於鄰里。是甚慙而。到山代國之相樂時。取懸樹枝而。欲死。故號其地。謂懸木。今云相樂。又到弟國之時。遂墮峻淵而死。故號其地。謂墮國。今云弟國也。またかの后のまをしたまひのまにく、美知能宇斯の王の御女たち、比婆須比賣の命、

- 本つ土 丹波國。
- 相樂 山城相樂郡
- 弟國 山城乙訓郡

次に弟比賣の命、次に歌凝比賣の命、次に國野比賣の命、并せて四柱を喚上げたまひき。然るに比婆須比賣の命、弟比賣の命、二柱を留めて、其の弟王二柱は、いと醜かりしに因りて、本つ土に返し送り給ひき。こゝに國野比賣、「同じき兄弟の中に、顔醜きによりて、還さゆること、鄰里に聞えむは、いと慙かし。」といひて、山代の國の相樂に到りませる時に、樹の枝に取り懸りて死なむとぞし給ひける。かれ其地の名を、懸木と謂ひしを、今は相樂といふなり。また弟國に到りませる時に、遂に深き淵に墮りてぞ死せ給ひぬる。かれ其地の名を墮國と謂ひしを、今は弟國といふなり。

又天皇。以三宅連等之祖。名多遲麻毛理。遣常世國。令求登岐士玖能迦玖能木實。自登下八。故多遲麻毛理遂到其國。採其木實。以三纏八纏牙八牙。將來之間。天皇既崩。爾多遲麻毛理。分三纏四纏牙四牙。獻于太后。以三纏四纏牙四牙。獻置天皇之御陵戸。而。擊其木實。叫哭以白。常世國之登岐士玖能迦玖能木實持參上侍。遂叫哭死也。其登岐士玖能迦玖能木實者。是今橘者也。此天皇。御年壹佰伍拾參歲。御陵在菅原之御立野中也。又其大后比婆須比賣命之時。定石祝作。又定土師部。此后者。葬狹木之

- 非時の云々 四時の別なくある橘の實
- 纏八纏 枝の纏折つた藤橘八つ。
- 牙八牙 枝の纏折つて葉を取り除いた手橘八つ。
- 大后 比婆須比賣の命。
- 御陵の戸 戸は前さいふに同じ。
- 哭びて 大聲で泣くこと。
- 菅原の御立野 大和國生駒郡都連村。
- 石祝作り 祝は棺の誤りであらうと異淵翁は言はれた。
- 土師部 埴輪を作る者で野見宿禰が土師の連の姓を賜はつた。

寺間陵也。

またこの天皇、三宅の連等が祖、名は多遲麻毛理を、常世の國に遣はして、非時の香の菓を求めしめたまひき。かれ多遲麻毛理遂に其の國に到りて、其の木の實を採りて、纏八纏牙八牙を將ちて、まる來つる間に、天皇既く崩りましぬ。こゝに多遲麻毛理、纏四纏牙四牙を分けて、大后に獻り、纏四纏牙四牙を、天皇の御陵の戸に獻り置きて、其の木の實を擊けて、叫び哭びて、「常世の國の非時の香の菓を持ちてまるのほりて侍ふ。」とまをして、遂に哭び死にき。其の非時の香の菓といふは、今の橘なり。

この天皇、御年壹百五拾參歲、御陵は菅原の御立野の中にあり。

また其の大后比婆須比賣の命の時、石祝作りを定めたまひ、また土師部を定め給ひき。

この後は狹木之寺間の陵に葬しまつりき。

景行

○大帶日子淤斯呂和氣の天皇 景行天皇
○日向 大和國磯城郡
○小碓命 日本武尊

大帶日子淤斯呂和氣天皇。坐_二日向之日代宮。治_三天下也。此天皇。娶_二吉備臣等之祖。若建吉備津日子之妻。名針間之伊那毘能大郎女。生御子。櫛角別王。次大碓命。次小碓命。亦名倭男具那命。具那二字以_レ音次倭根子命。次神櫛王。五柱又娶_二八尺入日子命之妻。八坂之入日賣命。生御子。若帶日子命。次五百木之入日子命。次押別命。次五百木之入日賣命。又妾之子。豐戶別王。次沼代郎女。又妾之子。沼名木郎女。次香余理比賣命。次若木之入日子王。次吉備之兄日子王。次高木比賣命。次弟比賣命。又娶_二日向之美波迦斯毘賣_一生御子。豐國別王。又娶_二伊那毘能大郎女之弟。伊那毘能若郎女。自伊下四生字以_レ音御子。眞若王。次日子人之大兄王。又娶_二倭建命之曾孫。名須賣伊呂大日子王。自須呂四字以_レ音之妻。詞具漏比賣。生御子。大枝王。
大帶日子淤斯呂和氣の天皇。纏向之日代之宮にましまして、天の下治しめしき。この天皇、吉備の臣等が祖、若建吉備津日子の御女、名は針間の伊那毘能大郎女に娶ひまして、生みませる御子、櫛角別の王。次に大碓の命。つぎに小碓の命。またの御名は倭男具那の命。次に倭根子の命。次に神櫛の王。(五柱)また八尺の入日子の命の御女、八坂之入日賣の命に娶ひまして、生みませる御子、若帶日子の命。次に五百木之入日子の命。次に

押の別の命。次に五百木の入日賣の命。またの妾の御子、豊戸別の王。次に沼代の郎女。またの妾の御子、沼名木の郎女。次に香余理比賣の命。次に若木之入日子の王。次に吉備之兄日子の王。次に高木比賣の命。次に弟比賣の命。また日向之美波迦斯毘賣を娶して、生みませる御子、豊國別の王。また伊那毘能大郎女の弟、伊那毘能若郎女を娶して、生みませる御子、眞若の王。次に日子人之大兄の王。また倭建の命の曾孫、名は須賣伊呂大中つ日子の王の妻、詞具漏比賣を娶して、生みませる御子、大枝の王。

凡此大帶日子天皇之御子等。所_レ錄廿一王。不_レ入_二記五十九王。并八十王之中。若帶日子命與_二倭建命。亦五百木之入日子命。此三王。負_二太子之名。自_レ其餘七十七王者。悉別_三賜國之國造。亦和氣及_二稻置縣主_一也。故若帶日子命者。治_三天下也。小碓命者。平_三東西之荒神。及_二不_レ伏人等_一也。次櫛角別王者。茨田下連等之祖次大碓命者。守君。大田君。次神櫛王者。木國之酒部阿比古。宇陀酒部之祖。次豐國別王者。日向國造之祖。すべて此の大帶日子の天皇の御子等、書に錄せる二十一王、記さざる五十九王、并せて八十王ませるなかに、若帶日子の命と倭建の命、また五百木之入日子の命と、此の

○太子やが天皇の御位を嗣いで天の下を治す御子の意。

三王ぞ太子とまをす御名を負はして、其れより餘七十七王たちは、悉に國々の國の造、また別、稻置、縣主に別け賜ひき。
かれ若帶日子の命は、天の下治しめしき。小碓の命は、東西の荒ぶる神、伏はぬ人どもを平け給ひき。次に櫛角別の王は、茨田の下連等が祖。次に大碓の命は、(守の君、太田の君、島田の君の祖。)次に神櫛の王は、(木の國の酒部之阿比古、宇陀の酒部の祖。)次に豊國別の王は、(日向の國の造の祖なり。)

○定めて 人を遣はして實地檢分させて

於是天皇。聞看定三野國造之祖。神大根王之女。名兄比賣弟比賣二孃子其容姿麗美一而。遣其御子大碓命。以喚上。故其所遣大碓命。勿召上而。即已自婚其二孃子。更求二他女人。詐名其孃女而貢上。於是天皇知其他女。恆令經長眼。亦勿婚而。惚也。故其大碓命。娶三兄比賣一生子。押黑之兄日子王。此者三野之字。泥須和氣之祖。亦娶三弟比賣一生子。押黑弟日子王。此者牟宜都君等之祖。
こ、に天皇、三野の國の造の祖、神大根の王の御女、名は兄比賣弟比賣二孃子、其れ顔好きをきこしめし定めて、其の御子大碓の命を遣はして喚上げたまふ。かれ其の遣は

○長眼 心を留めて久しく注意すること
○經しめ 繰り返す
○思はしめ 素知らぬ振りをして空まはけること。
○三野 美濃。

さえたる大碓の命、召上げずて、己と自ら其の二孃子に淫けて、さらに他女を求めて、其の孃子とまをして貢りき。こ、に天皇其れ他女なることを知らしめして、恆に長眼を經しめ、また婚しもせずて、物思はしめたまひき。かれ其の大碓の命、兄孃に娶ひて生みませる御子、押黒之兄日子の王。(此は三野の宇泥須の和氣の祖。)また弟比賣に娶ひて生みませる御子、押黒の弟日子の王。(此は牟宜都の君等が祖なり。)

○田部 御料田を作らせる爲に置かれた部民。
○淡の水門 安房に相模三浦神との間の海峡。
○膳 膳天。
○坂手の池 大和國磯城郡川東村。

此之御世。定田部。又定東之淡水水門。又定膳之大伴部。又定倭屯家。又作坂手池。即竹植其堤也。
此の御世に田部を定めたまひ、また東の淡の水門を定めたまひ、また膳之大伴部を定めたまひ、また倭の屯家を定めたまひ、また坂手の池を作りて、其の堤に竹を植ゑしめたまひき。

天皇詔小碓命。何汝兄於三朝夕之大御食。不參出來。專汝泥疑教覺。泥疑二字以レ如此詔以後。至レ于三五日。猶不參出。爾天皇問賜小碓命。何汝兄久不參出。若有未レ誨乎。

○朝夕の大御食 天皇の朝夕の御食事。

○ねぎ 御苦勞であるがご懇願すること
○其の枝 手足。

答白既爲泥疑也。又詔如何泥疑之。答曰。朝署入廁之時。持捕檢批而。引闕其枝。裏薦投棄。
天皇、小碓の命に詔りたまはく、「何とかも汝の兄、朝夕の大御食にまる出來ざる。専ら汝ねぎ教へ覺せ。」と詔りたまひき。かく詔りたまひて後、五日といふまでに、猶まる出たまはざりき。かれ天皇小碓の命に問ひたまはく、「何ぞ汝の兄久しくまる出來ざる。若し未だ誨へずありや。」と問ひたまへば、「既にねぎつ。」とまをし給ひき。また、「如何さまにか、ねぎつる。」と詔りたまへば、まをしたまはく、「朝署に廁に入りたりし時、捕へて檢み批ぎて、其の枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつ。」とぞまをしたまひける。

於是天皇。惶其御子之建荒之情而。詔之。西方有熊曾建二人。是不伏无禮人等。故取其人等而遣。當此之時。其御髮結額也。爾小碓命。給其姨倭比賣命之御衣御裳。以劔納于御懷而幸行。故到于熊曾建之家。見者。於其家邊軍圍三重。作室以居。於是言動爲御室樂。設備食物。故遊行其傍。待其樂日。爾臨其樂日。如下童女之髮梳垂其結御髮。服其姨之御衣御裳。既成童女之姿。交立女人之中。

○懐みまして 些か恐れをなし給うて。
○熊曾 熊襲。
○御髮御額に結はせり これは當時十五六歳の少年の髪ひで尊も時に御年十六歳と書紀にある。

入坐其室内。爾熊曾建兄弟二人。見感其孀子。坐於己中而。盛樂。故臨其酣時。自懷出劔。取熊曾之衣衿。以劔自其胸刺通之時。其弟建。見畏逃去。乃追至其室之椅本。取其背皮劔。自尻刺通。爾其熊曾建白言。莫動其刀。僕有白言。爾暫許押伏。於是白言。汝命者誰爾。詔吾者坐纏向之日代宮。所不知大八嶋國。大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子。名倭男具那王者也。意禮熊曾建二人。不伏無禮聞看而。取殺意禮詔而遣。爾其熊曾建。白信然也。於西方。除吾二人。無建強人。然於大倭國。益吾二人而。建男者坐邪理。是以吾獻御名。自今以後應稱倭建御子。是事白訖。即如熟蕨振折而殺也。故自其時稱御名。謂倭建命。然而還上之時。山神河神。及穴戸神。皆言向和而參上。
こゝに天皇其の御子の建く荒き御心を懐みまして、詔りたまはく、「西の方に熊曾建二人あり。これ伏はず、禮无き人等なり。かれ其の人等を取れ。」と詔りたまひて遣はしき。此の時に當りて、其の御髮御額に結はせり。こゝに小碓の命、其の姨倭比賣の命の御衣御裳を給はり、劔を御懷に納れて幸しき。
かれ熊曾建が家に到りて見たまへば、其の家の邊に軍三重に圍み、室を作りてぞ居りけ

○新室樂 新築落成の祝宴。
 ○言ひ動む 聲高に言ひ騒ぐこと。一般に評判なること。
 ○既に 全く。
 ○衣の袴を取りて 胸倉を掴んで。
 ○椅の本 階下。

○おれ 「おれれ」に同じ。
 ○大倭の國 畿内の大和を指す。

る。こゝに、「新室樂せむ。」と言ひ動みて、食物を設け備へたりき。かれ其の傍を遊行きて其の樂する日を待ちたまひき。こゝに其の樂の日になりて、其の結はせる御髪を童女の髪のごと梳り垂れ、其の嫉の御衣御裳を服して、既に童女の姿に成りて、女人どもの中に交り立ちて、其の室内に入りまじき。こゝに熊曾建兄弟二人、其の嬪子を見感でて、己が中に坐せて、盛りに樂けたり。かれ其の酣なる時になりて、御懷より劍を出し、熊曾が衣の袴を取りて、劍もて其の胸より刺し通し給ふ時に、其の弟建 見畏みて逃げ出でき。乃ち其の室の椅の本に追ひ至りて、其の背を取らへ、劍もて尻より刺し通したまひき。こゝに其の熊曾建まをしつらく、「其の御刀をな動かし給ひそ。僕申すべき事あり。」とまをす。かれ暫許しておし伏せたまふ。こゝにまをしつらく、「汝が命は誰にますぞ。」「吾は嚮向之日代の宮にましまして、大八島國知らしめす、大帶日子淤斯呂和氣の天皇の御子、御名は倭男具那の王にます。おれ熊曾建二人、伏はず、禮なしときこしめして、おれを殺れと詔り給ひて遣はせり。」とのりたまひき。こゝに其の熊曾建、「信にしかまきむ。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭の國に、吾二人にまして建き男は坐しけり。是を以て吾、御名を獻らむ。今より後倭建の御子と稱へまをすべし。」とまをしき。この

○熱瓜 熱した瓜の蒂の落ち易いことに譬へたのである。
 ○山の神河の神 山又は河にある邪神。
 ○穴戸の神 長門豊前邊に住んで居た惡神。

○結友 親友。
 ○赤橋 樺樹。
 ○詐刀 木刀。
 ○刀合はさむ 易刀の風として刀を打ち合はせたのである。

事まをし訖へつれば、即ち熱瓜のごと、振り拆きて殺し給ひき。其の時よりぞ御名を稱へて、倭建の命とはまをしける。然して還り上ります時に、山の神河の神また穴戸の神を皆言向け和してまの上りまじき。

即ち坐出雲國。欲殺其出雲建二而。到即結友。故竊以赤橋一作詐刀。爲御佩。共沐肥河。爾倭建命。自河先上。取佩出雲建之解置横刀二而。詔爲易刀。故後出雲建自河上而。佩倭建命之詐刀。於是倭建命。誂云伊舍合刀。爾各拔其刀二之時。出雲建不得拔詐刀。即倭建命拔其刀二而。打殺出雲建。爾御歌曰。夜都米佐須。伊豆毛多那流賀。波那流多知。都豆良佐波麻岐。佐味那志爾阿波禮。故如此撥治參上。覆奏。

即ち出雲の國に入りまして、其の出雲建を殺らむとおもほして、到りまして即ち結友したまひき。かれ竊かに赤橋もて刀に作りなして、御佩かして、共に肥の河に沐したまひき。こゝに倭建の命河より先づ上りまして、出雲建が解き置ける横刀を佩かして、「易刀せむ。」と詔りたまふ。かれ後に出雲建河より上りて、倭建の命の詐刀を佩きき。こゝに倭建の命、「いざ刀合はさむ」と誂へたまふ。かれ各其の刀を抜く時に、出雲建詐刀を得抜か

す。即ち倭建の命、其の刀を抜かして、出雲建を打ち殺したまひき。かれ御歌よみしたまはく、

八雲刺す 出雲建が 佩ける劔 黒葛多纏き 眞身無しにあはれ
かれかく撥ひ平らけて、まる上りて、覆奏したまひき。

○八雲刺す 八雲立つに同じ、この歌は眞身無し さは撥頭語、刀身の無い事 時人の作としてある

爾天皇亦願詔倭建命。言向和平東方十二道之荒夫琉神。及摩都樓波奴人等。而。副吉備臣等之祖。名御鉏友耳建日子。而遣之時。給比比羅木之八尋矛。比羅三 故受レ命。罷行之時。參入伊勢大御神宮。拜神朝廷。即白其姨倭比賣命者。天皇既所以思吾死乎。何擊遣西方之惡人等。而。返參上來之間。未レ經幾時。不レ賜軍衆。今更平遣東方十二道之惡人等。因レ此思惟。猶所思看吾既死焉。患泣罷時。倭比賣命賜三草那藝劔。那藝二字 亦賜御囊。而。詔若有急事。解中茲囊口。

○願て 重ねて。
○比々羅木之八尋矛 この矛を授け給ふ事は後世出征將軍に節刀を賜ふのと同じである。

こ、に天皇、また願て倭建の命に、「東の方十二道の荒ふる神、また伏はぬ人どもを言向け和せ。」と詔りたまひて、吉備の臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣はす時に、比々羅木之八尋矛を賜ひき。かれ命を受けたまはりて、罷り行でます時に、伊勢の大

○神の朝廷 天照大神の御門。

○御囊 火打を入れた袋。

御神の宮に参りまして、神の朝廷を拜みたまひて、其の姨倭比賣の命にまをしたまへらくは、「天皇はやく吾を死ねとや思ほすらむ。如何なれか、西の方の惡人どもを撃りに遣はして、返りまる上り來し間、幾時あらねば、軍衆をも賜はずて、今更に東の方の十二道の惡人どもを平けに遣はすらむ。これに因りて思へば、猶吾早く死ねと思ほしめすなりけり。」とまをして、患ひ泣きて罷ります時に、倭比賣の命草薙の劔を賜ひ、また御囊を賜ひて、「若し急の事あらば、この囊の口を解きたまへ。」となも詔りたまひける。

故到尾張國。入坐尾張國造之祖。美夜受比賣之家。乃雖思將婚。亦思還上之時將婚。期定而。幸于東國。悉言向和平山河荒神。及不伏人等。故爾到相武國之時。其國造詐白。於此野中有大沼。住是沼中之神。甚道速振神也。於是看三行其神。入坐其野。爾。其國造。火著其野。故知見欺而。解開其姨倭比賣命之所給囊口而見者。火打有其裏。於是先以其御刀刈撥草。以其火打而打出火。著向火而燒退。還出。皆切滅其國造等。即著火燒。故其地者。於今謂燒遺也。かれ尾張の國に到りまして、尾張の國の造の祖、美夜受比賣の家に入りましき。乃ち

○相武の國 相模國
○道速振る神 墨狀なる神、勢ひ猛き神

○向火 燒ける火に向つて逆に此方から火を掛けること。
○燒遣 駿河國志太郡燒津村。

婚さむと思ほししかども、また還り上りたらむ時にこそ婚さめと思ほして、契り置きて、東の國にいであして、山河の荒ぶる神、又伏はぬ人どもを、悉に平け和したまひき。かれこゝに相武の國に到りませる時に、其の國の造、許りまをさく、「此の野の中に大沼あり、この沼の中に住める神、甚く道速振る神なり。」とまをす。こゝに其の神を看そなはしに、其の野に入りますれば、其の國の造、其の野に火をなも著けたりける。かれ欺かえぬと知ろしめして、かの嫉、倭比賣の命の給へる御囊の口を解き開けて見たまへば、其の裏に火打ぞありける。こゝに先づ其の御刀もて、草を刈り撥ひ、其の火打をもちて火を打ち出で、向火を著けて燒き退けて、還り出であして、其の國の造、共を皆切り滅ほし、即ち火を著けて燒きたまひき。かれ其地をば今に燒遣とぞ謂ふ。

自レ其入幸。渡三走水海之時。其渡神興レ浪。廻船不レ得三進渡。爾其后名弟橘比賣命白之。妾易三御子二而入三海中。御子者。所レ遣之政遂應三覆奏。將レ入レ海時。以三菅疊八重。皮疊八重。絶疊八重。敷レ于三波上而。下三坐其上。於是其暴浪自伏。御船得進。爾其后歌曰。佐泥佐斯。佐賀牟能哀怒邇。毛由流肥能。本那迦邇多知月。斗比斯岐美波母。故

○走水の海 相模國三浦郡

○まけの政 任じ遣はされた東國平定の大業を指す。

○さねさし 相模の枕詞。
○小野 愛甲郡玉川村大字小野といふがある。

七日之後。其后御櫛依レ于三海邊。乃取三其櫛。作三御陵二而治置也。それより入りいまして、走水の海を渡ります時に、其の波の神浪を興て、御船廻ひて得進み渡りまさす。こゝに其の後、御名は弟橘比賣の命まをしたまはく、「妾御子に易りて海に入りなむ。御子はまけの政、遂けて、覆奏したまふべし。」とまをして、海に入りまさむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、絶疊八重を波の上に敷きて、其の上に下りまひき。こゝに其の暴浪、自ら伏きて、御船得進みき。かれ其の後の歌はせる御歌。
さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも
かれ七日ありて後に、其の後の御櫛海邊に依りたりき。乃ち其の御櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

自レ其入幸。悉言三向荒夫琉蝦夷等。亦平三和山河荒神等二而。還上幸時。到三足柄之坂本。於下食三御粮一處。其坂神化三白鹿二而來立。爾即以三其咋遣之蒜片端。待打者。中三其目二乃打殺也。故登三立其坂。三款。詔三云阿豆麻波夜。以三音也。故號三其國二謂三阿豆麻一也。それより入りいまして、悉に荒ぶる蝦夷どもを言向け、また山河の荒ぶる神どもを和

○足柄の坂本 相模の足柄
 ○御根 乾飯
 ○昨し遣り 食ひ残しの意
 ○其の故 書紀には上野國磯日峠としてある
 ○吾嬬はや 海に入り給うた弟橘姫命を想うて歎き給うた辭

○酒折 甲斐國西山梨郡大字酒折村
 ○新治筑波 常陸國の二郡を指す
 ○御火燒の老人 庭燎を焚いて明りを取つて居る老夫
 ○かくなべて 日敷を計ふれば

して、還り上りますときに、足柄の坂本に到りまして、御根聞食す處に、其の坂の神、白き鹿になりて來立ちき。かれ其の昨し遣りの蒜の片端もて、待ち打ちたまひしかば、其の目に中りて、打ち殺さえたりき。かれ其の坂に登り立ちて、ねもころに歎かして、「吾嬬はや。」と詔りたまひき。かれ其の國を阿豆麻とはいふなり。

即自其國越出甲斐。坐酒折宮之時。歌曰。邇比婆理。都久波袁須疑耳。伊久用加泥都流。爾其御火燒之老人。續御歌以歌曰。迦賀那倍豆。用邇波許許能用。比邇波登袁加袁。是以譽其老人。即給東國造一也。

即ち其の國より越えて、甲斐に出でて、酒折の宮にましましける時に、歌ひたまはく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か宿つる

こゝに其の御火燒の老人御歌を續きて、

かくなべて 夜には九夜 日には十日を

とぞ歌ひける。こゝを以て其の老人を譽めて、東の國の造にぞなしたまひける。

○巖の瀾 婦人の被衣の瀾 前出
 ○久方の 天の枕詞
 ○眞渡る代 鋭い鎌の刃に觸れて知られる細い代
 ○枕かむ 枕しよら

自其國越三科野國。乃言三向科野之坂神。而還來尾張國。入三坐先日所期美夜受比賣之許。於是獻三三御食之時。其美夜受比賣。捧三三御酒盞以獻。爾美夜受比賣。其於三意須比之瀾。意須比三著三月經。故見三其月經。御歌曰。比佐迦多能。阿米能迦具夜麻。斗迦麻邇。佐和多流久毘。比波煩曾。多和夜賀比那袁。麻迦牟登波。阿禮波須禮杼。佐泥牟登波。阿禮波意母閉杼。那賀那勢流。意須比能須蘇爾。都紀多知邇那理。爾美夜受比賣。答御歌曰。多迦比迦流。比能美古。夜須美斯志。和賀意富岐美。阿良多麻能。登斯賀岐布禮婆。阿良多麻能。都紀波岐閉由久。宇倍那宇倍那。岐美麻知賀多爾。和賀那勢流。意須比能須蘇爾。都紀多多那牟余。故爾御合而。以其御刀之草那藝劍。置其美夜受比賣之許。而取三伊服岐能山之神。幸行。

その國より科野の國に越えまして、科野の坂の神を言向けて、尾張の國にかへり來まして、先に期りおかしし美夜受比賣の許に入りましつ。こゝに大御食獻る時に、其の美夜受比賣大御酒盞を捧けて獻る。こゝに美夜受比賣其れ藝の瀾に月經著きたり。かれ其を見そなはして、御歌よみしたまはく、

久方の 天の香山 利鎌に 眞渡る代 弱細 手弱腕を 枕かむとは 吾はすれど

○高光 日の御子の冠辭。
○安見し 天下を安らげしめす
○新玉の年及び月の冠辭。
○諸な 尤もなこまよ。

○伊服岐能山 近江美濃に跨る伊吹山。
○取りに 擊ちに。

○言舉して 口に出して言ひ現はして。

眞寢むとは 吾は思へど 汝が著せる 襲の欄に 月立ちにけり
かれ美夜受比賣御歌に答へて歌ひけらく、
高光る 日の御子 安見しし 吾が大君 新玉の 年が來れば 新玉の 月は來經
往く 諸な諸な 君待ち難に 吾が著せる 襲の欄に 月立たなむよ
かれこゝに御合ひまして、其の御刀の草薙の劔を、其の美夜受比賣の許に置きて、伊服岐能山の神を取りにいでましき。

於是詔。茲山神者徒手直取而。騰其山之時。白猪逢于山邊。其大如牛。爾爲言
擧而詔。是化白猪者。其神之使者。雖今不殺。還時將殺而騰坐。於是零大冰雨。
打惑倭建命。此化白猪者。非其神之使者。當故還下坐之。到玉倉部之清泉。以息坐之
時。御心稍寤。故號其清泉。謂居寤清泉也。

こゝに詔りたまはく、「この山の神は、徒手に直に取りてむ。」とのり給ひて、其の山に騰
ります時に、山の邊に白猪逢へり、其の大きな牛の如くなりき。かれ言舉して詔りたまは
く、「この白猪になれるものは、其の神の使者にこそあらめ。今殺らすとも、還らむ時に殺

○大冰雨 大きな雪
○正身 正體。

○居寤の清水 醒ヶ
井。

りてむ。」とのたまひて騰りましき。こゝに大冰雨を零らして、倭建の命を打ち惑はしまつ
りき。(此の白猪に化れるものは、其の神の使者にはあらずて、其の神の正身にぞありけむ
を、言舉し給へるによりて、惑さえたまへるなり。)かれ還り下りまして、玉倉部の清泉に
到りて息ひませる時に、御心稍寤めましき。かれ其の清泉を居寤の清泉とぞ謂ふ。

自其處發。到當藝野上之時詔者。吾心恆念自虛翔行。然今吾足不を得歩。成當
藝斯形。自當下三 故號其地謂當藝也。自其地差少幸行。因甚疲。爾御杖稍歩。
故號其地謂杖衝坂也。到坐尾津前一松之許。先御食之時。所忘其地御刀。
不レ失猶有。爾御歌曰。袁波理邇。多陀邇牟迦幣流。袁都能佐岐那流。比登都麻都阿勢
袁。比登都麻都。比登邇阿理勢。多知波氣麻斯袁。岐奴岐勢麻斯袁。比登都麻都阿勢
袁。自其地幸。到三重村之時。亦詔之吾足如三重勾而甚疲。故號其地謂三
三重。

其處より發たして、當藝野の上に到りましし時に詔り給へるは、「吾が心恆は虛よりも翔
り行かむと念ひつるを、今吾が足得歩まず、舵の形に成れり。」とぞ詔り給ひける。かれ其

○上 あたり。
○處よりも 空をも

○富嶽 美濃國多壽郡
 ○杖衝坂 伊勢國三重郡内部村
 ○尾津の前 伊勢國桑名郡多度村
 ○吾兄を 吾兄よそ松を懐しんで呼びかけたのである。
 ○三重の勾なして 法螺貝状の勾餅といふ菓子の様になつて

地を常藝と謂ふ。其地より差少し幸すに、いたく疲れませるに因りて、御杖を衝かして、稍に歩みましき。かれ其地を杖衝坂と謂ふ。尾津の前の一つ松の許に到りませるに、先に御食せし時、其地に忘らしたりし御刀、失せず猶有りき。かれ御歌よみし給はく、尾張に 直に向へる 尾津の崎なる 一つ松 吾兄を 一つ松 人にありせば 太刀 佩けましを 衣著せましを 一つ松 吾兄を 其地より幸して、三重の村に到りませる時に、また、吾が足三重の勾なして、甚く疲れたり。」とのりたまひき。かれ其地を三重と謂ふ。

自其幸行而到能煩野之時。思國以歌曰。夜麻登波。久爾能麻本呂婆。多多那豆久。阿袁加岐夜麻。基母禮流。夜麻登志。宇流波斯。又歌曰。伊能知能。麻多那牟比登波。多多美許母。幣具理能夜麻能。久麻加志賀波袁。宇受爾佐勢。曾能古。此歌者。思國歌也。又歌曰。波斯那夜斯。和岐幣能迦多用。久毛草多知久母。此者片歌也。此時御病甚急。爾御歌曰。袁登賣能。登許能辨爾。和賀淤岐斯。都流岐能多知。曾能多知波夜。歌竟即崩。爾貢上驛使。

○能煩野 伊勢國鈴鹿郡
 ○國恩はして 故郷の大和を慕ひ給うて
 ○まほろば 丘又は山で囲まれて居る國
 ○たゝなづく 枕詞
 ○疊菰 平葦の枕詞
 ○幣華に挿せ 頭にさしかざせ。
 ○雲居 雲に同じ。
 ○つるぎの太刀 草薙劍。

そこより幸して、能煩野に到りませる時に、國恩はして歌ひたまはく、倭は 國のまほろば たゝなづく 青垣山隠れる 倭し美はし また、

命の 全けむ人は、疊菰 平葦の山の 隠白橋が葉を 幣華に挿せ その子

この御歌は、思國歌なり。また歌ひたまはく、

はしけやし 吾家の方よ 雲居起ち來も

こは片歌なり。此時御病急になりぬ。こゝに御歌を、

嬢女の 牀の邊に 吾が置きし つるぎの太刀 其の太刀はや

と歌ひ竟へて、即ち崩りましぬ。かれ驛使を上りき。

於是坐倭后等。及御子等。諸下到而。作御陵。即爾三旬廻其地之那豆岐田自那下三而。

哭爲歌曰。那豆岐能。多能伊那賀良迦。伊那賀良爾。波比母登富呂布。登許呂豆良。於是化三八尋白智鳥。翔天而。向濱飛行。智字爾其后及御子等。於其小竹之刈杖。雖足跡破。忘其痛。以。哭追。此時歌曰。阿佐士怒波良。許斯那豆牟。蘇良波由賀受。阿斯用由久那。又入其海鹽而。那豆美此三字行時歌曰。宇美賀由氣婆。許斯那豆牟。意富迦波

良能。宇惠具佐。宇美賀波。伊佐用布。又飛居其磯之時歌曰。波麻都知登理。波麻用波由迦受。伊蘇豆多布。是四歌者。皆歌其御葬也。故至今其歌者。歌天皇之御葬也。故自其國。飛翔行。留河內國之志幾。故於其地作御陵。鎮坐也。即號其御陵。謂白鳥御陵也。然亦自其地更翔天以飛行。凡此倭建命。平國廻行之時。久米直之祖名七拳經。恒爲膳夫以從仕奉也。

こゝに倭にます后たち、また御子たち、諸下りきまして、御陵を作りて、其地の靡附き田に芻芻ひ廻りて、哭しつゝ、歌ひたまはく、

靡附きの 田の稻幹に 稻幹に 蔓廻ろふ 藤葛

こゝに八尋白智鳥になりて、天に翔りて、濱に向きて飛び行ましぬ。かれ其の后たち御子たち、其地なる小竹の刈杖に、御足切り破るれども、其の痛きをも忘れて、哭くく追ひいでましき。此の時の御歌。

淺小竹原 腰煩む 虚空は行かず 足よ行くな

また其の海鹽に入りて、煩み行きましし時の御歌。

海が行けば、腰煩む 大河原の 植草 海がは いそよふ

○靡附き田 御陵の周圍に添うた田地。
○藤葛 蔓草の一種
○白智鳥 書紀には白鳥とある。
○小竹の刈杖 小竹を伐つた杖。
○腰煩む 小竹の腰まであるを別け行くまであるを別け行く
○足よ行くな 足も思ふ儘には進まない
○海が「が」は處の意の添語。
○いそよふ たぬら

○濱よ 濱より。

○志幾 河内國志幾郡志貴神社。
○白鳥の御陵 河内國南河内郡古市村。

また飛びて其の磯に居たまへる時の御歌。

濱つ千鳥 濱よは行かず 磯傳ふ

この四歌は、皆其の御葬に歌ひたりき。かれ今に其の歌は、天皇の大葬に歌ふなり。かれ其の國より飛び翔り行まして、河内の國の志幾に留まりましき。かれ其地に御陵を作りて、鎮まりまさしめき。この御陵を白鳥の御陵とぞ謂ふ。然れども又其地より更に天翔りて飛び行ましぬ。

すべて此の倭建の命、國平けに廻りましし時、久米の直の祖、名は七拳經、いつも膳夫として、御伴仕へまつりき。

此倭建命。娶伊玖米天皇之女。布多遲能伊理毘賣命。自布下八生御子帶中津日子命。

柱一又娶其入海弟橘比賣命。生御子若建王。柱一又娶近淡海之安國造之祖。意富多牟和氣之女。布多遲比賣。生御子稻依別王。柱一又娶吉備臣建日子之妹。大吉備建比賣。生御子建見兒王。柱一又娶山代之玖麻毛理比賣。生御子足鏡別王。柱一又一妻之子。息長田別王。凡是倭建命之御子等。并六柱。故帶中津日子命者。治天下也。次稻依別